

いなる名譽職であるから、これは大倫敦市を支配する主腦かと思つたら、焉んぞ知らん、今では大倫敦市の一區に過ぎぬ舊倫敦の區長様で、大倫敦市には、他に何人も市長がある。されどこの倫敦市長だけが市長卿と云ふ八釜しい名前で、昔から此都の大立物であり、一年に一度宛郡參事會員中の有力者から撰任する名譽職で、云はゞ倫敦の殿様なのである。其撰舉には、郡參事會員が、鬘を被り寛袍を着たる古代式服装で、古風に葉を敷いた一室で、殿かな儀式を執り行ひ、羅馬の古老達が政治の相談をした様子もかくやと思はるゝばかりである。初て十一月九日の市長就任式は、倫敦中の大祭で、其當日が皇帝陛下の誕辰であると云ふよりは、市長就任式日なので賑はふのだ。假粧行列があり、大宴會がある。昨年就任の市長卿は本屋であるので、式日には文學に因んだ假粧行列があつたとの事だ。倫敦の市長卿は、これほど豪い名譽職だが、實際の権力から云へば區長に過ぎないらしい。而して倫敦市の自治政は、郡參事會の名を以て執り行はるゝのである。

教育で見ても、獨乙や日本の如き階序的組織で無い。私立學校からでも、私塾からでも、家庭からでも、何處からでも大學の門は潜られる。別に國家教育の制度などと云ふ面倒なものは無い。自由を誇る英國人は、教育制度の束縛を受けずして、而して教育を受くることの自由を

棄てず、これで文教大いに興り、又た英國教育の特質たる品性教育の目的が達せらるゝのである。オックスフォールド大學やケンブリッジ大學は、日新の學問を攷究する所でありながら、創立時代の過ぎし昔の習慣を保存してゐる。オックスフォールド大學のクライスト、チャーチ大學では、毎夜九時五分に百〇一の鐘音を撞くことが、その創立せられた十六世紀の當時から、今日まで依然として變ら無い。これは創立當時百〇一人の生徒があつて、一人宛に閉門の時間を報ずる趣意で鳴らした舊例なのだ。又たオックスフォールド大學入學の宣誓式には、生徒は校舎の階段にて石彈を弄ぶべからずとか、赤や青の華美な衣服を纏ふべからずとかとの心得を讀み聞かされる。これも創立の頃は、大學とはいへ、先づ小學校ぐらゐなもの、生徒はいづれも幼稚者であつたからして、かゝる禁制が必要であつたのに、それを今日の髯の生えた大學生にまでも適用するとは、保守の精神から學校の歴史を誇ることで、而も頗る趣味がある。獨乙大學で新入學生に花柳病豫防の心得書を渡すのとは大變な差だ。而してかやうな下ら無ういやな舊慣さへ保守する英國大學が、學問に於ては舊を棄て新を取り、哲理の固陋に泥まずして、科學の嶄新なるを尊び、一縷の髮を割くやうな屁理窟に流れずして、人間社會の實益たるを重んずるの風があることも、亦た英國人の特質を示してゐる。

之を女子の教育で見ても、矢張り保守的で、米國のやうに女子大學が諸地に設立せられてゐるので無い。米國では、上流社會の女子が、女子大學へ入るのを一の流行としてゐる。例へば去年はヴァツサー大學が流行つたが、今年はプリンモアであると言ふやうな風である。女子大學も亦た青年女子の社交場たるの觀がある。然るに英國では、オックスフォールドにもケンブリッヂにも各々一二の女子大學はあるけれども、之へ入學するもの、多くは、資力の乏しき家庭の女子で、將來教師にてもなつて獨立しやうとの目的を抱いてゐるものである。中流以上の富有な家庭では、娘を學校へ出さず、大學を卒業した位の學力のある家庭教師を雇うて學問を授ける。要するに其の女子を教育する一般の目的は、良妻賢母を作るにあつて、英國女流界の名物たる女權黨員を起すのが、必ずしも其本意では無いやうだ。

英國では、英國製の品物と云へば、即ち上等品なので、舶來品は下等となつてゐる、獨乙品などは「廉からう、悪からう」と蔑むが、實際また下等なのである。英國人は「英國製」なる名稱を自慢するので、優等の製造品、商品を見れば、假令外國品であつても、之は「英國製」だと言ふ、而して又た「英國製」は優等なのであるから、威張られても仕様が無い。時計を例に取つても、英國では上等品のみを製造して、其價も不廉だか、頗る堅牢であり、安時計は瑞西や獨乙

から輸入する。

一條の道路を通解な田舎へ開通するにしても、最初に思ひ切つた金をかけて、堅牢なるものを作るから、やれ風だ、それ雨だと云ふ度に修繕を要する危かしいものは無い。倫敦市の場末で道普請をするのを見たが、それは一念の入つたもので、碎石にアスファルトを交ぜたものを舗さ詰めた上を大器械で平らす、その上にまたセメントを塗つてゐた。これだから交通の繁しさに拘らず、容易に破壊せぬ。瓦斯管などを埋める必要があつて、道路を掘り起してゐるのを見ると、鶴嘴鉄で、岩でも割るやうに碎いてゐる。道路の築造にかけて森いのは、昔は羅馬人で、今は英國人である。田舎村ではへ坦々として砥の如き大道の通ぜざる所が無い。また家屋を建築するのでも、一時の間に合せと云ふことをせぬ。一時的なる博覽會の建物でも、水晶宮のやうに永久式なるものを建て、雨漏騒ぎなどを起さぬ。

英語は殆ど世界語を成すものであると、英國人は誇稱してゐる。成程、英語の使用せらるゝ國土の廣さと、人民の數とは、北米大陸、印度、濠洲などの英語國があるからして、獨佛語の遠く及ばざる所である。さりながら歐洲大陸を旅行して見ると、英語の勢力は甚だ微弱で、佛國語に及ば無いことを實地經驗するのである。而も英の一島國に在りてすらが、ゲンブリッヂ

大學には僅かに三人の英語學教授あるのみなるに、米國ハーヴァード大學には二十餘人の同教授があること云ひ、米國のマッシュウス教授は米國語即ち標準英語なりとの説を立てゝゐる。又た此の狭い英の本國ですら、蘇國には蘇國の方言ありて、其方言の文學がラムゼー以來盛んであれば、ウエルスの小國さへが、今日では盛んにウエルス語の復興を計り、文典でも讀本でも完備し、同語の文學者も出て、英國文壇に重きを成さんとしつゝある。愛蘭土では歴然たるケルト語が獨立してゐて、學校で英語と併び教授されてゐる。予が以太利の汽車の中で會つた愛蘭土の一青年は、「愛蘭土は英國で無い、國語も別に存してゐる」と威張つてゐた。成程、英國皇帝の稱號は「大ブリテン及び愛蘭土國王」なのであり、愛蘭土は國の獨立を失つても、國語の獨立は失はじとしてゐる。英語の研究に徒らに時間を浪費して、而して得る所無く、却つて國語の知識に欠けた青年を作る日本の教育法は、大に爰に鑑るところがあつて可からう。

英國の本土に於てすら、英語の勢力は意外に弱いものであるが、されど英國人が英語を以て世界語なりと稱すること、實は其國語を以て天下を席卷せんとするの意氣を語るものである。我等の國語は最良の國語なり、天下諸國は之を學ばざるべからずとするものなのである。而して事實上、英語は最良の國語にして、最美の文學を有するものである。彼のウエルス人や愛蘭

土人も、内は其國語の獨立を計りながらも、外に對してはセキスピアやテニソンの國語を用ふる人民なることを誇るのである。

英國の法廷へ入ると、中世紀的の要國氣の中にあるやうな心持がする、時代物の芝居でも見てゐるやうだ。白い鬘に赤布の附いた法服で、顔は奇麗に剃つて髭を立てず、何と無く二十世紀の人で無いやうに見える裁判長は、高いベンチに嚴然と控へてゐられる。これを日本に宛はめて見れば、熨巾目麻上下の町奉行様が、白洲に出られたやうなものだ。下にズラリと並んでゐる辯護士も、亦た白鬘に法服で髭が無い。法廷では又た鋼鐵ベンを用ゐずして、鷲毛のベンを使ふところまでが、頗る古めかし。

原告、證人は、雜然として法廷内に坐つてゐる。傍聴者は自由に出入して、横の方に立つてゐる。一寸見ればドノ辯護士が、ドノ原告又はドノ被告の辯護をなしてゐるのか分らぬ。法律は素より不成文の習慣法であるから、辯護士は判決例の書物を、室の壁にズラリと並んだ書棚から出して、適例を引いて辯論してゐる。裁判長を呼ぶには、一々「ユーア、ロードシツプ」と貴族に對する如き敬稱を用ゐる。辯論が終結すると、殿様たり、町奉行たる裁判長は直ちに口頭で朗々と判決を下す、一枚の書付だに讀み上げるのでは無い、其判決は速記者を通じて、

翌日の新聞にも載れば、判決例としても残る。而して其裁判たるや、所謂「大岡裁判」で、常識と、情實とを基とするものだから、法文に拘泥して曲直を亂るやうなことが無い。而して裁判沙汰を慎重にするのであつて、一民事が起ると、法廷で裁判長の前に持出す前に、辯護士集會室へ、原被兩造を呼び出して、審かに其理由とする所を聞いて、調停を試みる。いよ／＼調停の出來ぬ事件だけを白洲に持出すのであるから、法治國の獨逸のやうに、娯達が井端會議の口論まで、裁判所に訴へると云ふことは自然無くなる、併し英國の法廷には、離婚沙汰の裁判が甚だ多いのは、アングロ、サクソン人種の個人主義の然らしむるところで致方が無い。

或時日本船と英國船との衝突事件が、法廷で審判せらるゝことになつて、上谷君が日本側證人の通譯として三回ばかり出廷した。いよ／＼判決の濟んだ其場で、裁判長閣下はポケットから三ギニーの金を出して上谷君に向ひ、これは通譯の報酬である、一寸受取書を書いて呉れと云つたさうだ。町奉行の白洲式なる英國法廷では、又たかやうな無造作な事もある。法治國で無い難有さに、御役所主義の跡形が無いことも、英國の一特質である。

されど英國人は法律を嚴守する國民である。卑近な例がある。馬車屋が、時々不當な賃金を強請る。其時には若干の金を手に入れて「サア、欲しいだけ取れ」と云はうものなら、イカナ馬

車屋も、法律を恐れて、取り得無いのである。若し又たそれを取らうものなら、與へたのでは無くて、奪つたのであるから、馬車の番號を覚えてゐて、警察に訴へる。さすれば其馬車屋は直ちに引上げられて、罪に問はれ、營業を停止せらるゝのである。

停車場で擔夫に荷物を運ばせた禮に、凡そ定まつた三片ほどの小額を與へても、彼は其錢を見もせず、「サンキユー、サア」で、直ちにポケットへ入れる。何程少く與へやうが、彼は露國や以太利の停車場擔夫のやうに、掌裡で錢をカラ／＼音させて強請るやうなことは無い。これは獨乙でも、佛國でもサツであるが、英國の擔夫は使ふのに殊に心持が良い。又た汽車に荷物を預けるに決して合鑑を渡さ無いが、それで安心なものである。或る友人が英國から米國へ渡つて、船から上り、埠頭で擔夫に荷物を預けてゐた時、一人の米國人が、英國では荷物を汽車に預けても、一切チエツキせぬが、何と無く不安心に感じはせぬかと尋ねるから、左様な事は無かつたと答ふ。ても少しは不安心な筈だがと押して云ふ。其時後に居た一人の擔夫が曰ふには、「ナニ英國では、チエツキなどせずとも大丈夫なものだ。それが爲に荷物の紛失するやうな國で無い」とムキになつて、英國の辯護をするから、友人は「おまへは英國人らしいね？」と問へば、擔夫は欣然として、「わいしは英國人ですとも！」と答へた。

法律や規則を立てても、繁文縟禮のレツド、テゝビズムに流れず、頗る融通の利くことが、又た英國風である。レゼント公園内に皇立植物學會附屬の植物園がある。樹木鬱蒼とし、百花妍を競ふ下には孩兒が乳母車に乗つて遊んでゐるが、日曜日を除く他の日は午後二時以後になると、會員以外の入園を禁ずる規則であり、但し會員ならば椅子車に乗り、従者を連れて入園することが出来るのである。ところで此公園附近に住居する富人は、植物園内の閑静で、美麗で、空氣の良い處で、小供を遊ばせたいから、彼の規則を廢めて欲しいものだと思つたが、一旦立てた規則だから、これ位な故障の爲に改廢することをせぬ。然るに規則によると、會員の年齢に制限が無いところから、或醫師は満一歳の小兒を植物學會に加入させて會員とした。小兒でも會員となれば、乳母車も椅子車と同種のものを見做されて、制限外の時間にも乳母車を従者として入園することが出来ることになつた。また會員は日曜日に於て、家族や二三の友人を伴つて自由に入園することが出来る定であるから、ソコで、孩兒の會員君は兄弟や召使を従へ、また父母を友人の資格で案内するといふ珍妙な事になつて來たが、これも規則の表に背か無いから、其儘で通つてゐる。他にも小兒にして植物學會員たるものが尠く無いと云ふことだ。又た動物學會にも随分赤ン坊の會員があるとかで、ウゝスター侯の如きは、其長子が誕生

すると直ちに五十磅の終身會費を拂つて此會員としたと云ふ話である。大英博物館の讀書室は、會員若くは特別の紹介狀を携へたもので無ければ入室することが出来ぬ規定である。然るに一日某氏は日本から新來の友人を誘ひて博物館見物の序、讀書室の前に來て、番人入室の許可を求めた。素より規則に従つて拒絶せられ、日本大使館の展書を持つて改めて來いと云はれた。ではあらうが、明日にも當地を出發するのであるから、その餘裕が無い、唯だ曲げて入場を許してくれと頼む。出來ぬと答ふ。なほ強ひて頼んだ。すると番人は、サウまで云ふなら仕方無い、規則を曲げて入室ささうと許したので、二氏は此讀書室内の狀況を委さに一覽することを得、番人の好意を謝して去つたと云ふ事だ。英國に在りて、凡ての事業の發達、殊に交通機關の完備せる有様を見ると、これぞ、いかにも金利が廉いのと、事業其物に重きを置き、株式の高下や、配當の多寡に頓着せぬ事との結果であることを感付くのである。マンチエスターの製造市は、海岸より遠き内地に在り、以前は海運にリヴアプールに頼らねばならなかつたのに、十五年以前に、大運河を開鑿したる以來、今では英國第一流の港となつた。其の開鑿費は一億五千萬圓を費やして、八千噸内外の巨船へ通行の出來る世界屈指の運河である。一年の収益また數百萬圓に登るのであるが、十五

年以來、株主に一文の配當だにせぬ。収益は擧げて、市からの借金の利子と、運河の擴張費とに宛て、株主の間に毫も不平が無い。此運河はマンチエスターの富源である、年と共に有利なものとなるのであるから、株券は子々孫々に傳へて、決して他手に渡すなどの親の遺言で、無配當の株主たるに誇つてゐる人もある。現にマンチエスターは此運河の爲に棉花の輸入運賃に若干の低減を見ることが出来て、同市製造業に好結果を來たしつゝある。株主は運河其物の収益配當に着眼するのでなくて、マンチエスターの繁昌を希ふものなのである。

大西洋は英獨海運業の競争舞臺である。先年來獨逸で盛んに巨船を製造して、大西洋に於ける英國船を壓倒しやうとした。それで英國のキユナード線に三萬五千噸の、ルスタニア。モレタニアの姉妹二大船が浮んだ時には、これ獨乙に勝つたぞと、英國人は泣かんばかりに喜んだのである。今は又た白星線で、六萬噸の商船二隻を新造することとなり、既に其龍骨をグラスゴウなるクライドの造船所に据えた。ルスタニアやモレタニアですら、收支相償はぬのに、まして六萬噸の巨船から、利益の上つて來やうは無い。それに拘らず英國は海上覇權の威を落さざらんが爲に、大敵手たる獨逸と争うて、其費を厭は無いのである。又たかゝる海上の大宮殿で米國の觀光客をドシ／＼招致し、船其者は直接に利益せずとも、國に巨額の金を落さ

すことを計つてゐるのである。

獨乙でシンチンゲル大尉に會つた時、倫敦の地中鐵道の景況は如何と聞かれたから、頗る繁昌してゐるやうであると答へると、大尉曰く、自分は倫敦地中鐵道の株主であるのに、何年立つても、一文の配當だに受けぬ、株券の價値も半値に低落してゐるのだと。彼の地中鐵道が一哩の建設に數千萬圓の巨費を投じ、それが四通八達して、殆ど發達の度を過してゐるやうである。配當が四朱になつたとて、株主が青くなり、やれ市有問題、やれ貸錢引上げだのとの騒ぎで、毎もゴタ／＼する東京街鐵のやうな會社では到底出來ぬ事業である。

ロイド船舶保險會社の威力は豪勢なもので、世界の船舶はロイドの保險で、A.I.などとのマークが附かぬと、荷主が安心して積荷を出さぬのである。然るに此ロイドの會社と軒を並ぶる某汽船會社は、所謂トントコ船の安船を造つて、ロイドの保險にかけぬ。ロイド會社が何者ぞ？ 我れ船を造り、我れ之を保險す、これ荷主が荷を載せぬなら勝手にしろとの見幕だ。そして世界の海に多數の船を浮べて、其會社の利益は、倫敦海運業者中の冠なりと云ふ。

英國人はレザーウードなむつりした性質であるから、カンラカラと豪傑笑ひをするものも無ければ、高聲放談することも無く、佛國人のやうに手振身振をせぬ。日本人が町を通る、獨乙

などでは、無禮なるかな！ 大人野郎までが「支那人」だの「日本人」だのと高聲に罵るが、倫敦の市ではかゝる不快な目に逢はぬ。色の黒い妙な男が通るわいと思ふ子供等も、ヒソヒソ何か話し合つて、予等を目送するのみだ。英國に來つて、我等日本人は聲の甲高いのを恥づるのである。聲の鋭くて高い、予等てさへ耳觸りな、佛國人、伊太利人等も、英國で低聲の練習をなすが幸福であらう。英國の商人は低い聲でボツ／＼と事務上の相談をする。ローモンド湖からグラスゴウへの汽車で、造船職工と乗合したことがある。彼等は下等な職工である、然るに互に語るや低聲で、敢て高聲放談して他の客の妨害となるの陋をなさないので感服した。以上書き來たつたやうな微細な事實でも、亦た以て英國人氣質の一斑を覗ふことが出来るであらう。蓋し美點のみを挙げたのであるが、其缺點は爰に暴露する必要もあるまい。紳士國の英國だとして、便所や汽車に、怪しからぬ落書をする人間もあることは、君子國の日本に同じ。又たグラッドストンの貧民救助法や、昨年議會を通過した老年扶助法のあるために、憤けてお上の御厄介になる人間もある。アングル人の子孫は必ずしも天使で無い。彼等も半獸の人間であつて、惡事にかけては日本人等の及ばぬことがある。されど要するに英國人の氣質を支配する大勢力は紳士的教育であつて、高潔偉大にして見上げるやうな人物が生れて來る。英國は實

に紳士の國である。

終に予が英國にて會見したる多くの紳士の中、認めて以て英國紳士の典型なりと思へる一人物、即ちアルフレッド、モーズリー氏を紹介せん。氏は赤手、南亞に赴きて、英傑セル、ロイツ等と共に奮闘的生活を送り、金剛石坑を開いて、巨萬の富を致したる自助的人物である。今や齡未だ六十に達せずと雖も、足の悪さがために、致富の實務から退いたが、猶ほ無爲徒手で富貴を樂しむ人では無い。氏は英國の教育法が、餘りに實務に疎いのを歎じて、子息二人は米國ハーヴァード大學に送つてゐる。但し四人の令嬢は家庭教師を雇うて純英國風に教育してゐる。而して米國教育法の大に鑑とすべきものあるを思ひ、先年既に二回の教育視察員を米國に送つて、其第一回の報告書は、我國文部省にて翻譯した。又た實業視察員を米國に送つたこともある。今年春は那翁最期の孤島セント、ヘレナの土民に殖産興業の途を授けんが爲に渡航し、又た此秋に再航する筈である。昨年秋には加奈太及び米國合衆國から、凡そ千人の男女教師が、モーズリー教育視察員となりて英國に渡來したが、氏は熱心視察の便を備へ、又た毎土曜日午後には、此等視察員を交る／＼、ハッドレー、グリーンンの自宅に招待して、茶葉の饗應をなし、夫人、令嬢等て庭園に案内したり、音楽を奏したりなどして、接待に勉めるのであつ

た。予も本田、上谷兩氏と共に、かゝる土曜日の敷時間を同氏邸に愉快に送つた。視察員は見受けたところ、孰れも小中學の教師らしく、彼等はモーズリー氏の盡力により、大西洋の往復船賃廿五弗の大割引額で、英國に來りて、學校、製造所、古蹟などの視察をなし、又た序に歐洲大陸にも遊ぶことが出來て、其見聞を廣くすることを得るのを大いに徳としてゐる。

モーズリー氏は亦た日英の同盟をして實効あらしむるに就いて、多年の持説がある。同盟とは政治上の同盟のみでは實力が無い、必ずや實業上の同盟にまで及ぼさねばならぬ。日英は實業同盟を結び、日本は英國特長の製造品を模倣せず、獨乙、佛國などの製造品を製造して、英國市場へ輸入する、英國は之れを販賣するに勉めるといふ風にせねばならぬとの説で、其目的に近づく爲には、日本から有力なる實業視察員を英國に派遣するを可とす、氏は如何やうにも斡旋の勞に任じやうと云ふのである。予が倫敦を去るに臨みて、氏はユニオン、バンクの事務所に訪問した時にも、亦た此説を唱へ、日本へ歸つたら、先輩友人の間に此持説の吹聴をしてくれよとの事であつた。

北地巡禮

十月十三日、予は倫敦バチントン停車場を發して、學術の淵藪たるオックスフォールド大學市を一見し、文學の靈場たるストラットフォールド、オン、エヴオンに沙翁の舊跡を拜みつ、又たグラスゴウ市に出て、アイアのアロウエー村に、歌賦の詩人ロバート、バーンスの故郷を訪ふた。それよりはローモンド湖上に、蘇國湖郷の風光を偲び、轉じて舊都エヂンバラに、薄命なる女皇メリーの跡を弔ひたる後、十七日に倫敦へ歸つた。

オックスフォールド大學

我等は學問と云ふものを始めてから、牛津、劍橋の二大學は、實に理想の學校であつて、此二大學の中で學問さへすれば、忽ち豪い學者になれることのやうに心得てゐた。我等不幸にして錢が無いから、牛津や、劍橋の學者にもなれ無かつたが、此度はオックスフォールド大學

市に一泊して、諸大学の建物だけなりとも見物することが出来て、見聞が一つ殖えた。マンチ



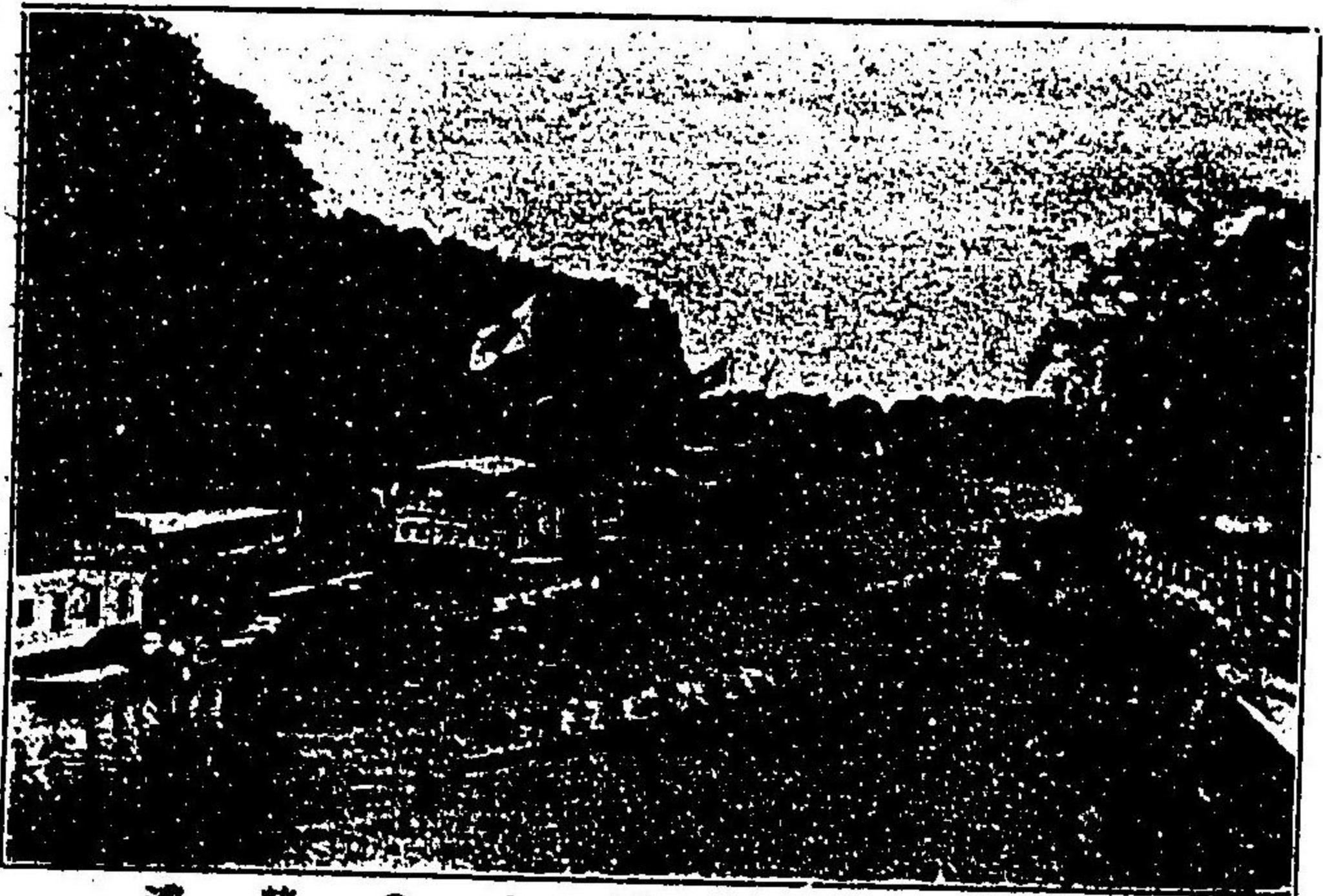
学大チーヤチ、トスイワク

エンター学校に、神學研究中の内ヶ崎君や、盲人教育家の好本君等の案内で、オックスフォールド大学の外観の模様だけは知つた。そしてかゝる風景の佳い、天地の廣々とした所て學問する青年を羨んだ。ホーソーンさへが「世界にオックスフォールドのやうな所は又と無い。かゝる所へ来て、之を去るのは失望だ。一生かゝつても、充分に觀察し、充分に益を受けることは出来ぬ」と云つた牛津二十二の大學、我等は一日の滞在にて其門前を素通りするだけでも容易で無かつた。

成程！ 此處の堂々たる建物が、英僧ウルジの残したクライスト、チャーチ大學であるさうな。夕刻になるとトム、ケードの塔上から歴史的の百〇一

鐘音が鳴るわい。紳士の典型サア、フィリップ、ジトニーも、稀有なる詩人ベン、ジョンソン、宗教改革家ウエズレー兄弟、大將軍ウエリントン、文豪ラスキン、又た大老翁グラッドストーン等の學んだ大學と云ふのは、これであるか！ 此處がオリエル大學であるぞ！ エリザベス女皇の寵臣サア、ウォルター、ラレーも、ニウマン大僧正も、「トム、ブラウン」の作者ヒューズも、此學堂に名を列ねた俊傑であるさうな。

諸大學の中でも、建築の最も壯麗な、四角なゴシック風の高塔を寫が包んで、秋風に紅の色を染出してゐるのは、モードリン大學で、晝て見たほど美しくは無いチャーエルの支流に沿うて立つてゐる。此大學の名簿には、僧正ウルジ、愛國者ハムデン、文豪アチンソン、史家ギボンなどの名前が載



滑 脱 の 上 河 ス シ イ ア

る。

つてゐるさうな。豊んや校舎の後、川に沿うた線の並木道は「アチンソル路」の名を存して、かの文豪が、少年の時、此樹蔭を往復して詩興に耽つたところであると云ふのだ。

彼處に巨塔を築つるものは、名高いパリオル大學ぞ、二十二大學中に殆ど首位を占むる大學であるぞ。「富國論」のアダム、スミスや、詩人アーノルド。スキンバーン等が生れたところであるわい。此處の古風な低い校舎は、セント、ジョン大學であるさうな。堂母型の大建築、柵の石柱の上に彫んだ人物の半身像が、風雨に蝕せられてゐるのは、十七世紀の大建築家レンによりて成りたるセルドニアン、シアターで、此處ぞオックスフォールド總大學の大講堂、學位授與式などの行はるゝところであると説明せられた。



(一ナモンコ)生學大

學生が美人と共にボートを浮べて遊ぶチャールズ河も、ボートの競漕をするチームス上流のアイシヌ河も、いづれの堤も草地廣くして、牛羊戯れ、榆や柳の大樹が茂り立つてゐる。野原を散歩し、公園にクリケット球戯を競ひ、また市内を散歩する學生の風を見ると、この頃は颯カラ風が流行で、ツボン短く脛を露はし、頭が早く禿げるからとて、帽子を被ら無い。大學の校舎を出入する學生、奨學金を貰うてゐるスカラー君の着たる黒きガウンは羊羹色を誇り、コンモナー學生の着たるチャンチャンコ式の短きガウンは、破れて糸の如く下つてゐるのを街つてゐる。夜間は風紀維持の爲とて、學生は皆ガウンと角帽とを用ゐねばならず、監督のブールドッグ先生は、皿大の目で睨み廻り、四六時學生の風儀を注意してゐるから、市外は知らず、オックスフォールド市に於ては、學生の行狀を亂るべき誘惑物が無いとの話である。

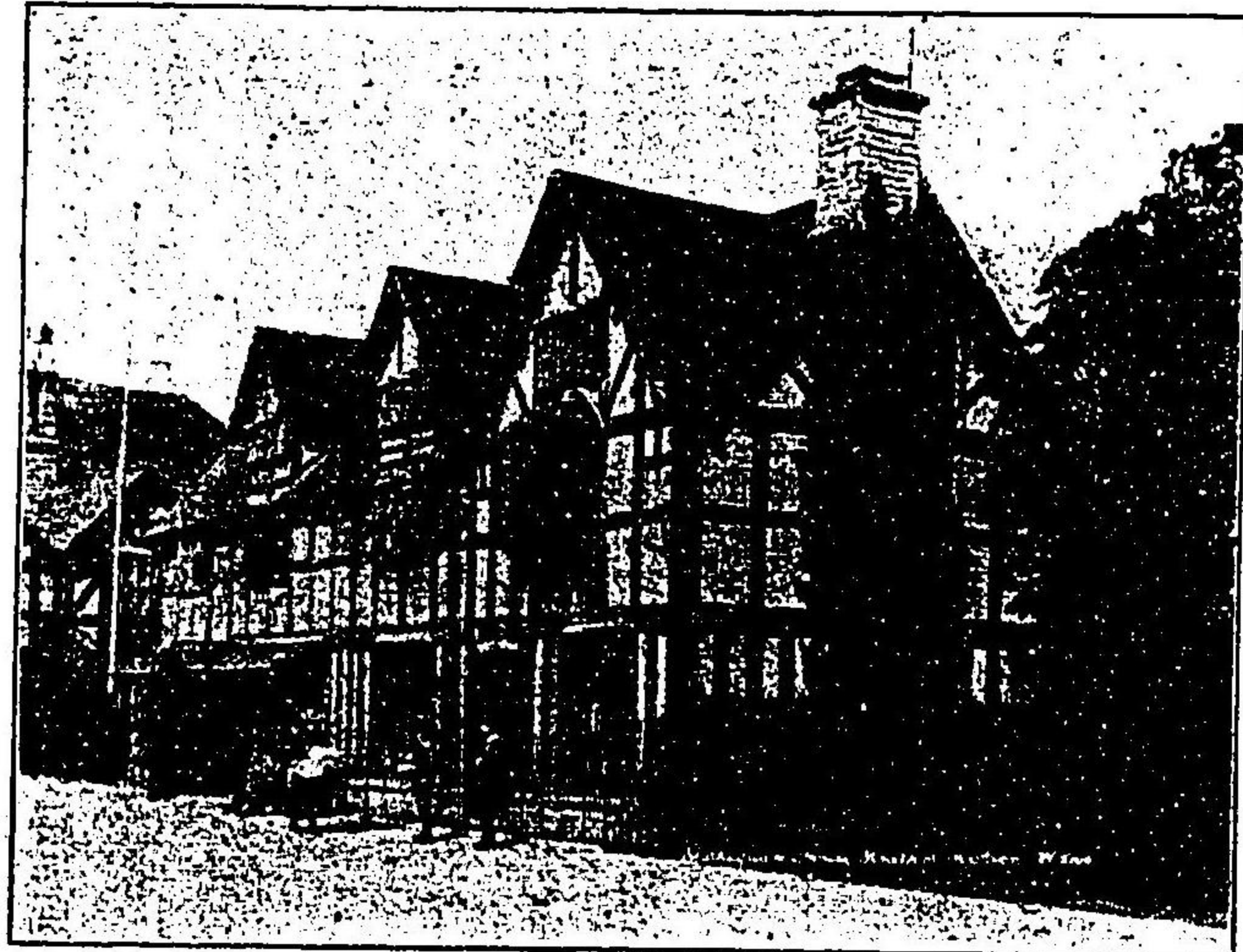
沙翁誕生地

政治上の英國は亡ぶることがあつても、セキスピアの英國は永存すべしと申す。さればセキスピアなる詩聖が、事實此世に生きてゐたものかドウかは知らず、唯だ彼れの誕生地で、又た

終焉の地として崇めらるゝストラットフォード、オン、エッオンの一小都會は、文學の靈場として、之れに禮賛するものも、好奇心で見物するものも、世界の四方より集り來りて、一年四五萬の多きを算すとかや、而して其過半数までは米國人なりとの事、英國へ來て、一寸でも此靈地に足を入れなかつたら、國への土産話にならぬと思つてゐるのだ。

我等若し英國へ渡ることがあらうものなら、ストラットフォードへは是非往きたいとの素願であつた。そして遂にオックスフォード大學を一見した翌朝の汽車で此地へ來た。停車場から少し歩いて、其市へはいると、早や空気が沙翁臭くなつたやうに感じた。

街路の人に道を問ひて、セキスピア誕生の家を尋ね置てた。町通に沿つた、黒き木の柱に灰泥を塗つた十六世紀式の古い商人家だ。沙翁の親が此處で羊毛問屋をしてゐたと云ふことである。隣の事務所で一志の入場券を求めて、先づ此家の一階目の一室に通る。天井は黒い梁が露はれて、床には石を敷き、壁には大きな爐を切つたところで、これが此家の客間であつたらしく、昔は肉屋の店にもなつてゐたと云ふ。其次室には記念品室があり、デップリと肥えて人柄の好さうな婆さんが番をしてゐる。沙翁の家には老婆が定りものらしく、アーザイングが訪ね來つた時にも、お喋りの婆さんが番をしてゐたと書いてあるが、今のお婆さんは左程お喋り



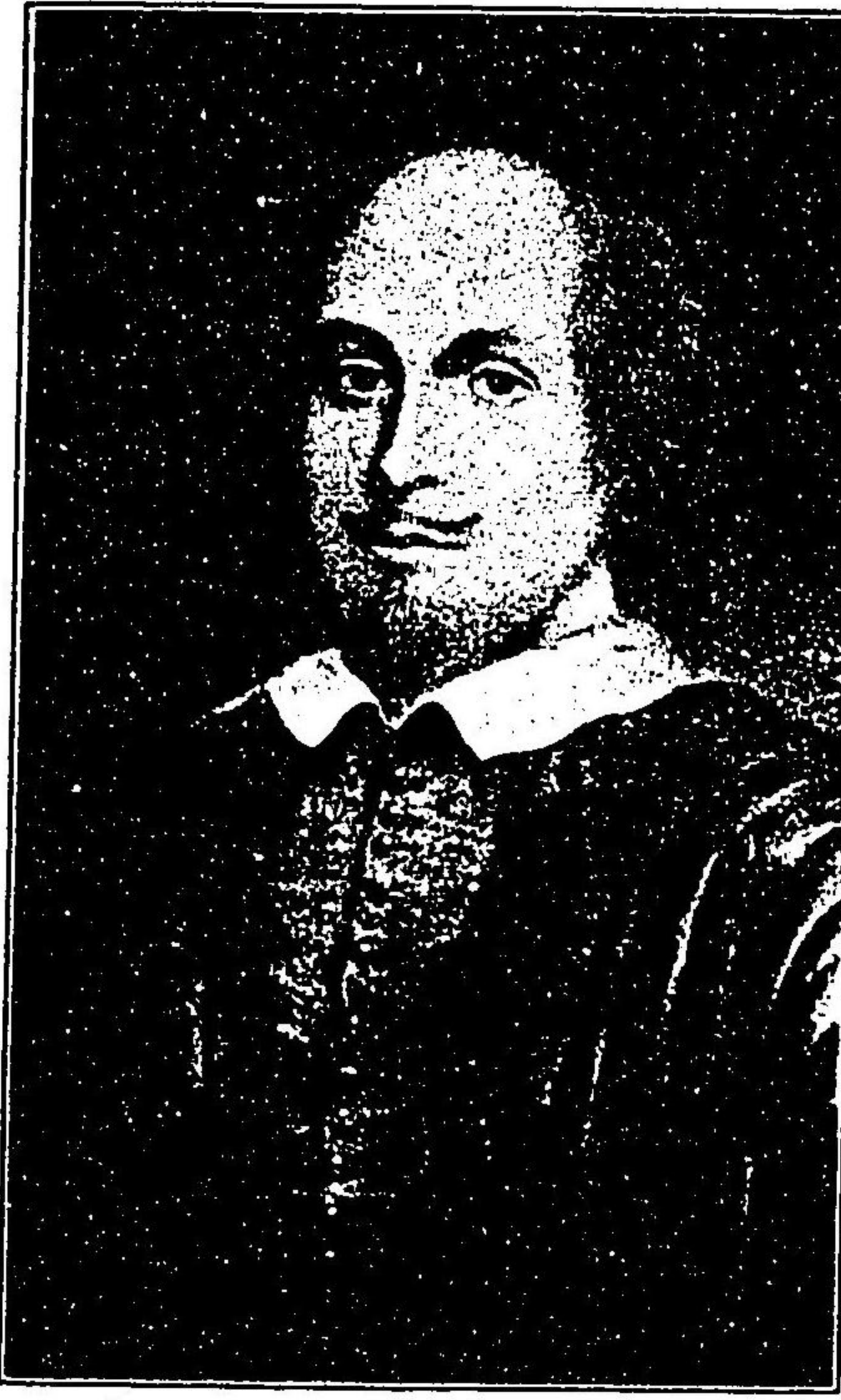
セキスピア誕生の家

でも無いやうだ。予は備付の芳名簿に、我が姓名を日本字で大きく書き入れた。室内には沙翁の肖像だの、彼が鹿を盗んだ時の鐵砲だの、ハムレットを演じた時の劍だの、又た煙草入だのと、眞物が贋物か判らぬものがある。と陳列されてゐる。赤い胴着に黒い上着で、鷹ペンと紙とを持つた、沙翁の坐像は、ツリニチー寺院に安置せられてゐるものゝ寫である。又一枚の美人畫は、沙翁の孫娘で、彼が系統の最後の人たりしエリザベスの肖像なりとか。昔此家の軒に掲げてあつた『沙翁誕生地』の看板もいと古びて保存されてゐる。沙翁の椅子もあるが、見物人が詩人の座に坐するの名誉を荷はんが爲に幾度か坐板を潰したのである。

予は番人のお婆さんに、米國からの漫遊客の中には、此家を訪れて「セキスピア君は御在宅ですか？」と尋ねる者さへあるとの話を聞いたのだが、ドウかと尋ねたら、お婆さんは笑ひながら、「まさか、そんなに無智な米國人も無いが、時には「セキスピアの子孫は今何處に住んでゐる？」と聞く人は無いでも無い。だが、この肖像のエリザベスが死んで血統が絶えてからでも、モウ二百五十年餘りにもなりますわね！」

狭い階段を昇つて二階へ通ると、天井の低い、白垩塗の粗末な壁に爐を切つた汚い部屋だ。いかに穢しからうが、此處を千五百六十四年の春四月、偉大なるセキスピアの靈魂が、羊毛商人を父母として此世に呱呱の聲を揚げたところである、世界文學の至聖殿である。四方の壁にも天井にも、禮拜者が隙間なきまでに姓名を記してゐる、樂書をしてゐる。窓硝子にも無数の人名が切り付けてある。此室には人足らしい男の番人がゐて、沙翁の家に在るのに「沙翁の國語」の覺束ない、訛つた田舎言葉で、此の硝子窓を見よ、ソレ、爰にウオルター、スコットと見えてゐるだらう、これは、トマス、カーライルと切つてあると教へる。壁上の樂書の中から、プローニングやサツカレーの署名を示す。朱點の打つてある處を指して、元、爰にはバイロンの名が書いてあつた跡だと云ふ。乃公も一つカーライルの側あたりへ、我が英名を而も日

す。これまで見物人が、紀念の爲だと云つては葉や花を摘む、殊に米國人の中には紀念物蒐集癖に富んで、日本へ來ても八幡様の鳩の焼物を盗み、名利て佛像をかッ拂ふ手癖の悪いものが



沙翁のストラットフォールド畫像

本字で太々と記し留めたく無いでは無かつたが、樂書は最早禁制である。英國は既に樂書時代を過ぎて、芳名簿時代に移つてゐる！

名高い「沙翁のストラットフォールド畫像」の掲げられてある室や、圖書室も見た。それらの室にも人足然として「沙翁の國語」を知らぬ案内者がゐる。屋後の小園は即ち「沙翁園」として、詩人が其戯曲中に歌つた花卉草木三百餘種を栽え込んである。園中處々に立札して、技を折り、葉又たは花を摘むことを禁ずと記

あるくらゐだから、沙翁の家セキスピアの家の草花や木とあつては見逃さず、トウ／＼此の庭を荒らして仕舞つたために、一時はこの庭園へ人を入れぬこともあつた。入れぬとなると、又た黙つてゐないのが西洋人だから、ヤンヤと抗議を申込んだ。それで予等は庭園の中の小奇麗な路を散歩することは出来たが、制札のある上に番人が見張つてゐる。折から秋のこととして菩提樹の葉が路に落ち散つてゐた。摘んだり折つたりするのは無くて、落葉を拾ふのなら、或は差支へもあるまいかと、予は試みに其一枚を拾ひ上げると、向の方にゐた制服制帽の番人が、六ヶしい顔をして手を振つたから、予は其葉を捨て、しまつた。

誕生の家から出て、右に曲つた町の二つ目の四つ角に、ニュー、ブレイスとて、沙翁晩年の住宅の趾がある。其家は十八世紀の半葉まで立つてゐたのに、後の持主の何某坊さんが、地代の喧嘩から叩潰して仕舞ひ、又た此屋鋪にあつた名高い「沙翁の桑の樹」も、見物人が枝葉を折取るのを煩いとして打伐つて仕舞つた。其樹は伐られたが、沙翁の桑の樹で造つた細工品はこの市の店頭で賣られてゐる。此樹は根から離れても、矢張りどこか無限大に生長して、ストラットフォールドの商人の爲にパンの種を結んでゐるらしい。東海にありては扶桑の木ほどにも大きいものと見える。これも亦た、基督の架けられた十字架の釘が歐洲諸國に散在して、これを

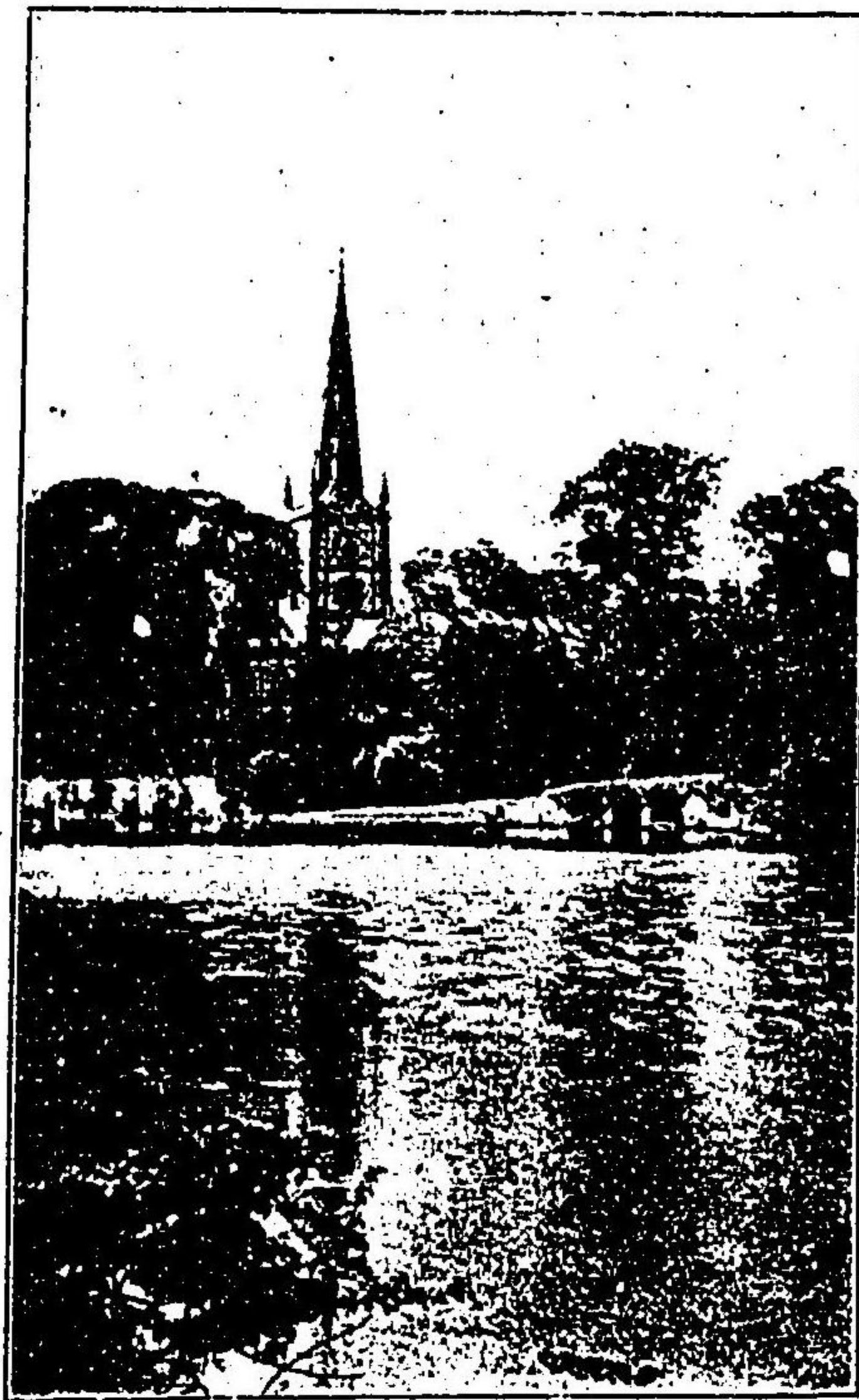
集めたら、何貫目あるかも知れぬやうなもので、名所舊蹟で虚言を吐くことは、基督敎國でも大目に許してある！

晩年の家跡と町を隔て、沙翁時代から存在してゐるギルド寺院があり、之に隣りて、セキスピアが幼時通學したと云ふ學校がある。表の戸の門鍵をゴツ／＼叩いて案内を乞ふと、此處からも人足然たる男が出て、セキスピアの學校を見に来たのか、さらば入場料は六片だと云ふから、それを拂つて階段を昇ると、可成り廣い教場にはいる。今日でも學校なのだ。正面に据ゑた破れた皮張りの大椅子は教師の座だ。セキスピアの先生の椅子では無かつたらうが、兎に角古いものだ。生徒の机も古びて、幾世代かの子供がナイフで刻み付けた悪戯の痕で、ドノ机も殆ど完膚無してゐる。而して左手の壁の下に眞鍮板が嵌めてある。案内者が指して講釋するには、其昔の邊に、セキスピアの机があつたのだと云ふ。成程、その通りの由來が、此の眞鍮板に黒字で彫込んである。

エヴォンの岸美しき流に沿うて、沙翁記念館てふ赤煉瓦と石造りとして目の覚めるやうな宏大美麗な建物がある。二棟に分れて立つてゐるが、殊に目立つのは其一棟の圓形なるパノラマ館式の大廈と、之より屹立せる方形の尖塔とである。此の記念館も入場料は六片で、予は先づ制

服を着た番人の所で、芳名簿に乃公の名をインキ黒々と記入した。館内には、セキスピア戯曲の珍本、諸國の翻譯及び沙翁に關する著述を網羅して、其藏書數一萬に近しと云ふ。又沙翁の肖像畫、彼の傳記畫、劇畫並に名優の扮装肖像等あり、風景畫の賣品も懸つてゐた。此處に接した彼の圓形の建物は劇場で、沙翁の誕辰にして、又忌辰の當月即ち毎年四月には、此處にて沙翁劇が演ぜらるゝのである。庭上には有名な彫刻家ガワ―卿寄進の沙翁記念銅像あり、臺上高く詩聖の巨像を立たせ、臺下には悲劇を代表するマクベス夫人、歴史を代表するハル王子、喜劇を代表するフォルスタフ、哲學を代表するハムレットの四像がある。この記念像のあるあたり一面の芝生が、河水の堤を成して、市人の散歩場となり、此處より右を眺むれば、浼として平かなるエヴォンの水に臨んで高く、ツリニチー寺院の尖塔が、八百年の久しき、深き木立の間に峙つてゐる。この寺ぞ、詩聖を葬りたる靈場なる。一望の風景頗る佳媚、英國てはかやうに落付いて靜かなのを、好景と云ふのである。

ツリニチー寺院は、大詩人が誕生三日目に洗禮を受けたところで、又其遺骸の塵に歸つたところであれば、この寺は沙翁の始を開きて、又其の終を結んだ精舎である。予は既に黄ばんだ菩提樹の木立の間、芝生の上に横たへたるも立てたるも、其數知れぬ墓碑の間を通りて、



院寺一チニリツ

寺に近づくと、正門のあたりが人で埋まつてゐる。何人かの葬式である！沙翁の墓所で葬式がある！柩が運ばれる、多くの追弔者が従ふ、やがて古塔からは哀鐘が鳴る。予は堂内に入らうとしたら、番人が、今は葬式があるから二十分ほど待てと云ふ。墓場で、河に近き石に腰打ちかけて、途中で買つて來た繪葉書に家族友人の名を認めたり、又た悠悠たるエヴォンの清流の上下を眺め渡してゐた。佳人を載せた舟が向ふから浮んで來た。凡てがまことに靜かて長閑な景色である。

少時にして、又堂側へ來て見ると、いつの間にか葬式は終つてゐた、いかにも無造作な手輕い儀式だ。それで予は堂内に入ると、中々に大きな寺であつて、秋の夕日は美しき窓の繪硝

子を通して和かに刺し入り、殊に今日は他に参詣者も無く、廣い御堂に番僧一人と子とのあるのみで、一しほ森としてゐた。番僧はアイヴィングを案内した八十歳餘の老人エドモンズ君から七代の孫にても當らうかと思はるゝ若い上品な人で、丁寧に案内して、内陣の床に横はれる詩聖の墓碑を指し教へた。之れと並んで其妻アン、ハサウエーと、娘スザンとの墓もあるが、前に欄干を渡してあるので近寄ることは出来ぬ。沙翁の墓石のみは艶々と光つて獨り目立ち、詩人が自から書残したと稱せらるゝ碑文が、磨滅せるながら、臚げにも讀まるゝ。墓石の光つてゐるは、此碑文を石摺にして賣る數が多いため、自然と磨きがかつたのである。墓石の上なる壁間の石造の御厨子には、詩人の歿後久しからずして作られたる彼の坐像が安置せられてある。赤い胴着と黒の上衣、顔にも目にも色が刺してあり、兩手には驚ペンと紙とを持つてゐる。之を仰ぐに慈悲相、無量智相と備へて、何となく彌陀如來に似た圓滿な貌である。其頭腦には、天地に亘り、古今を併せ、人類に瀕れる大智を藏してゐたことが、廣く大きな額と和氣に充ちたる眉宇との間に溢れてゐるやうに思はれる。凡そ沙翁の肖像なりと稱せらるゝもの、繪畫に彫刻に數知れぬことであるが、この古像こそ、詩聖在世の面影を最も能く傳へたものらしくて、他に優りて特に尊く拜するゝのである。

内陣や脇堂には、なほ他に幾多の墓碑あり、大理石の寝像もあるかなれども、アイヴィングが云つたやうに、沙翁に關係なきものには心が留まらず、この寺、彼の古塔、これ唯だ詩人の靈廟なるが故に尊し。堂内にある古き洗禮用の水盤よりしては、生後三日のセキスピアが、父母に抱かれ來りて洗禮を受けたと傳へられ、其側に置かれたる過去帖には、沙翁の受洗と埋葬との日附が記入せられてある。また第十七世紀出版の古き聖書が鐵鎖に繋がれてゐる。予は此寺にても、芳名簿に我名を認めたやうに覺えてゐる。番僧には多少の心付を興へたる後、沙翁墓碑の石摺は無からうかと尋ねると、有り、我れの自から摺つたものがあるとして、堂の隅の机の抽斗から出してくれた。價は二志、番僧トムキンス君の奥書が添うてゐる。後て市中へ出て見ると、一二の店て同じ石摺を買つてゐた、價は一志なり。されば寺で買つたのは、トムキンス君の奥書のあるだけで倍價を要求せられたのだ。

ストラットフォールドから一哩許を離れたるシヨツテリ村には、沙翁の妻アン、ハサウエーの舊宅がある。農夫や、牛羊の通路で、兩側に低い柵を結び廻し、處々に潜戸のある小徑を傳ひ、牧場や甘藍畑の間を過ぎて大道へ出ると、道に沿ひて二棟造て草葺の古い農家がある。牛肉屋の小僧をしてゐた十七八歳のセキスピアが、八つ年上の百姓娘を慕ひて、彼の小徑傳ひ



アサハサエの家の家

に千度百度通ひ來つたのは此家である。今なほハサウエー家の後裔が住んでゐるさうだ。扱て予の往つたのは、家の前に掲示してある入場時間限の六時に返つてゐたから、若しか謝られはせぬかと危ぶみながら、奥の家までツカ／＼通ると、姉妹らしい田舎娘が二人で茶を飲んでゐたやうであつた。やがて若い方の丸顔で、予をして漫に當年のアン、ハサウエーを想像せしむるやうな可憐な娘が、質素な衣服に、白前垂を胸から掛けて出て來て、入場料六片を求めて切符を渡し、前の家の戸口から案内しかけた時、門前に馬車が停つて、一人の老婦人が駆け込んで來た。高聲に「私は亞米利加レデーである！」と先づ名乗を揚げ、まだ見物が出来るかと思は

た。それで娘は予等二人を案内して、三百年の古色を帯びたる薄暗い小家に入り、アン、ハサウエーが、少年情人セキスピアの爲に菓子焼き肉を炙つた臺所を見せる、銅製の鍋や陶器など、孰れも昔の儘に保存せられてゐるのだと云ふ。一室にはアンの寢床もある。娘の説明振は讀本の暗誦をしてゐるやうで器械的なり。「亞米利加レデー」が「これはセキスピア夫人の寢床か？」と問ひ返すと、娘は返事に詰まる。予は脇より「兎に角、これがセキスピアの妻アン、ハサウエーの寢たところださうです」と代つて説明する。老婦人は「成程古いやうだ」と感心する。又た娘を顧みて、此庭には、いろ／＼花が咲いてゐるが、摘取つては悪いかと聞く。娘は一も二も無く、それはならぬと答へた。

見物を済ました予は、この小家を辭して、半町も行過ぎてから、後を見返ると、「亞米利加レデー」は馬車に乗りて、案内の娘と何か話をしてゐた。娘は花を摘んで來て老婦人に渡しつゝ、薄霧に、牛羊の家に歸るを見やりつゝ、暫くして大道に出て、停車場へ立戻つた。午後の徒歩四五時間にて詩聖の靈場も一通り巡覽したことであれば、此上は此地にて、セキスピア、ホテルの沙翁戯曲の外題を附けた客室の一を撰んで泊ることも、或はワシントン、アーヴィンクが、

かの多趣味なる「ストラットフォールド、オン、エヴォンの記」を草したる赤馬ホテルに宿りて、この米國文豪が凭つた椅子や、彼が復案に耽りつゝ手にした火棒を見せらるゝ必要も無いこととなつた。殊に急ぐ旅なり、グラスゴウ行の汽車の發車するまでには、猶ほ一二時間を餘してゐたから、それを待たんが爲に、停車場の酒店に憩つてゐると、やがて彼の「亞米利加レー」も入り來り、茶を命じて、頻りと手に話をしかけた。婆さんの息子は俳優で、其頃パーミンガムで興行してゐたのだ、それで日頃沙翁を慕ふところから、今日は見物に廻つて來たとの話。手に持つた草花や紅葉を示して、先刻アン、ハサウエーの小家の門口で、案内の娘と話をしてゐたであらう、あの時、少しの金をくれると、娘はこのやうな花や葉をよこしたが、良い記念品では無いかと云つた。婆さん又大さに米國の自慢をする、酒つぎの女を捉へてまで、自國の吹聴をした。予も米國へは先年往つたが、結構な所だとお世辭を述べてくれたら、婆さんニコくしてゐた。

ストラットフォールドの市は、沙翁で生活してゐるのだ。沙翁に因んだ土産品を賣る店多く、繪葉書、沙翁及びアン、ハサウエーの陶器像、「沙翁の桑の樹」で作つたと云ふ小細工物、其他あらゆるもの皆詩人と其遺跡とを商賣の種にしてゐる。予は一軒の書店へ入つた、種々な沙翁

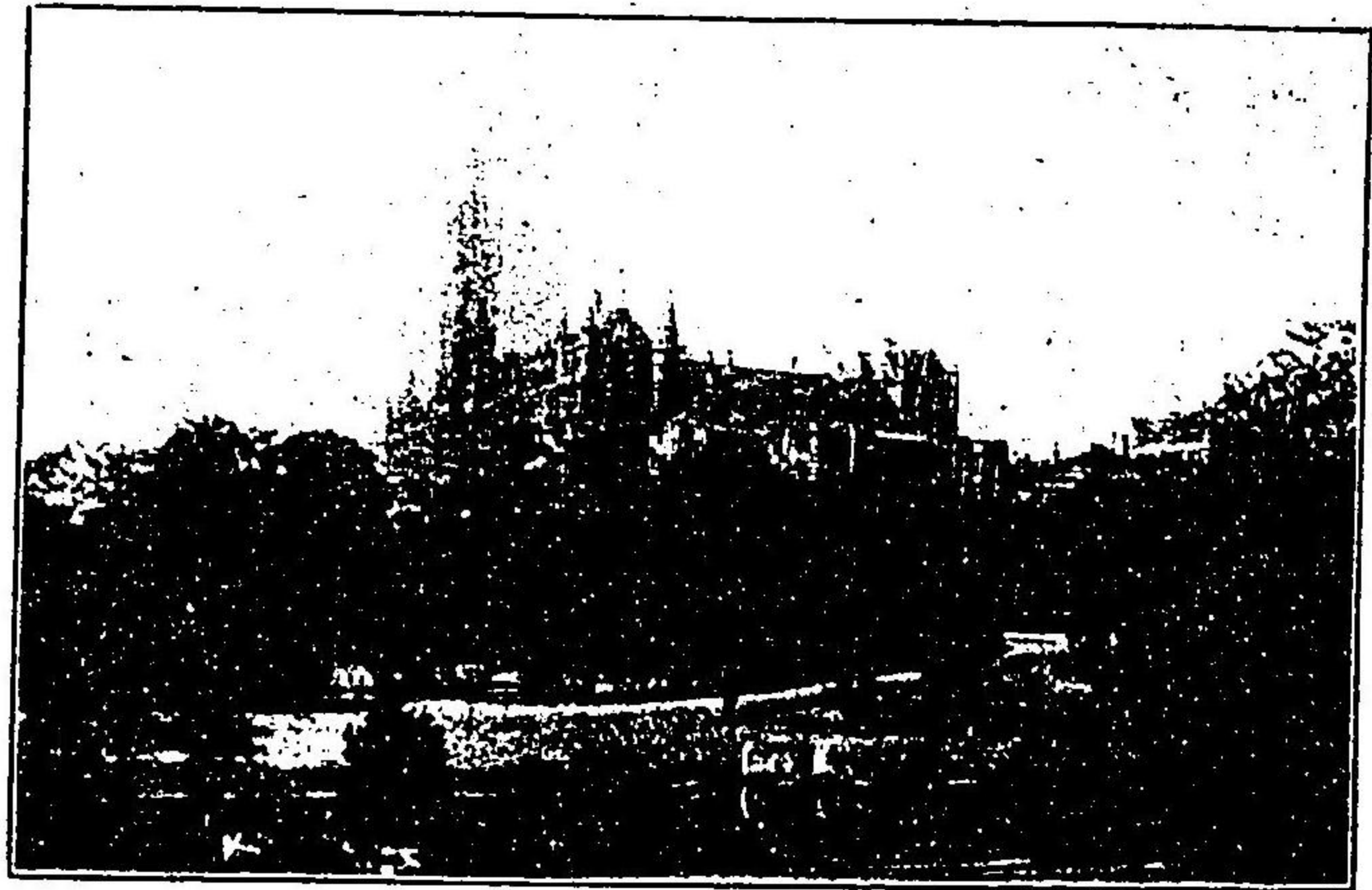
集版の中に、青皮の寸珍本で一曲づゝの本になつたものがあつたから、記念の爲何か一冊買はうと、先づ「ハムレット」を探したが無い。亭主に聞くと「ハムレット」は一寸切らしたと云ふ。沙翁で飯を食ひながら、「ハムレット」とは情ない！予は「マクベス」一冊を買ひ、店頭で其前付の紙に、今月今日詩人の故郷に於て此書を求めたる旨を英語にて書き入れると、亭主は感心して見入りながら、「あなたは大方英語を勉強したのだな」とも褒めに預つた。

此市には米國ハーヴァート大學創立者の先祖の家あり。又た現代の閨秀小説家メリー、コレリの住宅あり、葛に包まれたる美しき家で、これも亦た既に名所の一に算へらる。

グラスゴウ市

沙翁の故郷から夜行の汽車に乗つて、グラスゴウへ着いたのは、翌朝未明の頃であつた。予は既にスコットランドに入れり、ガレドニアの國に來たのである。

停車場ホテルに入りて、少時休憩したる後、電車に乗つて市街の見物に出かけた。先づ美術館を參觀したが、此處にも、和蘭派、フレミッシェ派、ヴェニス派等の名匠の代表作と見るべ



グラスゴウ大学

きものが蒐つてゐて、レンブランド。ハルス。ルーベンス。チシアン。ムリロ等の刷毛の跡を留め、西班牙の大匠ヴェラスケズの肖像畫も、佛の名家グレイズの小兒畫もある。又た英國畫宗のターナー。コンスタブル等の風景畫も少からず。ホイスラーの描いた哲人カーライルの肖像は、此畫家の傑作たるのみか、また此美術館の誇なのである。此美術館また歐洲屈指の美術の寶庫たるを以て稱すべきものである。附するに工藝品博物館がある。

美術館より公園を隔て、グラスゴウ大學を觀望したる後、予は再び電車で、市の他端に在る著名の大寺に詣つた。この寺も十二世紀の頃に建立せられたもので、蘇國大伽藍の一に居り、其窓硝子は獨乙ミューンヘンの製造で、十萬磅を値ひしたるものな

りと云ふ。内陣にも脇堂にも多くの墳墓あり。而して此寺の上なるネクロポリスの岡は、廣大にして清らかなる墓地である。壯麗な墓碑の多く立てるが中に、岡の頂上、巨大なる銅像の高く屹立するものこそ、蘇國名譽の人傑たる宗教改革家ジョン、ノックスの墳墓である。

グラスゴウ市は、名所古蹟に富んでゐないので、唯だ人によりて最も注意を拂つて參觀すべき所は、クライド河の大造船所である。此市が蒸汽機關の發明者ゼームス、ワットを産んだ爲と、水深きクライド河を擁するが爲とて、世界第一の造船所となり、グラスゴウの富榮之によりて盛なるを致した。されど予は此の造船事業を視察するを目的としなかつた。却つて此地を経て、蘇國の湖水の風景を一見せばや、ローモンドの美湖に浮び、更らにスコットが「湖上の佳人」の大詩に歌はれたるカトリン湖に遊び、エレンの島に佳人マーガレットの跡を偲びつ、スターリングを経て、エデンバラの舊都に廻らうと欲したのである。ホテルに着くと直ちに玄關番に、湖水地方の巡遊の都合を聞いた。彼れは手を振つて笑ひながら、駄目だ〜！ 最早廻遊の季節を過ぎたから、カトリン湖までも往くべき便利が無い、馬車も汽船も通はなくなつた、十月の末に来て湖水廻遊などの出来るものには無い、唯だ本月中なら、ローモンド湖までは、朝早く汽車が出る、湖上の汽船もあり、此市から一日で往復が出来るから、明日の朝でも

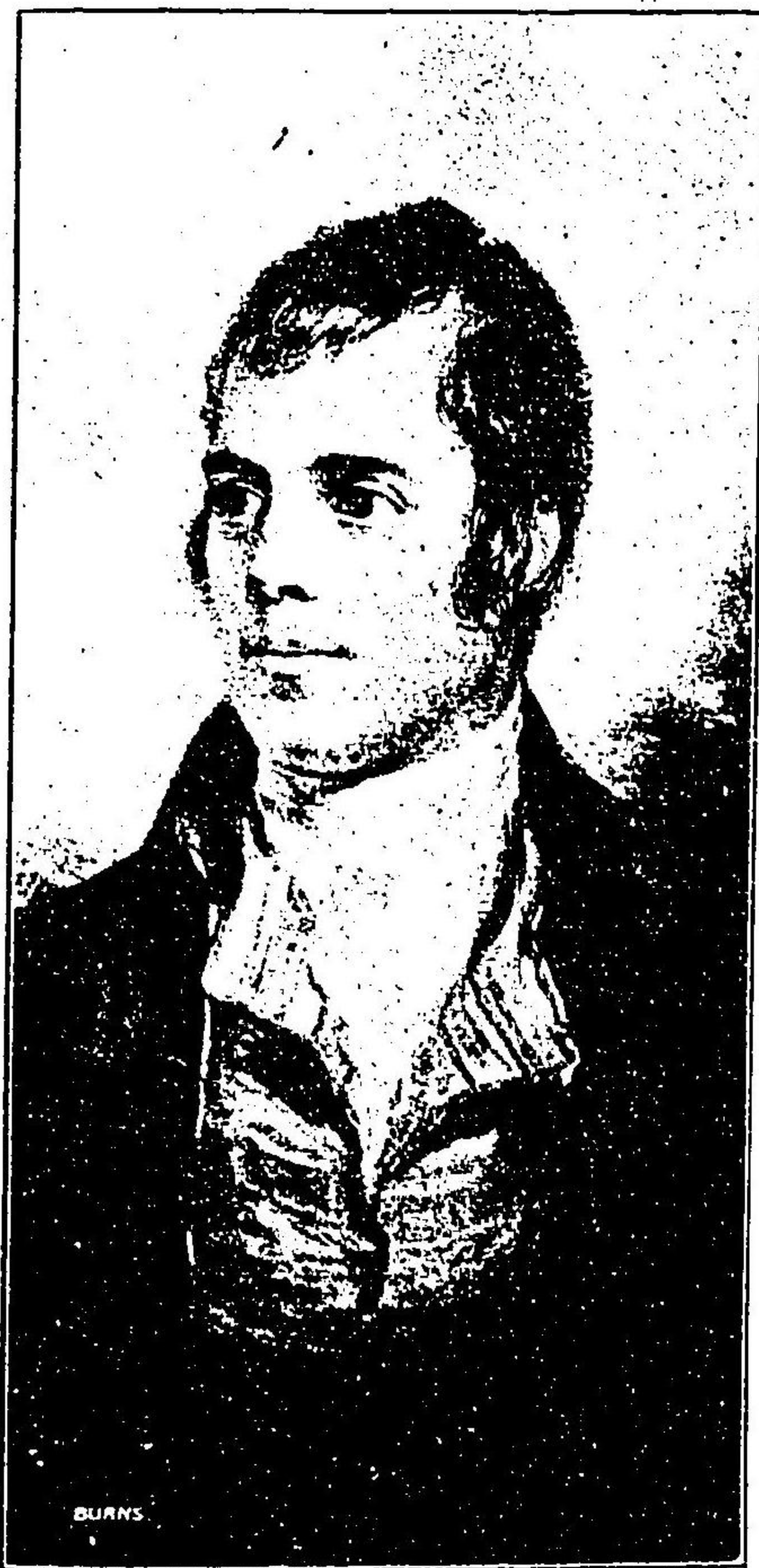
往つたが良からうと教へてくれた。それで豫定の蘇國旅行は、ガラリ計畫を變へねばならなくなつた。

ローモンド湖は明朝の事。さては此午後を如何にして過さん乎、何處か見物すべきところは無いか？ 植物園は中々に宏大なるものと聞いているから、それへ往かうか。公園にても遊ばん乎など思ひ煩ふ。かゝる時に獨旅は、談相手が無くて實に面白くない。ブラ／＼市街を歩いてゐると、セント、イナック停車場へ來たので、時間表を見ると、アイヤと云ふ字が目についた。アイヤ？ アイヤは蘇國の詩人バーンス——同じ國の詩人スコットが、『蘇格蘭の誇』と贊したるロバート、バーンスの故郷では無いか？ 而も其地は二三時間にて往復の出来る近さに在る、然り予は直ちにアイヤを訪ふべきなり！

蘇國詩人バーンスの故郷

蘇格蘭はバーンスとスコットとの國とである。彼等によりて其明媚なる山水と其純朴なる民情と、また其歴史と國粹とを、世に歌はれたのである。而して又た其國民は、王國の殘の花と

りとして、我思へらく彼は未だ蘇國を知る能はざるものなりと、などゝの理窟を附けて、予は欣慕措かざる『靈覺の農夫バーンス』の故郷へ來た。



詩人バーンス

歌を思ひ、
宮殿の跡に
メリー女皇
を偲ばずん
ば、假令カ
トリン湖に
浮び、カレ
ドニアン運
河を下りた

開きつ、政争と嫉妬との爲に、敢無くも斧鋏の下に散り果て、其末路の傷ましきは、獨乙の詩人シルレルが不朽の文字によりて、後世の同情に訴へたる女皇メリー、スチエアートを憐みて、其跡を人弔ふべく傳へてゐる。されば蘇國に遊ぶものにして、其山水、人情に二大詩人の

アイヤに來た。此處はクライド灣に瀕せる昔から一小港で、また避暑地である。アイヤ河に架する新舊の二橋は既にパーンスが詩に上つたものだ。停車場前の小園には、詩人の銅像立てり。愛國者ウォーレンスの幽禁せられたりて高塔は見ずとも可なり、予は先づ、詩人の家に急いだ。

電車一路、パーンスが村なるアロウエーに通じてゐる。予はこれに由りて行くこと二哩、森を通じ、牧場を過ぎ、田野を眺め渡しつゝ、嗚呼この静かにして美なる自然こそパーンスを生またるなれ、彼の森も、此の野も、彼が歌袋に入りたるものぞと思ひつゝ、やがて白塗、草葺の農家の路傍に立てるものあるは、詩人の生れたる伏屋なりとは、其軒に掲げたる板によりて著し。これを見るは歸途にせよ、先づゾーン河畔のパーンス記念堂まで往くが順序だと、車掌に教へられたまゝ過ぎ往いた。

ゾーンの潺々として清き流に架する石橋の袂で、電車は終點となる。この橋は新橋で、それと對して近く古橋あり、二橋の間なる美しき小園の中に、巍然たる希臘式の殿堂は、即ちパーンスの記念堂で、諸々の花卉に薰する園中を往きて此堂に入る。其建築は寧ろ拙劣不調和なれど、中々に壯大なるものである。之を見るなら、嗚呼、蘇國の民が今日パーンスを崇拜する情



橋石古の河ンゾ

の十分一だにも、彼が生時に漲がれしならんには、又た彼が醜譁たる志氣、熱火の愛國心の爲に、貴族の彼を憎忌することが無かつたなら、又た此堂の建築費の何分一なりともが、パーンスの財産であつたなら、彼は自暴酒を飲んで、貧苦の中に天死することも無かつたらうにとの感慨を催し來るのである。『英雄崇拜論』の著者は、パーンスの曾てエデンバラに赴きて、詩名を讃へられ、王侯貴人の客となり、社會の獅子となつた爲に、却つて世人は此の獅子を殺したのであると云つたが、百年後の今、彼が詩想の泉たりしゾーンの清流に臨み、此の壯大なる殿堂を起して彼を祀ることは、誠實の英雄パーンスの喜びとせざる所ならんかなどとも思ふた。

堂内には詩人を種の土産品を賣る店あり、彼が戀

戀の歌となりし『いとこ女』(“Bonnie Lassie”)や、『ハイランドのメリー』を聯想せしむべき、可憐な田舎娘が、編物を手にしながら店番をしてゐた。予は彼女に就いて蘇國高地の名物格子縞で表装したる、小本のバーンス詩集を買つた。堂には又たバーンスの名篇によりて知れたるタム、オ、シャンターと其相棒のジョンニーとの滑稽な像が置いてあるのは、餘りに業とらしくて、却つて無くもなてある。堂の階上に昇れば、アロウエーの野景が一眸の下に集る。流に沿ひたる園中の花徑を通ずること十數歩にして、年古りたる石橋に出づ。半月形の風雅な橋で、兩岸繁き木立の間を渡すこと、凡そ幾百年の昔よりかくてありしものか? これぞバーンスが、アイヤの口碑を歌ひて、我からも名吟なりと許したる詩中の好漢タム、オー、シャンターが、アロウエーの古寺から化物に追はれて、遁げ落ちた橋と云ひ傳へられてゐる。予は此古橋に立ち、逝く水を見て、詩人を思ふたのである。鋤を執りて野に畊す質朴なる詩人、木の枝より、又た森の小鳥より歌を學びつゝ、自由不羈の志は困苦に鍛はれて精鐵の如しと、自から吟咏したるバーンスを憶ふた。

記念堂に近く、其昔、化物の出たアロウエーの廢寺がある。堂舎既に頽れ、屋破れて形を留めず、纒に葛繁き石造の外圍を存するばかり、其前面の高き所には、名残りの破鐘が懸つてゐる。寺内にはバーンス父母の墓がある。



家小のスーバ

徒歩にて『誕生の小家』まで引返した。バーンスは親の代からの貧乏百姓であつたから、其家の穢ろしきこと、牛小屋にも似たる白屋である。薄暗き一室には、バーンスの生れ落ちた寢床あり、バーンス家のがらくた道具も若干を存す。いかに英雄は處を擇ばずして生るゝものなりとは云ひ條、マツケーが『猶太人の王ダビテに亞くべき偉大なる農夫——農夫、詩人、愛國者、王者、古今の最も偉いなる者の一人』と稱したる彼れは、如斯き陋屋に生れ落ちたのである。カーライルが云へるが如く、『英國の最も偉大なる靈魂は、貧窮なる蘇國農夫の形體を以て、我等の間に來れり』である。

小家だけは、古への貧しき面影を留むれども、庭

には芝を敷き、花を栽え、大理石像など立て、ある。昔のパーンスは、かやうな清楚なる庭園を我有として朝夕を送ることが出来無かつた！ 小家に隣りて、新築のパーンス記念品陳列館あり、詩人の筆蹟、肖像などを陳列し、又た繪葉書、肖像、詩集などを賣る。此店にも予が入ると、亦た愛らしきハイランド娘の『いと乙女』が出て来て、何か買つてくれるだらうと待受けてゐたから、それで陶器焼のパーンス像を買つた。

湖上の雨

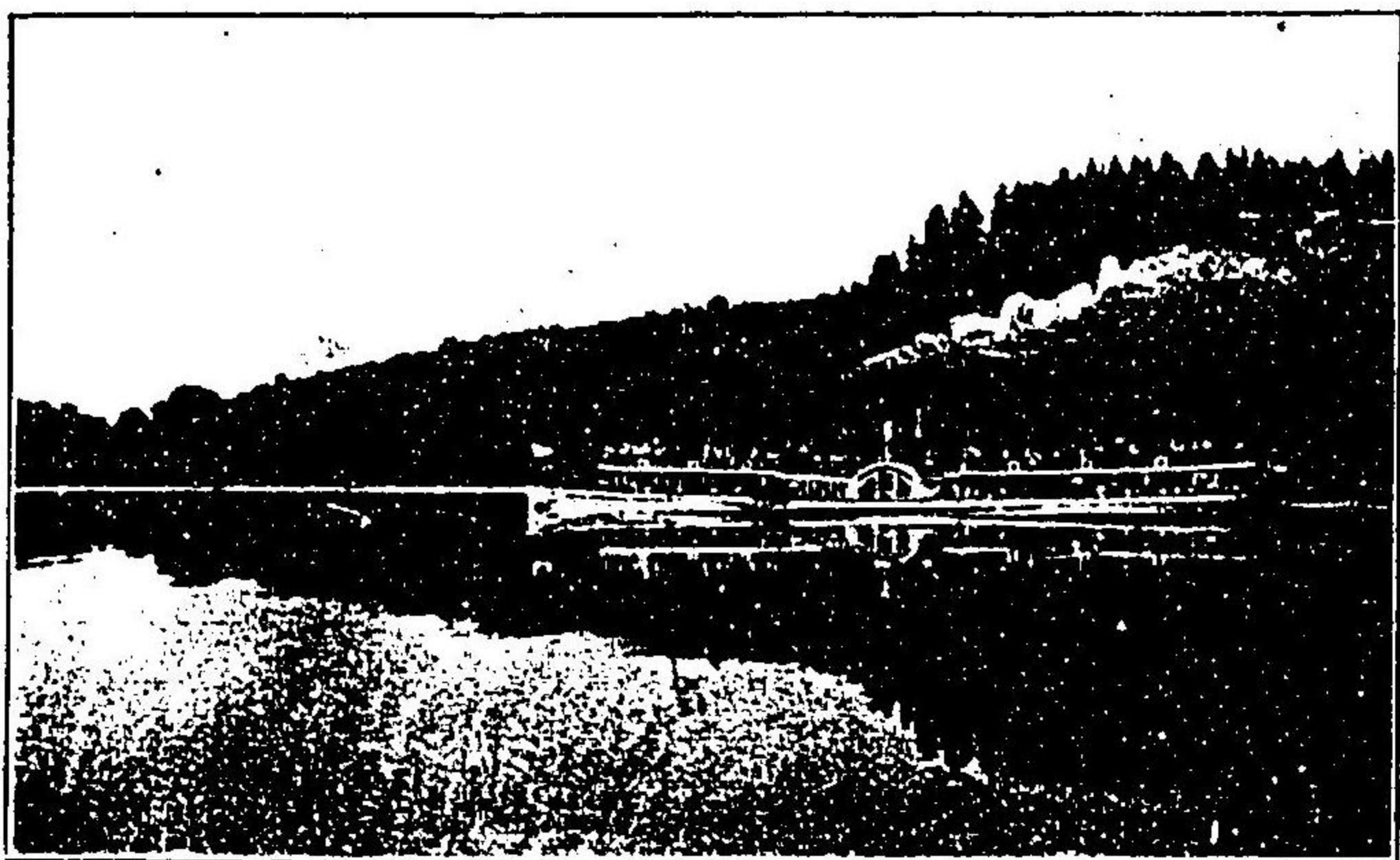
アイヤから歸つて、ホテルの食堂で晚餐を食つてゐると、突然予の背を叩くものがある。驚いて見返れば、時事新報社の板倉君で、同社の石河、小山の二氏も一處であつた。思ひ掛けぬところで知人に逢つたのが嬉しく、食後は客間で四方山の話の末に、三君は予と共に、明朝ロームンド湖の見物に行くこととなつた。蘇國の湖景を賞せんとするのには、今まで獨りポツチの予に日本人の道連れが出来たのは難有い、旅は道連れに限る！

十六日朝、空は曇りて、天氣は怪しかつたが、豫定通り汽車に乗つて出かけた。往くこと一

時間ばかりで、ロームンド湖の最南端なるパロホ町の埠頭で、遊覧小蒸汽に移つた。最早季節外れの事だから、船は唯だ一艘だけしか、此湖上に運つてゐ無い、なほ一艘は湖畔に繋いてあつた。此遊覧船は外輪で可成り大きく、また美麗で、甲板は廣く、これへ椅子を並べて遊覧客に眺望の便を供し、下には大きな食堂がある。又た湖畔の村々へ、多少の貨物や郵便物を送るの用をなすものである。

予等は『湖上の佳人』のカトリン湖に遊ぶことが出来ぬとなれば、せめてロームンド湖の明媚なる風景に飽くことを得んと欲したるに、生憎や朝來の曇天は遂に雨となつた。船のパロホを發してより程も無く、雨は降り來り、湖上は一面に霞みて、近き岸も島も臆に遠ざかつた。初めの程は傘をさして尙ほ甲板に留まつてゐたが、遂には辛抱しきれ無くなつて、食堂に逃げ込み、廣き窓から水面を見渡してゐた。心ゆくまで湖景に親しむことを得ざるの憾みよ！ されど、蕭條たる秋雨の中に此湖に浮びて、密かに古への詩人を思ふのも一興であり、それに折々は晴るゝ間のありて、又たく甲板へ出る、岸も島も明かに見渡されたので、景色に變化があつて一しほ面白かつた。

ロームンド湖は、數多き蘇國湖水中にて最も大きく、又た其風光の最も美しさを以て推され



船遊の上湖ドモロ

てゐる。されど其水は黒く——鐵漿のやうに黒くして、決して清冽とか澄碧とか稱することは出来ぬ。カトリンの水とても然りと云ふ。たゞ此水をして美ならしむるものは、周回幾十哩の兩岸と、細長きと二十五哩の水上に散布せる、大小幾多の島嶼とある。岸にも島にも、樹木密生し、又た島と名の付かぬ岩頭にも沙洲にも、矮樹が水に根を洗はれながら立つてゐる。斯國の民の保勝に勞するや、一木一草をも惜みつゝ、風致をして益す美ならしめ、且つ交通の便を供へて、恣て四方より遊客を招致し、蘇國湖郷の景、天下に秀づるを賞せしむるのである。水には贅澤なる遊覧船が浮んでゐる、岸には坦々たる大道開けて、時に自動車か佳人君子を乗せて滑かに馳せてゐる。又た水面の佳景を恣にすべき形勝

の地を占めたる處々には別荘あり、ホテルも見ゆ。また此處彼處の、水面まで緩き坂になつた草山には、羊が蠢き、牛が眠つてゐる。突兀たる奇岩の峭峙せるものは無くて、いかにも溫和かな景色、實に太平の象を呈してゐる。正しくコンスタブルやゲインスポロウが畫中の風光である、英國水彩畫の生るゝ所以の景趣である。これを眺め渡してゐると、我等山水の美鑑を享けたるものは、日本にはローモンド湖にも勝りたる好景が何處にでもあると誇るが、扱て此等に對する保勝と開發とが丸て缺けてゐるのを残念に思ふ。そして今後日本の經世家は、風景の保護開發を謀らねばならぬと考へる。河流湖池は水力電氣の爲に在り、神山の老杉を伐つて、村の小學校を建てるのが、文明だと誤解してはならぬと慷慨するのであつた。石河君は岸の道路を見渡しつゝ、此路は一尺に何程費やしてゐるであらう、つまり金を鋪いたのですなと感心した。

船が北へくと進むに従つて、兩岸は逼り來り、風景もまた更に美しくなる。昔、尼寺のあつた『女の島』も横に見て、バルマハの棧橋へ着くと、船から牧草を卸した。對岸のルスでは、甲板へ多數の羊を積込んで、これを更に上方のロワルデナンまで送つた。此處よりして湖水はいよゝ／＼狭くなる。湖水の東岸に峙てる美岳ベン、ローモンドも今日は曇りて山嶺が見えぬ。

西岸のターベットを過ぎて、東岸のインヴァースネイドへ着く。回遊期節であると、此處からして馬車がカトリン湖まで往復するのである。船はまたロイストーン岩を見て通るが、此岩には一の洞窟があつて、これをスコットの小説『ロブ、ロイ』の主人公で、蘇國のロビン、フッドなりと稱せらるゝ義賊ロブ、ロイの囚はれてゐた牢獄なりとの傳説のある所だ。

予等は湖上に浮ぶこと三時間、船中にて午餐を喫したる後、ローモンドの最北端なるアルドリイへ着いて、船は埠頭に繋がる、予等は上陸した。船は二時間の後に再び予等に乗せて、パロホへ引返すべく待合はしてゐるのだ。アルドリイは人家とても稀なハイランドの片田舎であるに、季節外れであるが爲に、ホテルさへ殆ど鎖されてゐるばかりに寂れてゐる。たゞさへ淋しいのに、今日の天気だ。雨は小休みになつたが、空は矢張りドンヨリと曇りて、やがて又た降り出しさう、地面は水に溼つてゐる。まして見物すべき所も無いのであるから、これ以上陸したとて何の風情も無いのであるが、兎に角もと街道數丁の間を往きつ返りつ、又た丘に登つて蘇國の名花ヘザーを摘んだり、水際に下りて湖上の風景を眺めたり、また西岸に敷ける鐵道の停車場に入りて、繪葉書を投函したりなどして時刻を移した。

暫くして船に歸つて見ると、水夫は總かゝりて甲板を洗つてゐた。予等は食堂で雑談する。

またボーイから繪葉書や、小本格子縞表装の『湖上の佳人』を買つたりなどしてゐると、定刻になつて發船した。又たもや雨になつた、大降りになつて來た。かうなつては景色の眺望も無い。たゞ茶を飲んだり、居眠りをしてゐる中、船は往途の行程を繰返す、パホロに歸着した時分には、雨はまたやゝ晴れてゐた。

汽車の窓より、往途にも一見したるクライド河の造船業、鐵工業の殷盛なる情況を打見やりつゝ過ぎて、夕方にはグラスゴウ停車場へ歸つた。此處にて予は湖上同行の三君と別れて、直ちにエヂンバラへ向けて出發した。

蘇國の舊都

●新しきアゼンスの都

エヂンバラへ着いたのは、十六日の夜の八時ごろであつたが、ホテルに入ると予は直ちに、雨中をも厭はず、當時開設中の蘇國博覽會の夜景を見物に出かけた。

夜は蘇國の舊都に明け放れて、十七日の朝は嬉しくも晴れ渡つてゐた。明日は日曜日だから

見物が出来ぬ。それに今夜の汽車で倫敦へ歸ることに定めたに就いては、今日の晝間に、出来る限りの見物をしやうぞと、朝早くからホテルを飛び出した。英國の歴史に最も傳奇的な記録を留め、殊には哀れなる女皇メリーの遺蹟たる此舊都、而も歐洲では最も美しい中の都會に就いて、予は多くを見るの邊が無かつた。エデンバラは十五世紀より十六世紀の間、蘇國の王都であり、其時代の混亂を極めたる政争隠謀の史蹟は、即ち此都を中心として演ぜられたのである。英國史より見て最も興味がある。而も亦た英國文藝の一大中心を成し、十八世紀以降、著名なる文士學者の此都に住みて赫々の名を輝がしたものが多し。史家にてヒューム、經濟學者にてアダム、スミス、詩人にてバインズ及びスコット等は實に後世までエデンバラの譽を傳ふるものであつた。此都は今日でも製造工業を以て稱せらるゝことは出来ぬが、印刷出版業では英國に冠し、現に大英百科全書の如きも、其初めは此都に於て成つたものである。エデンバラ大學またジェームス六世の創立に係りて、古來學術界の重鎮である。

外觀に於てもエデンバラは他の都市に優りたる風致あり。中央に高く、黒き岩石より成れる丘上には、歴代の王宮で、又た蘇國歴史の本舞臺たりしエデンバラ城が崇嶺として峙つてゐる。之に對してはカルトン丘あり、市外には「王の園」の一丘高く聳えて、「アーサー王座」の嶺



大小の公園を抱き、中樞の街路の四辻毎には、名士人傑の銅像が立つてゐる。舊市街はスコットの好んで描きたる神史小説の都で、新市街は文明の新都である。

となれるものもある。其地勢が希臘の古都アゼンズに似たればにや、此都は「今の雅典」と唱へられてゐる。其舊市街には、英國否歐洲に稀れな、十階十二階と云ふ高層あり、昔は貴人紳士の住み區域であつたが、今は貧民窟と變つた。舊市街と城丘下の谷を隔てたる北方には新市街

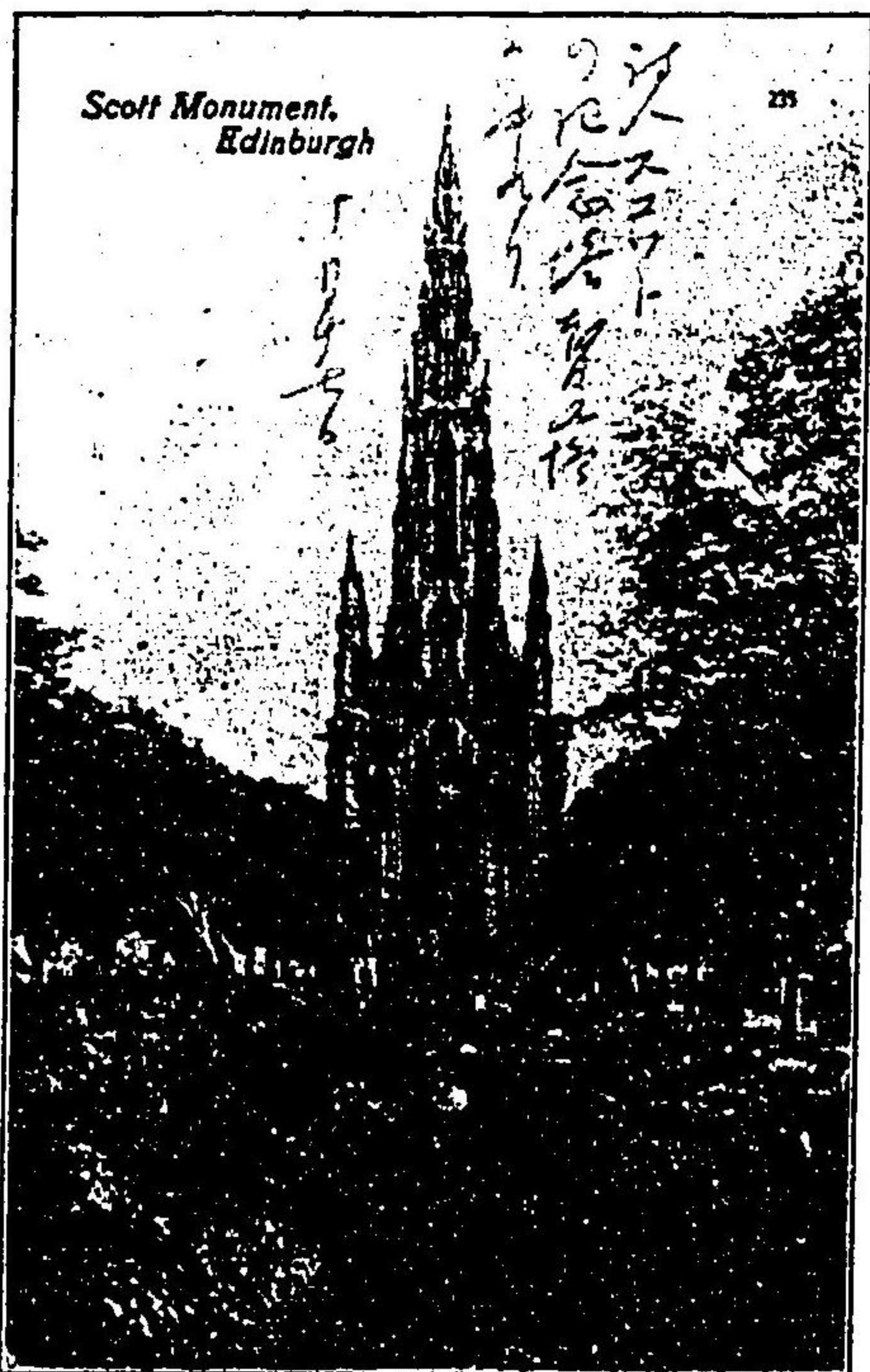
詩人
スコット
の頃から出来
た町々である
から、其街區
の設備は整然
とし、宏大な
る家屋は薈を
並べ、中には
が廣がつてゐ
る。十八世紀

新舊兩市街を連ぬる大堤の下には國立美術館あり。これもまた歐洲屈指のもので、敢て大傑作を以て稱せらるゝものを藏してはゐないやうだが、世界名譽の書流と畫家とは此館内に於ても代表せられてゐる。外國の畫家百三十二人及び英國畫家百六十八人の作品三百八十點を藏すると云ふは亦た盛である。予は此美術館でも、グルーズの小兒畫が氣に入つて、其中の一枚の印畫を看守から買つた。美術館に隣りて彫像館があるが、之は美術學生の爲にのみ開かれて、風來の見物人を容れない。別に又た國立肖像畫館ありて、メリー女皇の彈じたる立琴だの、ノックスが宗教改革を叫んだ演壇までも保存せられてゐる。

美術館を出て、數十歩、プリンセス街の一侧を成せる公園の中には、スコットの記念塔が峭立してゐる。ゴシック風の巧緻なる建築で、堂内には詩人の大理石像を安置し、又た螺旋階で足を痺らせながら塔上まで昇つて見ると、スコットの眞蹟其他の記念品を陳列してあり、且つ此處よりエデンバラ全市を眺望するに宜しい。蓋し此スコット塔は此都の最も美しく目立たたしの裝飾であつて、又た國民が其國の文豪を尊重するの情の極めて厚さを示すものである。スコットの爲には、かゝる壯大なる記念塔を興すだけの價値はある。さりながら讀つて考ふれば、ウエザアリー小説中の一冊、例へば「アイザンホー」一巻の方が、このゴシック塔よりも

更に偉大にして而も遍在なるスコット記念碑ではあるまい乎？ 金の點から見ても、スコット小説の一巻が、凡ての出版者に與へた利益を積れば、優に此大記念塔を建築するを得て、猶ほ剩餘があるであらう。

塔側には、亞非利加の探検傳道者リザイングストンの銅像がある。又た更に進めば、ウエリントン將軍の記念像を見る。それより監獄や學校を過ぎて、カルトン丘へ登つた。此丘はアゼンスのアクロポリスに酷似してゐると云ふので、英國



塔 念 記 ト ッ コ ス

がナポレオンをウオータールーに破つて、戰勝に誇る時節に、此丘上にアクロポリスなるアゼネ神の殿堂パンセンに倣ひ、國民殿を建てかけて遂に成功し無かつたが、既に建築した一部

は廢墟となりて存留してゐる。丘上には又た圓塔形のネルソン記念碑あり、予は又た物好きに其の頂邊まで昇つた。

カルトン丘に對したる處に、希臘殿堂風のパーンス記念堂がある。かのアロウエーに立つてゐるものに似て小なるものだ。此堂では近年までパーンスの遺品を展覽させてゐたが、見物人が少くて期定に合はないため、店を仕舞つて、遺品は市公會堂へ移した。少しも希臘的思想の詩人で無いパーンスの爲に、希臘式の記念堂を建てたのが抑もの間違で、これと謂ひ、ツーン河畔のものといひ、共に評判が良くない。パーンスも最負の引き倒されて迷惑なものだ。

プリセンス街へ戻つて、再びスコット記念塔を過り、公園に沿うた人道を歩いてゐると、八歳ばかりな赤い衣服を着た貧家の女兒が、片足を喪つて、撞木杖に縋りながら、ビヨン／＼歩いて來るのに出會つた。同じくらゐる年輩の二人の女兒と、五つばかりになる男の兒と連合つて、何處かへ遊びに往くところらしかつた。予は哀れなものと思ひつゝ、摺違つて、暫く立停つて見送つてゐたが、ドゥ思ふても可哀さうでならぬ、片足を喪つても生存するのが、幸か、不幸か分らなくなる、自然と涙が出る。いよく堪へられ無くなつたので、又た引返して其女兒の跡を追ひ、四人の小兒に一片づつと與へて、これで菓子でも買つてくれと云つた。孰れも

妙な顔をして受取つた。男の兒だけは恥しいのか、外國人が怖いのか、手を出さ無いのを、サア／＼と強ひて與へつゝ、急ぎ足で彼等と離れたが、扱て片足の無き不惑な少女、而も貧家の兒よ！予は彼れを悲しむの情からして、聯想は乍ち我が亡兒に及び、人通りの多き大道でキマリが悪いと思つても、兎角涙が出る、目が曇る。ハンケチを顔へ當てながら、町を向側へ駆け抜け、やうやく氣分を一轉しつゝ、横町に残れるスコットの舊宅の前まで來て見ると、窓硝子には麗々と金字で、某抵當金貸會社と書いてあつた！一呼、昨は詩人の家、今は質屋なり！

● メリー女皇の宮殿

『王の園』の丘の麓なるホーリールド宮まで往つた時は、まだ公衆を入れる時間になつてゐなかつたから、暫く門前の廣場で待つてゐた。ハイランド兵の歩哨が銃を肩にして、門前の鋪石の上を同じ歩調で百度蹈むのを見成つてゐた。

塔上の時計が十一時を報ずると、門は乍ちサツト開けた、幾多の見物人は宮中へ入つた。ホーリールドとは『聖なる十字架』と云ふことで、元は寺であつた。其寺は昔の王様が狩競に出で、角の間に十字架の生えた鹿に逢つた所に建立したもので、又た借金に責められるものが此

寺の境内に逃込みさへすれば、細目を免れたと云ふ勿體ない治外法權地であつた。それが何時の世よりか、蘇國王の宮廷となり、今も英國王の一離宮である。而して此宮こそ實に哀れなる



蘇國女王メリー

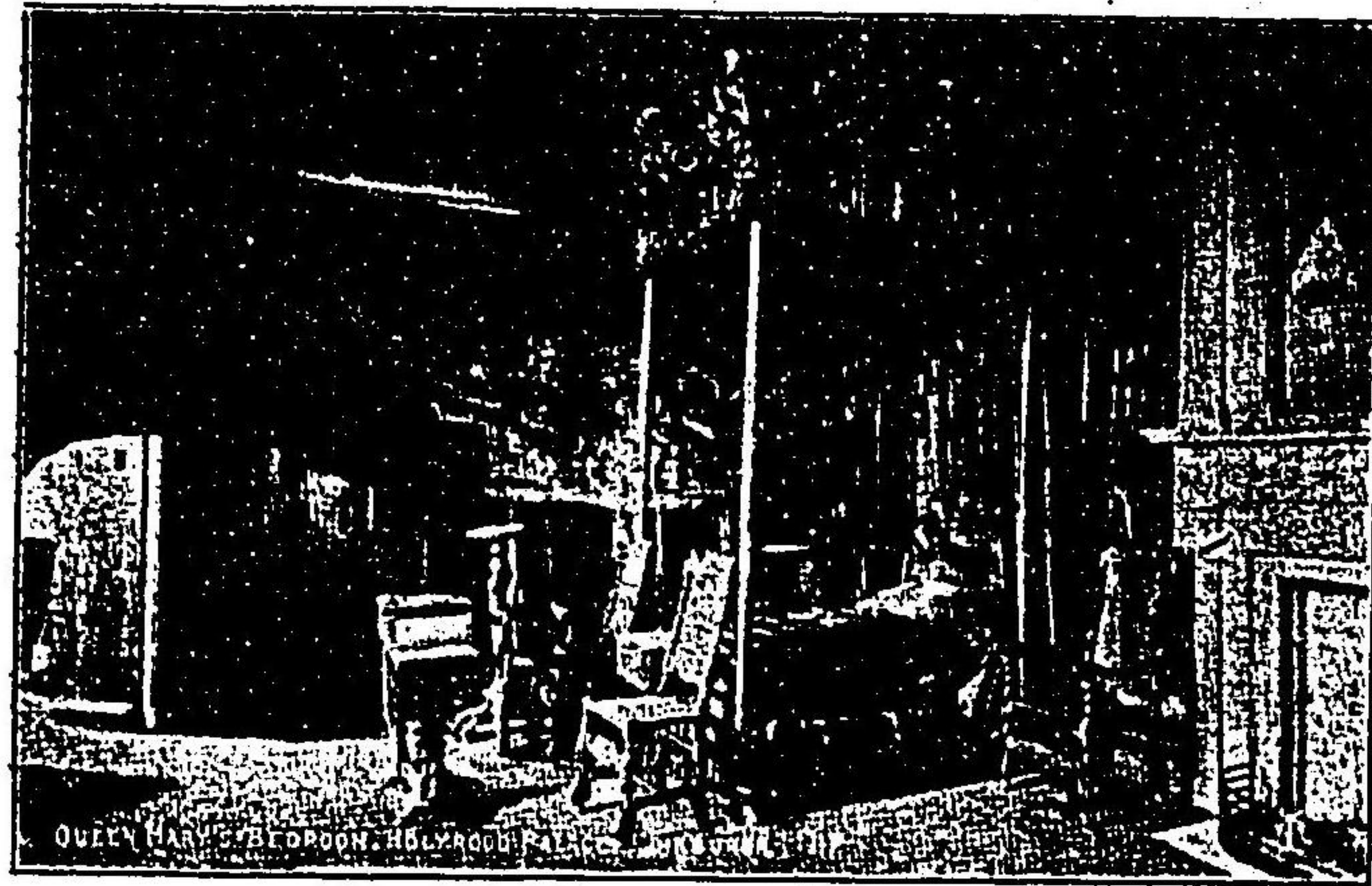
メリー女王は才智に富み文學に秀で、且つ天の成せる麗質に加へて多情なる美人であつた。

夙に佛國太子に嫁したが、伉儷久しからずして寡婦となり、再び故國に歸りて王位を踐んでか
ら、抑も其の慘憺たる一世の悲劇の序開きてあつた。二十三歳の若後家の心は亂れ勝ちて、

美少年ダーンレーが十九歳の若衆姿に魂を奪はれて結婚したのに、二ヶ月たたぬ間に、多情なる女皇は、又たも音楽者より擡て、侍臣となしたるリッチオを寵して、醜聲外に洩るゝものがあつた。ダーンレー怒つて一味徒黨と共に、女皇の私室に押入り、其側に在りて立琴を弾じてゐたリッチオを弄殺にした。侍人の血は女皇の衣に濺いだ。メリーの心は狂つた、そして又たボスエルを愛した。ボスエルはダーンレーを弑したが、女皇は其大罪を問はぬのみか、而も四ヶ月ならずして彼と公然結婚の式を行つた。國政はいよく紊れた、民心は益ます離畔した。女皇は遂に幽囚の身となり、後一旦英國へ通れて従姉エリザベス女皇に頼つたが、冷酷なるエリザベスは又た之を捉へてフォザリングゲイ城に監禁すること十九年、メリーは四十を超えても容色なほ衰へず、エリザベスが寵伴リスター侯も之に迷はされたので、事は面倒となる、加ふるにメリーを奪つて英國王位を轉覆せんとするの陰謀さへ企つるものがあつた。エリザベスは遂にメリーの哀訴歎願に耳を傾けずして、斷頭臺上斧鉞の露と消えしめた。予はかやうな悲惨な血腥い歴史を想ひ浮べて、此宮殿を見て廻る。階下にはダーンレーの居間がある、階上にはメリー女皇の室がある。彼女が不義の危き樂みに耽つた寢臺さへ昔の儘である。ダーンレー等が姦夫リッチオの死骸を八裂にして投げ落したと云ふ忍び階段がある。リッチオの血に印

せられた跡には、真鍮板を打つて由来を記してある。女皇の化粧室や寢室は奥まつた隠れ間から、成程これではと想像が附く。

いづれの室にも、壁間に繪畫を掲げて、また一の美術館たるの觀あり、歴代の國王の小照、メリの美人像、其第一の夫佛國太子の畫像、ダインレーの姿などもある。殿内にはホーリールード寺院の名残りなる禮拜堂の廢墟がある、屋は破れ盡し、四壁また碎けて、昔



メリー女王の寢室

は堂内に祀られてゐた貴人の墳墓が雨隠しになつてゐる。メリー女皇は此の禮拜堂にて、僅か二年の間に、先きには燃ゆるが如き情火を以てダインレーと偕老を契り、後には大逆無道のボスエルと結婚を盟つたのである。

宮前の兵舎に隣りて、異風な一構は、此處ぞメリー女皇が、朝な夕なに白葡萄酒に浴して、天成の麗質を

磨いた浴室のありし處である。

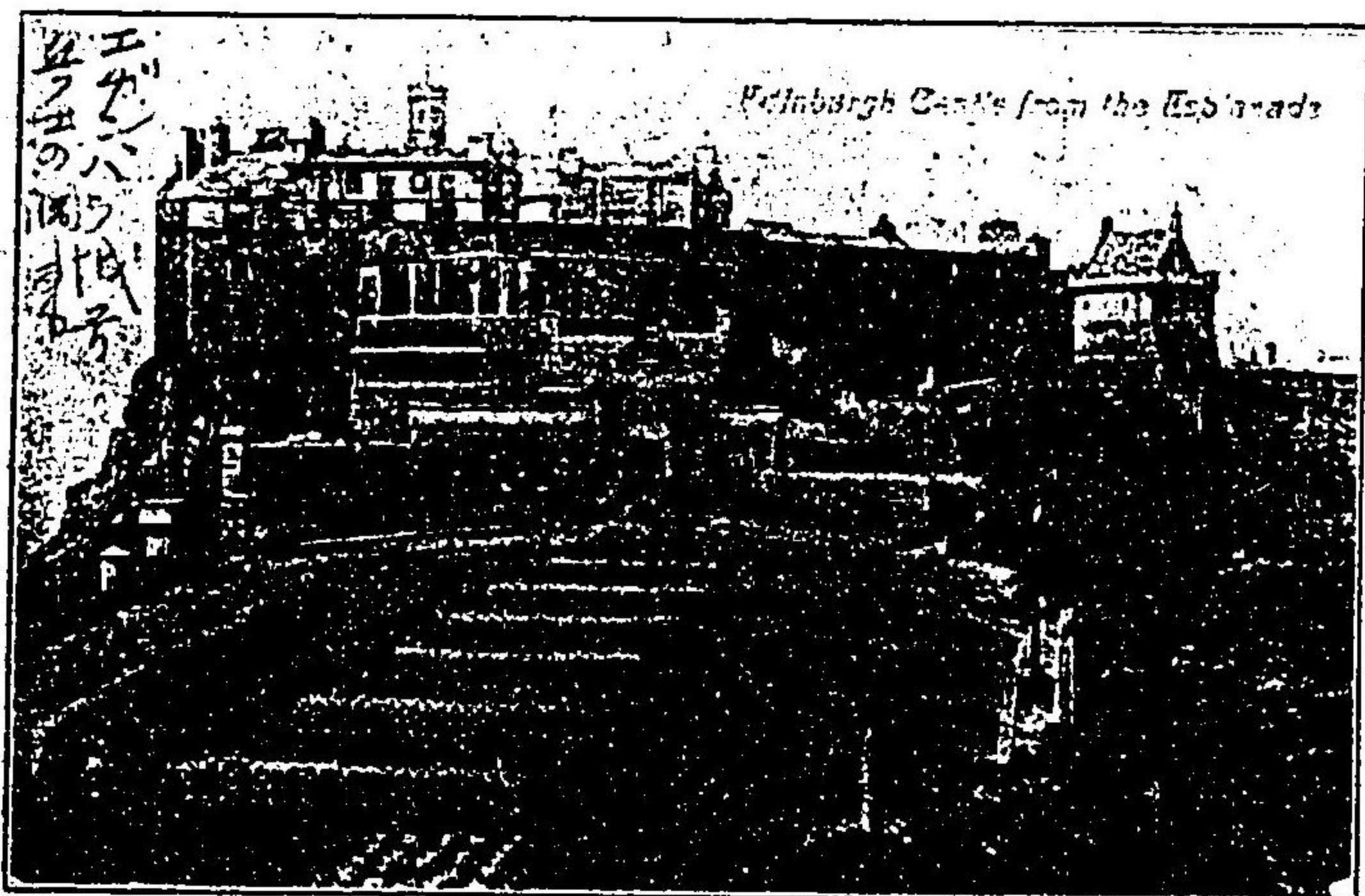
● エデンバラ城

予は蘇格蘭王國末路の政争の本舞臺であつたエデンバラ城へ來た。城前の廣場では、白き上衣に船底形帽子、格子縞の短袴を着け、大きな胴亂を下げたハイランド兵が訓練してゐた。新兵と見えて、孰れも短き杖を腋に挟んだのが、皮袋から管の生えた蘇國特有の風笛と太鼓との軍樂に連れて、行進と敬禮との練習をしてゐた。

堅岩の上に建てられた此城は久しく蘇國の王城であり、王國の季世に當つては、屢ば強敵の包圍を蒙つて陥落したこともある。メリー女皇の忠臣カークレデーが、此の孤城を墨守して、叛旗を翻へしたる全國民に抗し、彈盡き兵亡して自から敵刃に斃れた悲壯の事蹟も残れば、攝政モルトンがメリーの子ゼームスの命を受けて此城を圍んだこともあり、又た蘇國人のチャールス二世を奉じて王と稱するや、クロムエルの鐵騎は破竹の勢を以て進撃し來り、忽ちにして此城を下したこともある。岩の上に建てられたる堅城は舊に依つて存すと雖も、國は既に破れて英國に併せられ、今や王城の名残は、ハイランド聯隊の兵舎となつてゐる。

吊橋を通じ、樞門を過ぎて城内に入り、坂路を登りて主塔に上ると、此處には蘇國の王冠、玉杖、玉笏などを藏め、又た傳奇的の英雄ロバート、ブルースの王冠も保存せられてゐる。蘇國王冠はブルースが、パンノクバーンで英軍を撃破つたる後に、工人に命じて技巧を凝さしめたものと稱せられてゐるが、王國の英國に合併せられた後、此王冠の存在することが、國民の再び王國恢復を計ることの誘惑となるべきを憂へたがために、何處にか隠されてしまつて、久しく其影を見ることが無かつた。後世に至りて詩人スコット等より成れる委員が、しきりと此の王冠の行方を穿鑿して、遂に城内の納屋にて、大きな櫃の中から發見した。其櫃も此の寶物庫に保存せられてあり、又たスコットの自から筆を執つて、此王冠の由緒を記したる小冊子が、城内で賣られてゐる。

メリー女皇のゼームス六世を産んだ寢室は、薄暗い小さな室で、中には城兵の家族のものなるか、一人の婆さんが、メリー御最期の繪葉書や、風景帖などを賣つてゐた。昔の國會議場たり、宴會場でありし大廣間には、古今の武器を陳列し、又たヴィクトリア女皇の靈柩を載せたる砲車も飾られてゐる。茲では兵士が繪葉書を賣つてゐた。城内には第十二世紀の頃に建立せられた舊き寺堂あり、又た反逆の罪ある者を幽禁したる石牢もある。砲壘高くエヂンバラの



城、ラ、バ、ン、ナ、エ

全市を見渡す處には、最舊式の大砲と圓石の彈丸とが、モルトン城攻の昔を語るもの、如くに据ゑか置れてゐる。壘下を見ると一隅には「兵士愛犬の墓地」と掲示したる小さな墓場があつて、菊の花など手向けであつた。

●蘇國勸業博覽會

予は十七日午後、再び博覽會へ赴いて場内を一覽した。英佛博覽會と同時に開催せられたる此博覽會は、スコットランド一國の商工業進歩の現狀を示したもので、中々に悔るべからざる規模を有するものであつた。出品は殆ど凡て即賣が目的のやうで、又た遙かに伊太利フロレンスから、大理石彫刻や、ボンヘイ廢墟の灰で造つたと稱する神像の模型なども

賣りに來てゐて、伊太利人が覺束無き英語で客を呼び入れてゐた。又た日本人の雜貨店もあつたが、西洋人向一方の陶器、竹細工、刺繡、キモノなどを並べて、地味な衣服に行燈袴を穿いた、而も色の黒い日本女が數人て店番をなし、博覽會が最早閉會期に近づいてゐたもので、「大割引安賣」の廣告札を下げてゐた。場内は例によつて數々の野師的見世物で賑ひ、又た音樂て人を集めてゐた。

此夜予はウエバリー停車場より倫敦直行の汽車に乗つた。例によつて三等のお客。英國の汽車で一等に乗るものは、貴族と米國人と馬鹿とであると云ふことだが、予は貴族にもあらず、米國人にもあらず、假令馬鹿ではあるにしても、三等で利口者になれるなら、これ程難有いこととは無い。而も夜行汽車だから、ブラッシュ張りりの三等室も客が無くて廣く、且つ停車場で枕と毛布一枚とを一志で貸してくれたから、寢臺車に乗つた心持で、夢の中に蘇國を去り、北英を通じて、日曜の未明に、予はまた倫敦の客となつた。

歐洲縱斷記

大隈伯爵の使命を帯び、英文開國五十年史出版の爲に英國に客寓すること、予は既に四ヶ月に亘つた。緑深き倫敦の涼しき夏も——フロックコート、絹帽で市街を徒歩しながら、汗をかいたことも三度くらゐはあつた夏も——過ぎて、霧の都も秋の末、白楊や菩提樹の落葉が公園の路に散り布くころと變つて、出版の事も漸く其運びが着きはじめたから、後事を擧げて、これまで世話になつた陸奧伯、柳谷君並びに日本協會副會頭ヒユイシユ氏等に托して、歸朝の途に就くことに決した。それで予は十一月三日と云ふ後々までも記憶に存し易き佳辰を以て、懐かしき英國を去ることとなり、チャイリング、クロス停車場を九時に、なほ朝霧に眠れる倫敦を辭して、耕地よりも草地が多く、夏の野に赤く咲いてゐた罌子も枯れ、ホーソーンの生籬も色づいた田舎を名残りに見渡しつゝ、やがてドーツァーの港へ着いた。

英國の海權史と緣故の多いドーツァー、殊に千五百八十八年の夏、西班牙の無敵艦隊を英國海峡に壓滅した時の英水軍の根據地として、予等の記憶に深く印せられたる此港を船にて乗り出

す。甲板に立ちて眺むれば、羅馬時代の古城跡も、堅牢なる今の軍港も共に指摘せられた。船は遂に英國の岸を離れた。白聖崖の高く海面に隆起せるドーヴァーを後にした、イザさらばブリタニアの國よ！

今日は霧もかゝらず、浪も静かなる海峡を越ゆること二時間で、彼のドーヴァーと最も近く相對し、砲臺殿として佛國の岸を成れるカライの港へ着いた。例によつて税關検査があつた。「煙草は持たぬか？ 酒は無いか？ マッチは無いか？」と豫じめ正してゐいて、税關吏が靴を検査する、予の手提靴から、英國より持參の蠟マッチが一箱出ると、官吏は予の外套のポケットへ入れてくれて、「宜し」と検査済のマークを附けた。煙草とマッチとは佛國政府の專賣だから、殊更に検査が入けましいのである。政府專賣だけに、佛國の煙草もマッチも極めて下等て値が高い。

カライより巴里までの汽車は三時間餘で、英國ほどには秋の蕭殺を覺えない野原を過ぎ、鐵路の兩側にて殊に著しく目立つた紐育ヘラルド巴里版の看板廣告を幾つと無く見送つた。五時に近くなると予は巴里北停車場に着いて馬車を僝ひ、日既に暮れたる巴里の大都、一つは目馴れぬせると、又た街路人道の上まで、飯屋、酒屋の椅子が迫り出してゐるのとて、殊更に雑



街 ア リ タ イ

沓してゐるやうに思はれ、町を通る人間の様子までが、今朝名残を惜んだ倫敦とは趣きを異にし、處變はれば品變る市街で、販者が「ホー！ ホー！」と法螺貝を吹くやうな異様な聲を揚げて群集の間を分け往きつゝ、予をコンチネンタル、ホテルへ送り届けた。

巴里の夜景色

予は佛國語を知らぬと云つたら、發音だに出來ぬほどに知らぬのだ。凡そ他國へ来て、其國の言語に通ぜざれば、ドウしても親しい感じは起らぬものである。目ばかり働かしても、耳は通ぜず、一官能を欠いてゐるのだから、其地の風物を充分にエンジヨ

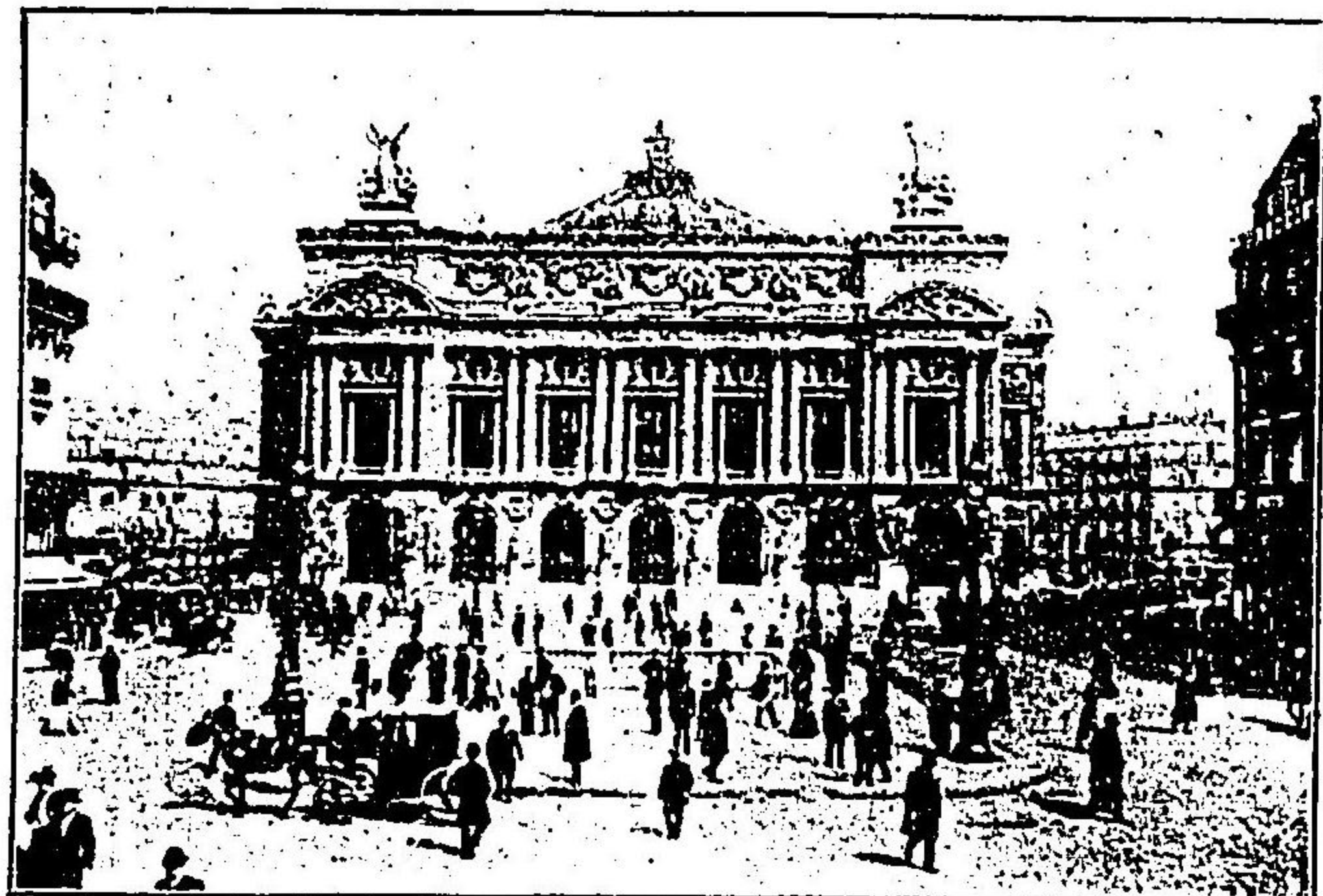
イすることは出来ぬのである。況んや予の巴里に滞在せしこと僅に五日なりしを、これでは巴里の醜美を兎や角云ふことはないやうなものだが、目ばかりからでも観念ははいる、そして巴里に對する最初の感觸は、此都の風物の遂に倫敦に及かざることを予に告げたのである。

ホテルに荷を置いて、予は直ちに市中の夜景色を見物に出かけた。燈光の下で地圖を查べながら、町を辿りつゝ、イタリア街の大通へ出た。グラン、オペラ近くの料理屋で晩飯を食つてから、この大通をブラ／＼上下した。巴里人は妙な人間かな！ 夏ならば好いが、最早から寒風の吹き出した霜月の夜に、わざ／＼酒店や料理屋の表、人道へ迫出した椅子に、外套を着て坐つて、暖爐を焚いて、葡萄酒やビールをチビ飲みしてゐる。大道の暖爐と椅子と！ 巴里式は振つたものかな！

廣い巴里の人道は、片側が此の椅子と暖爐とで狭められる。又たの片側には、廣告塔と廣告を張り詰めた小さな辻便所と、其間に露店を張つた新聞雜誌屋とが、ズラリと整列してゐるので、通路はいよ／＼狭められて、町筋はゴタ／＼して見える。廣告なるか？ ブトミーの云へるやうに、成程神經過敏な巴里人を相手の廣告は頗る小さく、倫敦の廣告の六分一ぐらゐである。して見ると、巴里人の神經は、倫敦人の神經に優りて、六倍の強度を有してゐるのだ。辻

便所内には花柳病の醫師、賣藥の廣告が一面に張つてあるのも亦た巴里式なるか？ 辻便所なるか？ これは男子用ばかりで、横町にそれと知らるべき行燈を出したところは、若干の料金で、御婦人方の用を足すところらしい。

オペラ附近で、『今晚、案内者は入らぬか？』と、低い英語で云ひ寄つて來る奴に二三人も出くはし*



場劇大ラベオ、ンラケ

*た。何の案内者なるか？ 又た淫賣屋の細見記らしく推察せらるゝものを賣らうとするものがゐる。透繪のカードや、裸體女の繪葉書を見せ付ける汚い奴が何人も犬のやうに尾いて來る。日本人は餘程のろい人種と見たのか？ これでは巴里に對する予の最初の感觸が良からず筈も無い。立派な寄席があつたから一寸覗いて見た。オラ

ンピアと云ふのだ。宏大もない結構で、倫敦などでは見られぬ美麗な劇場だが、見物席は廣い場内の前の方だけで、後の運動場はズラリ一面、酒店のテーブルだ。其間を白く赤く塗つたる女共が徘徊して左顧右顧するものは、云はずと知れた魔性の輩なり。それで巴里の寄席は一名女郎の張店なることが分つた。予はかゝる處に永居は無用と、舞臺で演ずる唱歌、踊、曲藝をソコソコに見てホテルへ歸つた。

極樂野の秋

四日の朝は、ホテルに近きチユイルリー公園の秋寂れた木立の間を通り、落葉に吹かれて、いよ／＼裸體にてははす、幾多の大理石像のシヨンボリ然たるを見やりて過ぎ、コンホルドの廣庭へ出た。中央には埃及王ラムセス二世の造つた方尖塔が、四千年の後に此處に移されて、この廣庭の美觀を添へてゐる。この廣庭は、スクエアとして他の都會で見られぬ廣大なものであつて、扱て其名は『平和』と云ふかなれども、僅に百二十年餘の昔を回顧すれば、この地こそ彼の殘忍なるギロチン刑具が立てられて、ルイ十六世はじめ、二千八百餘人の首を屠り、血を

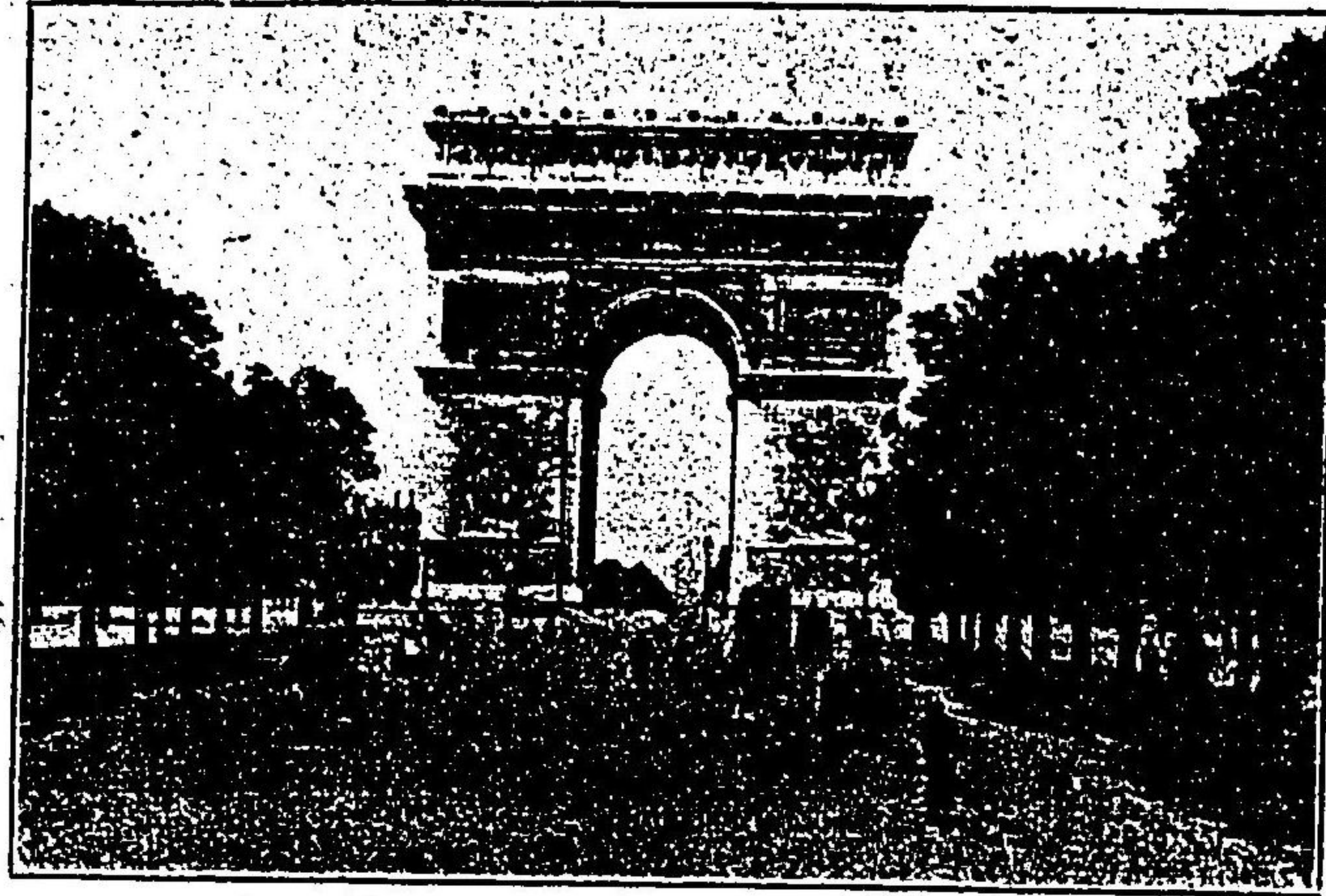
流して、セーヌの河浪を紅に染めた恐ろしい趾なのである。されど其慘憺たる歴史の跡を拭ひ清めて、英國人のやうに石を建て牌を打つて、此處にギロチンが立つてゐた、此處でロベスピールの首が轉がつたなど、歴々と記し留めないから、平和園は平和なり、腥風を嗅ぐの感も起らぬ。廣庭の四方には、佛國の八都を代表したる石像が立つてゐる中に、今は獨逸に取られたストラスブルグには絶えず喪章を附けて、アルサス、ローレン分割に對する禁じ難き佛國人の敵愾心を示してゐる。

露佛同盟の記念物で、露帝ニコラス二世が手づから礎石を置いたアレキサンドル三世橋――

セーヌに架せるもの中最も美麗で、四隅の石柱上高く金鷲の翼を張れる此橋から、シヤン、ゼリゼーの大通に出る道を挟んで、二棟の宏壯なる美術展覽會場がある。其一にて秋のサロンが開かれてゐたので入場して忽ち失望した。否、嫌厭の念を起した。所謂新派の畫を陳列したものだ。一つとして書らしき美感を興ふるものは無く、悉く外道に陥つたものだ。美術國民の佛國人は、如何に新奇を衒へばとて、何を苦しんでか、かゝる野蠻時代に還つたやうな繪畫を描くのか。これにて『秋のサロン』でございが、聞いて呆れる！見て反吐が出る！

シヤン、ゼリゼーとは『極樂野』の謂である。兩側に擁道樹が密生して、長く凱旋門に至る此

大路は、巴里の誇である。されど今は樹葉既に凋落して地に委しつゝあり、秋風は巴里でも、



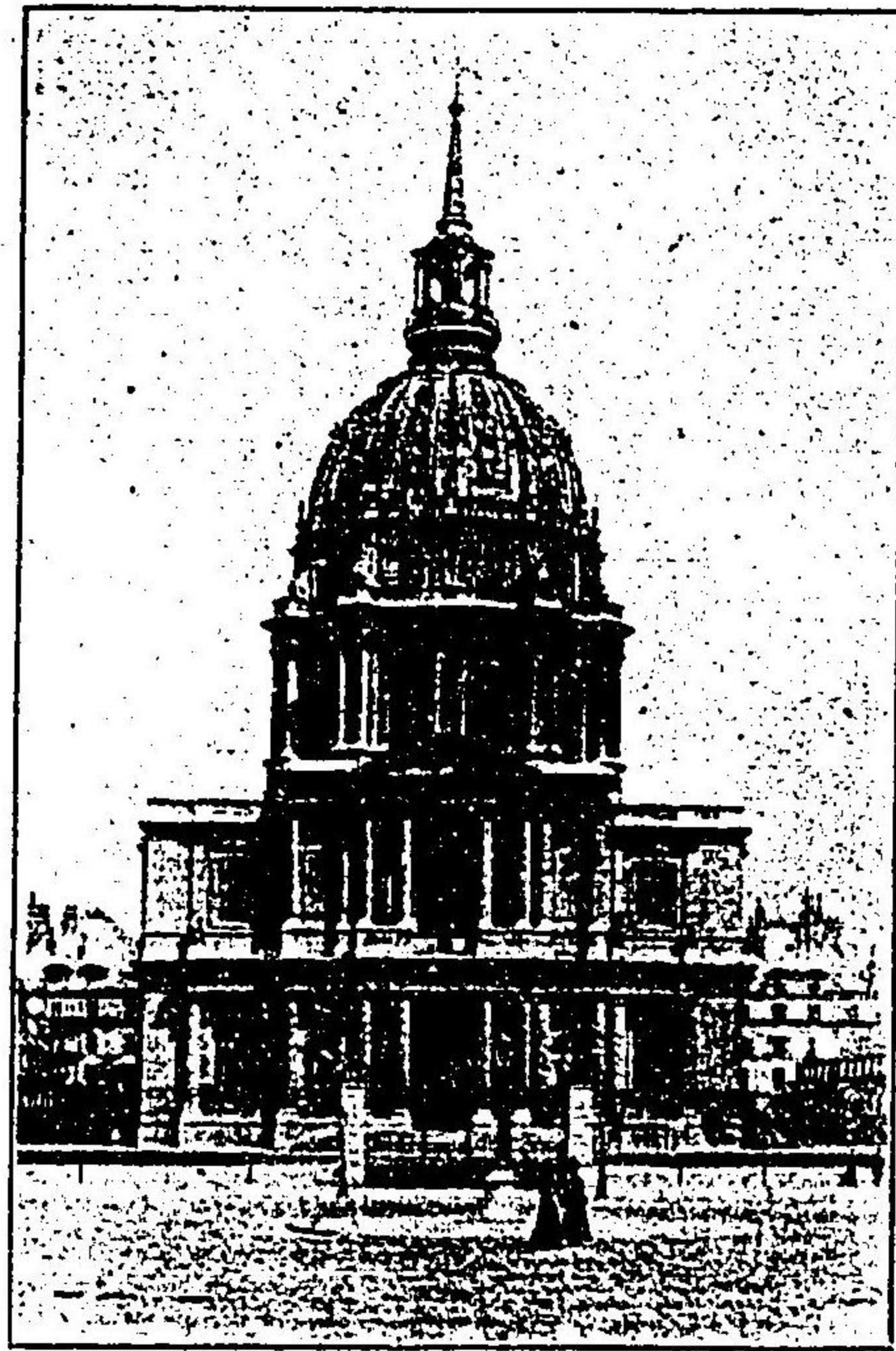
極樂野の凱門

「極樂野」でも容赦は無い！

那破崙の墓所

アレキサンドル三世橋を渡りて、河向ふのオテル、デ、インザアリード（療病院の義）へ往つた。これも路易十四世が榮華を極めた時代に建築したものだから、外から観ても壯大なものだ。昔は其名の示すが如くに病院であつたが、近頃では、陸軍博物館砲兵博物館並に歴史博物館などになつてゐる。此處には那翁の遺品が多く集つてゐるとは聞いたが、予は終に見ず。其後に巍立せる堂母へ詣て、那破崙の墓を訪うた。

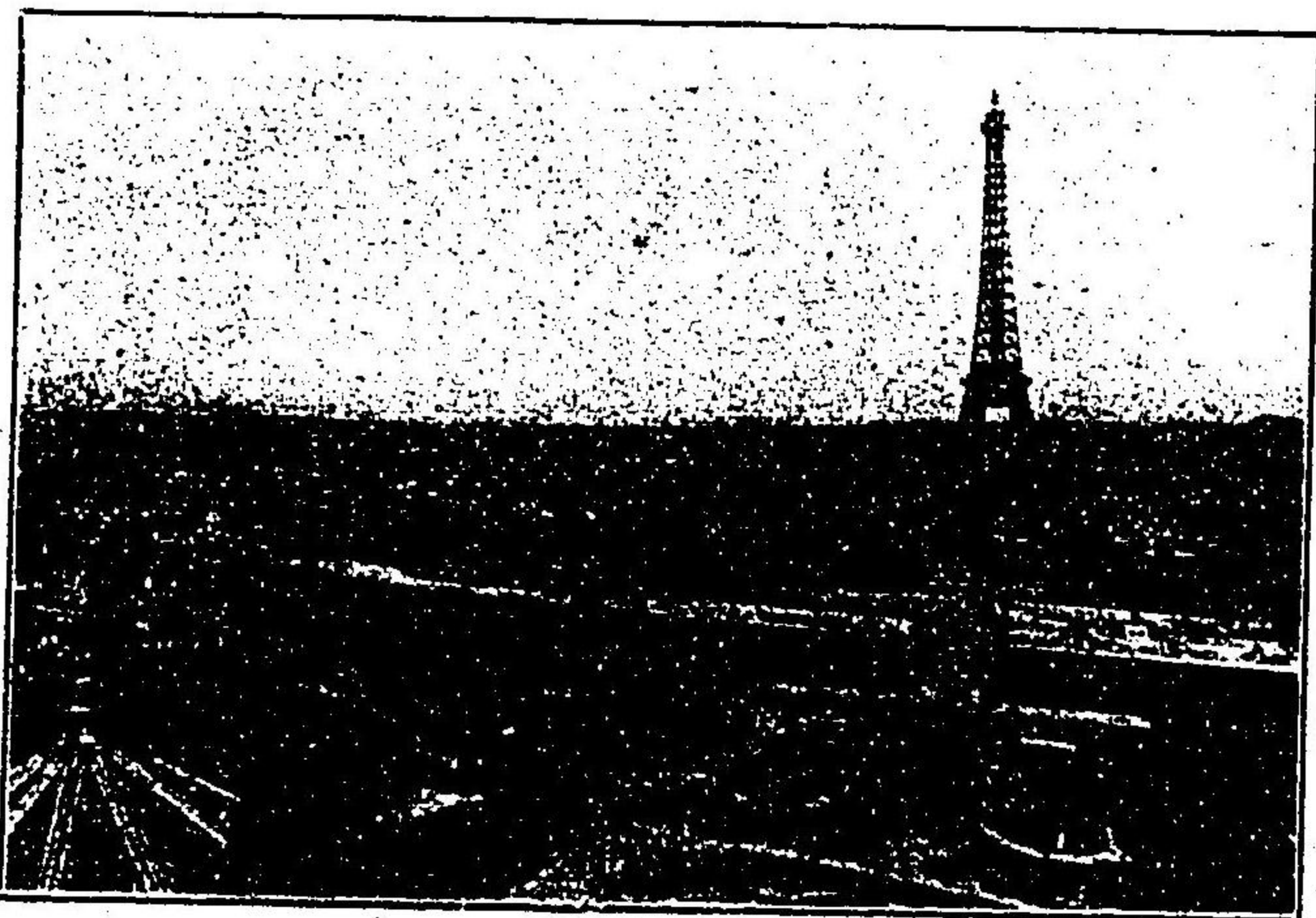
堂母の廣前は、小供の遊場となつてゐる。守女が乳母車を引いて來て澤山に落合つてゐる。那翁の墓所と小兒の群集と、これは面白い對照かな。此寺は十八世紀の初に、王家の祈願所として建てられたもので、中に路易十四世の將軍等の墓が設けられてゐるかなれども、今は此寺全く那翁の墓の爲に占領せられたのだ。佛國民が此英雄を追憶するの誠意は、聖ヘレナの孤島より其遺骨を此處に移して*



那破崙の墓所

表する十二の巨像と、戦利品たる敵國旗八十旗とを飾つてゐる。墳墓も斯う立派だと、英雄の墓で秋風落莫の感だとか、人生無常だとかの面倒な事は無くて結局威勢が好い！

*改めて厚葬したのである。墓は圓塔直下の、石を疊みたる窖中にありて、上より其莊嚴華美なる殯柩を見下される。周圍には那破崙の勝利を



河ヌーセと塔ルエフツエ

大博覧會場の跡の三月野(シャン、デ、マール)の空に、九百八十六呎の鐵骨塔を伸ばし上げてゐるエッフェル塔へ昇つた。塔も高いが、昇塔料も高くして三フランだ。エレベーターで、其頂まで上ると、巴里は一目だ。唯だ憾むらくは予の昇つた時、モウタ霧が市を籠めてゐたので、觀望を恣にするには出来なかつたが、巴里の暮色が、都の中に半月形を描けるセーヌの美しき河に流れてゐる佳景を見た。市には次第に燈火が點せられた、火舫が橋の下を通つてゐた、壯大偉麗なるトロカデロの宮殿は眼下に薄暗くなつた。

シノの寄席へ往つた。此處にも見物坐席の後に廣い運動場があつて、魔性の盃が秋波を流しつ

此夜留學生瀧村氏を其下宿に訪うて、同宿の佐々木君にも會し、晚餐の後、一同は宿の娘を連れてカ

つ徘徊してゐた。舞臺では、馬の梁木渡りがある、曲藝がある。日本輕業師の一组も出たが、大小數人の太夫は無恰好な軀に、無趣味な紫色の肉襦袢を着込んで曲藝を演じた。藝は拙く無い、たが所作身振に器用が無いので、直ぐ後裸姿の肥つた女二人で足藝をやつた方が、藝其物は劣つても、所作と品として生してゐたので、遙かに美しく見えた。鳥の聲を巧に使ひ分ける燕尾服の男が出た、頗る巧者なもので、此奴、小鳥の真似をしてパンを食つてゐる!

寄席に對する見物の好尚が、其土地の風俗を卜すべきものとするれば、巴里は感心が出来ぬ。しかし巴里は新流行と淫風とで、他國者に財布をはたかす處で、巴里人自からは儉約でしみてゐる。午後に茶店へはいる、僕等が二杯の茶をかへる間に、先きから來てゐる男は、一杯の茶が冷めるのに、まだ半分も飲まず、新聞を読み、手紙を書いてゐる。茶店、酒店では、用紙状袋を無代でくれるから、得たり賢し、まことに賢いこと、儉約なこと御座る。

森の逍遙

翌朝またシャン、ゼリゼーを散歩し、凱旋門まで來て、晝時になると約束によつて、森山海

軍大佐の假寓を訪ねた。他には倫敦から来た某氏と、日本から新來の二客とがあつて、大佐御自慢の牛鍋の御馳走に預つた。

午後は森山大佐の案内で、總勢五人自動車を驅つて、ブーロン森の大公園を逍遙した。木はいづれも若い、老木は普佛戰爭の時、獨乙の侵入軍の爲に、焚火の料に伐られてしまつたが、能く手入が届いてゐるので、木立深く繁り合つてゐる。五十年前までは、強盜の巢窟、決闘、自殺の多かつた、薄氣味の悪い森林が、今では巴里人の屈強な遊山地となり、池もあれば競馬場もある。恰も競馬が開かれてゐて、富人や道樂者の馬車自動車が集まつてゐた。此處で萬金の多さが瞬時にして彼より此れに渡つて、巴里の名物の賭博が行はれてゐるのだ。あの馬車で意氣揚々とやつて来た奴の中から、今に見る、何人かのピストル往生、セーヌ河の土左衛門が出来たのだと思へば、ゾットするわい！

倫敦のハイド、パークが牧場的公園なれば、このブーロンは、其名の稱するが如くに森林公園である。予等は園内でガラス張りの大きなカフェーへ案内されて、酒茶の御馳走になつた。

ルーヴル美術館

ルーヴル美術館の元を洗へば、これも是れ、榮華に狂し、美人に酔ひ、民の膏血を絞つて贅を極めた路易十四世の六宮殿の一なのであり、王は此宮に歐洲の美術を蒐集して、天下に誇つてゐたのである。革命時代になつて、此宮殿を改めて美術館となし、佛國中の宮殿、寺院の寶物を引擧つて此處に集めた其後へ、ナポレオンと云ふ亂暴者が出て、歐洲を蹂躪した序には、伊太利、獨逸、和蘭などから、ドシ〜と美術品を奪つて来て、戦利品だと稱して、此のルーヴルに飾り付け、おまけに「ナポレオン美術館」とまで命名した。其時のルーヴルは實に巴里の美術館では無くて、世界の美術庫であつたのだ。ナポレオン流産後、かの戦利品は、多く其本國へ戻つたが、なほルーヴルに残されたものも尠からず、加ふるに美術國の佛蘭西は、此美術館の富を増殖するに勉めてゐるし、十九世紀の間に名匠大家も多く輩出して、其の作品を此處に留めてゐるので、ルーヴルは今以て歐洲、否、世界に冠たる美術館と謂はねばならぬ。ルーヴルを見ずしては、未だ歐洲の美術を語ることは出来無いこととなつてゐる。處て美術家

でも無し、美術批評家でも無い手は、只だ僅かの時間を以て、其繪畫部と古代彫刻部とにザツと御目通りを
しただけであつたが、館内をスタク／＼早足で歩く中にも、所謂「走りながらにも讀むべき」著大なる名畫彫刻が、左右に配る眼の中に*



(筆メーラケ) 女乙の乳

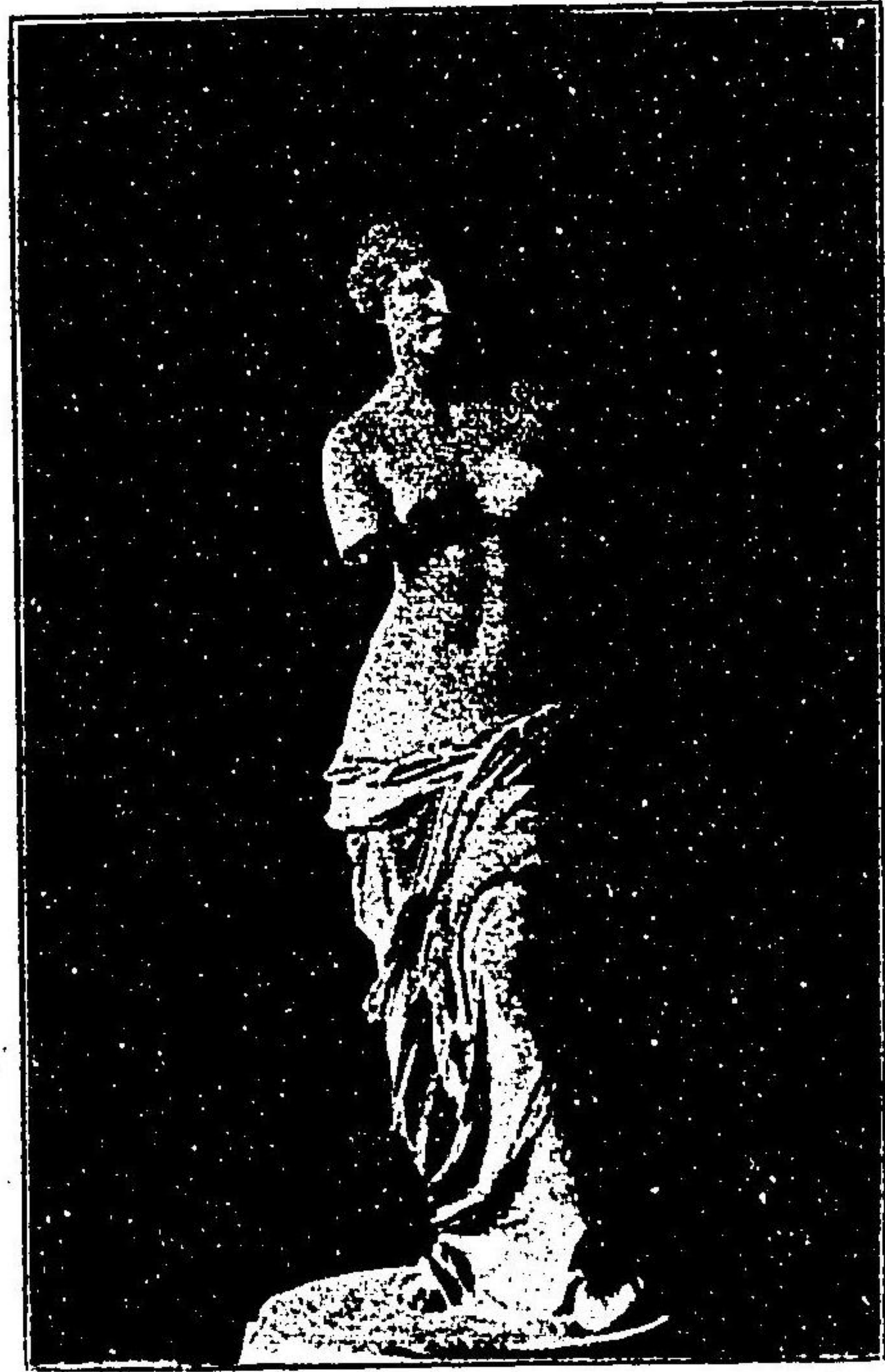
映じ来たつたのである。
畫聖ランアエルの大作が何枚もあるのには驚いた。「顔被を取る聖母」や、「園の聖母」などの神々しきもの、「天使ミカエルの惡魔退治」の



(筆レミ) ひ拾種落

兒番は傑作と稱すべきて有してゐる。グルーズの少女畫も數々あるが中にも、「乳賣りの乙女」は、倫敦の街頭でも、其の模寫や寫眞を度々見て、惚々とした畫の原物に接したのであるから嬉しかつた。ミレーの「落穂拾ひ」は嗚呼これなるか? 大幅ならずと雖も、一管の筆、能く農民疾苦の狀を現はしてゐる。ルーベンスの大作家十八枚を藏めたるルーベンス室が、壯麗なる建築を以て、この色彩燦然たる刷毛の跡を珍藏するは、美術崇拜の意を盡したものと見た。餘りに多き佛國古今の名匠の作品に至りては、悉く見てゐることは出来ぬ。全館の藏畫三千枚、それが一々見てゐられたものでも無ければ、覺えてゐられるものでも無し。

一走り館内を過ぎてから、繪葉書を賣るところで、會心のものを買ひ、それを持つて、また一廻り、繪葉書に引合しては原畫を見た。又た其の古代彫刻部は、いづれも希臘、羅馬の名作遺品を蒐集したものが、素通りの見物だから、ドレが良かったか、少しも記憶に存してゐないが、唯一つ暫く足を停めて眺め入り、そして長く忘れられぬのは『ミロ



神女スナイヴのロミ

のヴィナス」であつた。希臘のメロス島から發掘したと云ふ、兩腕の無い此のヴィナスの石像が、其氣品の高いこと、希臘でも名作であつたのに相違無い。此後予はフロレンスで『メデイアのヴィナス』も見だし、羅馬の『政廳のヴィナス』も見だし、其他多くのヴィナス女神の石像を見たかなれど、孰もこの『ミロのヴィナス』の莊嚴端麗にして、眞に神性の美を現はし、女性

美の理想を發揮したるものに及ばざること遠しであると感じた。

埃及館、亞細亞館などは遂に見ず。凡そは素通りて二時間を要するこのルーヴルを、一時間餘で駆け抜けたのであるから、此美術館に就いて予は更に多くを云ふ能はず。

ルーヴルを去りて、セーヌ河畔を歩み、文豪ヴォルテアの銅像の立てる河堤の石垣の上に、怪しげなる箱を並べて古本を賣る、これも巴里の一名物と聞くところを過ぎて、瀧村君の下宿を叩き、それよりは同君を案内と頼みて、半日一夜を見物に暮した。

ルクサンブルの美術館へ往つた。予は之を見て英京テート美術館に對するほどの感興を得なかつたのであるが、兎も角も、現代佛國大家の傑作と相場の附いたものを撰擇して集め、其作家百年の後には、其作品がルーヴルに藏せらうと云ふのであるから、豪いには相違無い。予は此美術館を一見して、倫敦にて得たる佛國繪畫に對する忌な觀念を大いに去ることが出來たのであり、又た我國の畫家が、これぞ今の佛國畫風なりとて、白馬會あたりで展覽して下さるものとは、大いに越きを異にしたものを見たのである。

ルーヴルでも、ルクサンブルでも、多くの美術學生(?)が名作の模寫をしてゐた。學生なるか? 畫商人なるか? 見渡すところ頭の禿げた老爺さん、髪の白いお婆さんもゐた。女畫家

が頗る多かつた。蓋し思ふに、彼等は研究ばかりが目的で無くて、六分通りは模寫を賣るための商賈人であるらしかつた。

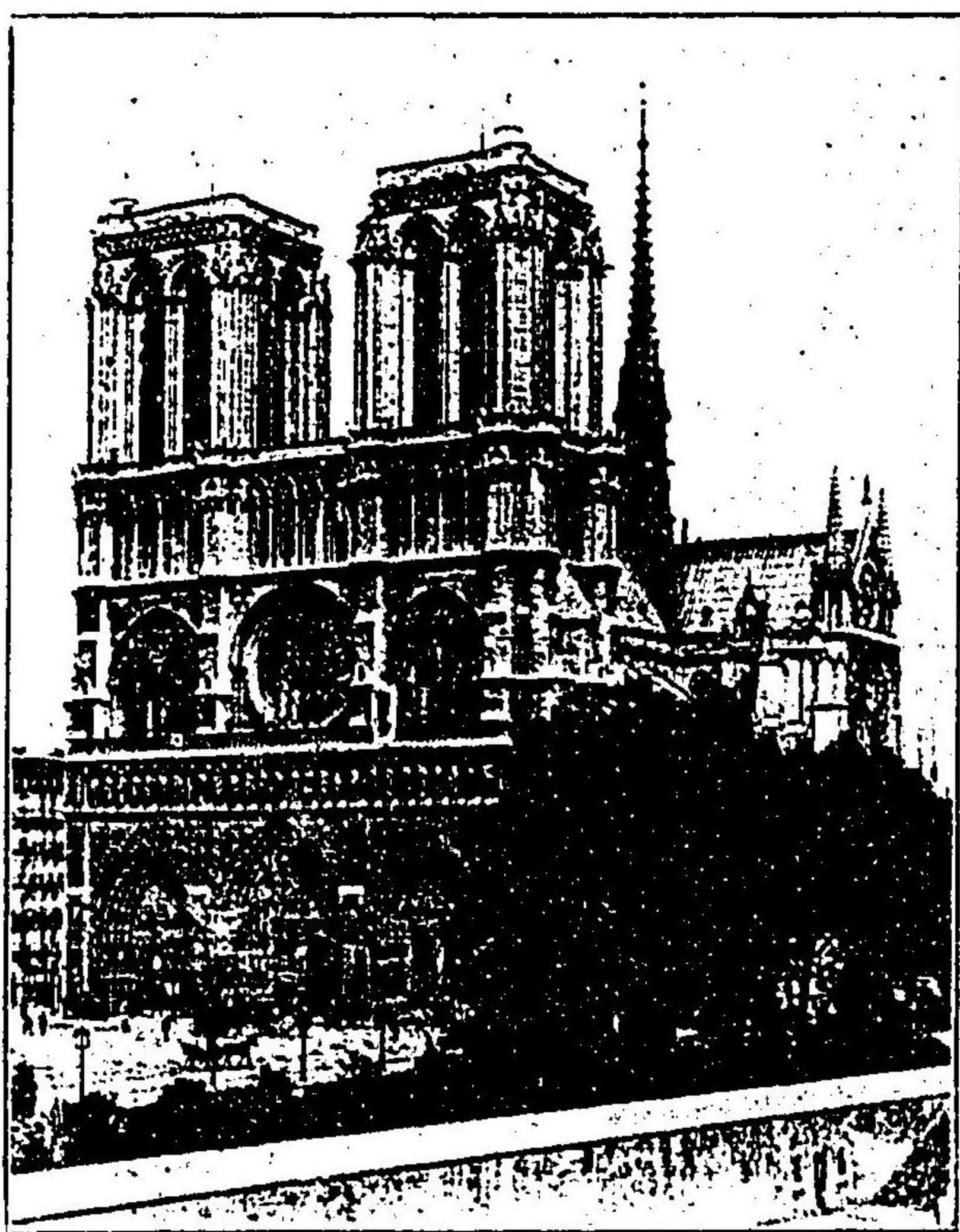
クルニーの博物館には中世時代の美術工藝品が夥多しく集まつてゐる。孰れも珍らしい品物ばかり。瀧村君の特に手に示し教へたものは、中世時代に當り、武士が出陣する時に、其妻に貞操を強ふるが爲に佩用せしめたと言ふ、怪しげなる「操の帯」であつた。大史家キボンは、歐洲武士の婦人を尊敬したと言ふには、恥づべき不義姦淫を意味してゐたと嘆いたが、實に彼等武士は、他人の娘、他人の妻に慰慰を通じて、己が妻を冷遇したのである史實は、クルニー博物館所藏の此一具を見て、予は其確證を得たと共に、基督教的勳爵士時代の道義の衰頹の奈計なりしかを思ふのである。

ノートルダム、ダムの怪像

巴里の大本山ノートルダム、ダムの名刹に詣つた。ゴシック式にしては、尖塔が無いから、餘り榮え無い建築である。此寺は革命時代に、十字架や聖像を引き除いて、「道理の女神」の宮なり

と稱し、何處かの女郎を裸にして拜んだ突飛な歴史を有する處で、これはまた大ナポレオンが戴冠式を行つた寺なのである。ナポレオンが羅馬から態々大典を司りに出て來た法皇を馬鹿に
して、法皇が何だ、あれの方が豪いのだと、法皇の手より冠を奪ひて自から之を戴き、
またジョセフィンにも戴冠させた痛快な事をやつた處だ。其狀は一幅の名畫となりて、
ルーヴルに飾られてある。

瀧村君は三年も巴里にゐながら、一度もノートルダム、ダムの塔上に昇つたことが無いと云ふのを、今日は予の案内者
て仕方無しに、三百九十七段の薄暗い螺旋階を、漸くの思ひで昇り、鉛板を張つた屋上に出た



寺ムダルトーノ

が、セーヌの河の流や、四方に峙つ高閣、

尖塔、記念柱、又たフランスから星光の如くに放射し

て、區劃整然たる大都の市街を一目に見ると、三百九十段も昇つただけの甲斐がある。

此寺の名物で、屋根水の落口である樋嘴の怪人、

怪獣は、大きな口をクワツと開けたり、大きな舌を

ペロリと出したり、小獣を食ひ裂いたりなどしてゐ

て、そして巴里の大都と、これに住する人間とを嘲

笑つて瞰下してゐるやうで、實に面白い、大いに氣

に入つたぞ！ 路易王の奢侈時代も、革命の恐怖時

代も、那破崙の榮枯盛衰も、獨逸軍の侵入も、亦た

今の淫靡な巴里に浮かれて馬鹿金を使ふ外國人も、

高いノートル、ダム塔上の怪像は、口あんぐり、舌

ぺろりて嗤み笑つてゐるやうだ。穴賢、好嘲快馬の

御本尊！



ノートルダム塔上の怪像

巴里の聖賢廟なるパンテオンにては、其穹中の暗處に下りて、ミラボー。ポルティヤ又たエ
ゴ、それに近頃愛へ改葬になつたゾラの墳墓などを訪ふことはし無かつたが、其の宏壯たる
堂内にて、ジャヴァンヌ等近代の名人の、寧ろ色彩の薄い壁畫で、其等には錦襪地の縁取を畫
き添へてあるのを見て、これは東洋趣味の影響であらうと思つた。

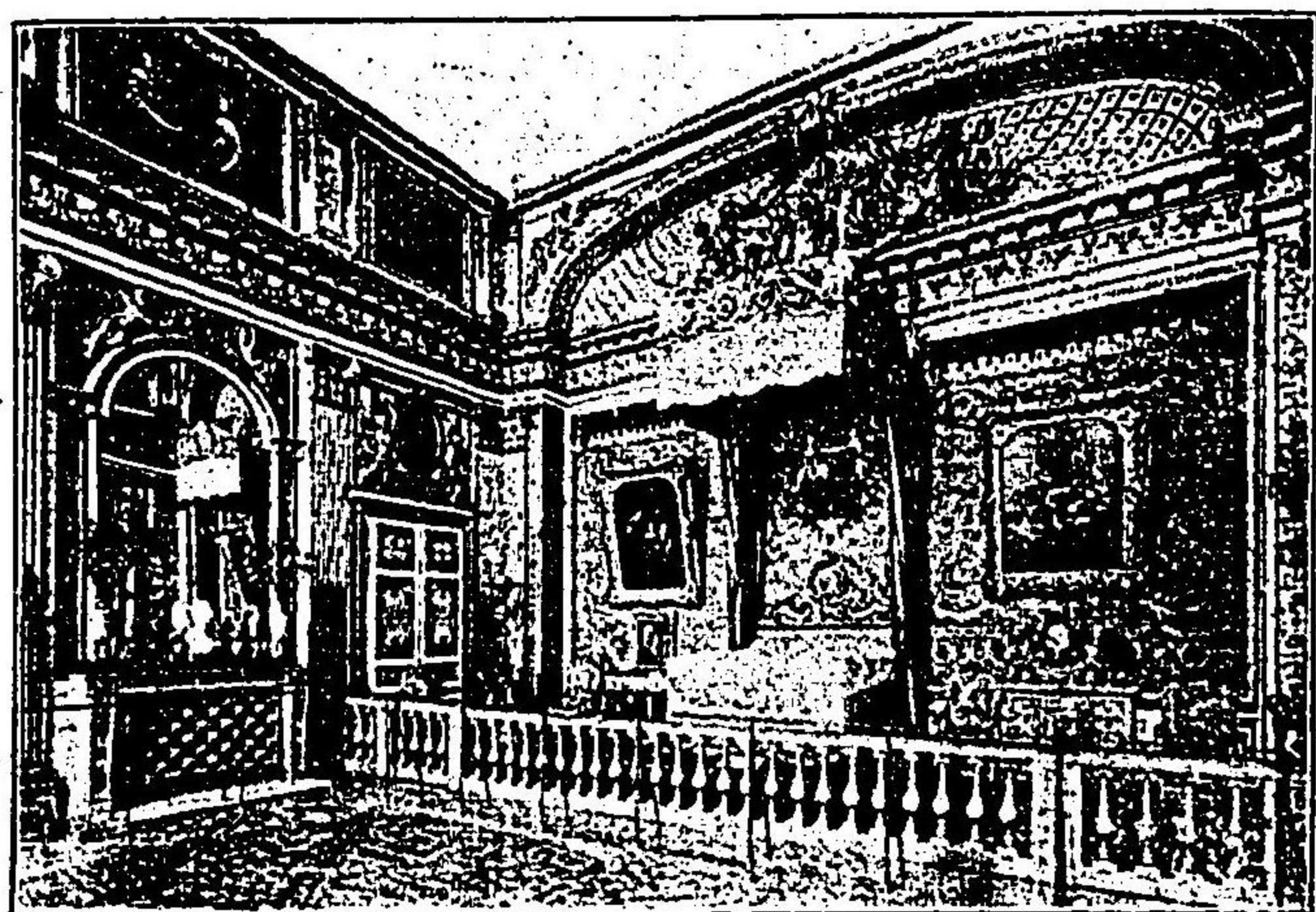
此夜はグラン、オペラで、埃及物語の「アイダ」と謂ふ悲曲の歌劇を見物した。筋は能く分ら
なかつたが、奇麗な舞臺へ出るは、百人を以て算ふべき扮装人物が出る、唱歌隊の美しい
こと、そのまた歌謡の聲の人を恍惚たらしむること。予はグラン、オペラでこれだけは聞き、
これだけは見たのである。否、また其劇場の宏大壯麗なる、流石は世界一で、それに観客婦人
の、いかに花の如くに美しくかりしよ。中には金髪を飾るに白く細き花環を巻き、寛き上衣を着
たる姿の、宛然古への希臘女が再現したやうなものも多く見受けた。

ヴェルサイユ宮

ヴェルサイユへ往くと、厩金を撥きされるから、成べく剩錢を取らぬやう、小錢を用意した

が宜いとは、預じめ森山大佐の手に與へたる警告であつた。そして手は獨りて、ブラークとツエルサイエへ來た。大手の御門を通つて、先づ路易十四世の銅像など見ると、ツエルサイエ宮の歴史が浮んで來た。そして此處でも少しそれを書いて見たくなる。

秦始皇は阿房宮を造りて、社稷を覆へすの因をなし、二世の馬鹿皇帝は、天下を有するの貴きは、意を肆にし、欲を極むるに在りと廣言を吐いて、禍其身に及ぶを覺らず。遂に沛公の關中に入るや、子嬰は白馬素車にて軹道の旁に降つたが、その悲痛な歴史は、又た佛國路易王三代の朝に、ツエルサイエの玉殿に於て繰返された。古今の大壓制家、大虚榮家なるルイ十四世の此宮殿を興すや、民の膏血を枯らし、國の財帑を靡して輪煥の美を營みたるに、王猶ほ娶くこと無く、他にまた六宮の多きを造りて虚榮を衒つた。且つは屢ば外國と難を構へて、奢侈に狂するが上に戰勝に酔ひ、在位五十餘年の久しき間、壓制と殘虐とを以て國に臨んだ。民は塗炭に苦しみ、餓塗に滿つるとも恤まず、而も妖豔なる美人メインテノンの娥眉に擣へられて、放肆淫樂甚だ度無し。文學藝術は此時を以て大いに興隆し、ツエルサイエの宮は詩歌、繪畫の百世に傳ふべきものを産したるかなれど、宮廷の道徳は凄まじきまでに頹敗し、王道は全く地を拂つたのである。



ルイ十四世の終殿

れたやうに次第に瘠せ衰へ、そして海に向ふの英國に『瘠せた佛國人』と云ふ俚諺を今日まで

ルイ十五世となつては、父王ほどの英氣に缺けてゐるのに、懦弱で放埒、これでは手の附けやうが無い。人の妻を盗んで、女の方でも喜んで盗まれて、王の嬖妾となつたのが、妃にも似たる妖婦ボンバドルで、『あの聲で蜥蜴食ふ』てふ腕の凄く傾國の美人だ。ツエルサイエの後宮には又た三千の美姬を蓄へて、國王も廷臣も共に日夜酒池肉林の快樂に荒んだ。嬖妾は王を傀儡に使つて、國政も道徳も攪亂してしまつた。虚榮と野心とを充たさんが爲に干戈を動かした。宮廷も貴族も共に人民を虐げた。百姓は收斂に疲れて野に吠えず、死を欲して生を願はなくなつた。少し文句でも云ひさうな奴は、直ぐに引捕へて、バスタルの牢獄に繋いだ。人民は鎧をかけら

も残すに至つた。王も死ぬる時には、流石に眼が覺めたか、「朕が後には洪水來らん」と哀れな泣言を云つた。洪水は遂に此宮より流れて佛國に横溢し、暗愚なるルイ十六世と、華奢でハイカラなマリイ、アントワネットとは、ヴェルサイユ宮裡の夢を驚かされ、バスチル牢獄の破壊を聞いて、「一揆が起つたか？」と叫ぶと、侍従が「イヤ何、陛下、革命にて候」と脅かした。暴徒は亂入して珍器寶物を掠奪する、美人を引擧ぐ。遂に王の首は飛ぶ、駭れるブルボン王家は宗廟に血食する能はざるものとなつた。

那破帝一世もヴェルサイユ宮で一贅の榮華を盡した。普軍の那破帝三世を巴里に圍むや、鐵血宰相ビスマルクはウイールヘルム王を擁して此宮に入り、獨逸聯邦の帝位に即かして、沛公先づ關中



那破帝一世の寢床

と哀れな

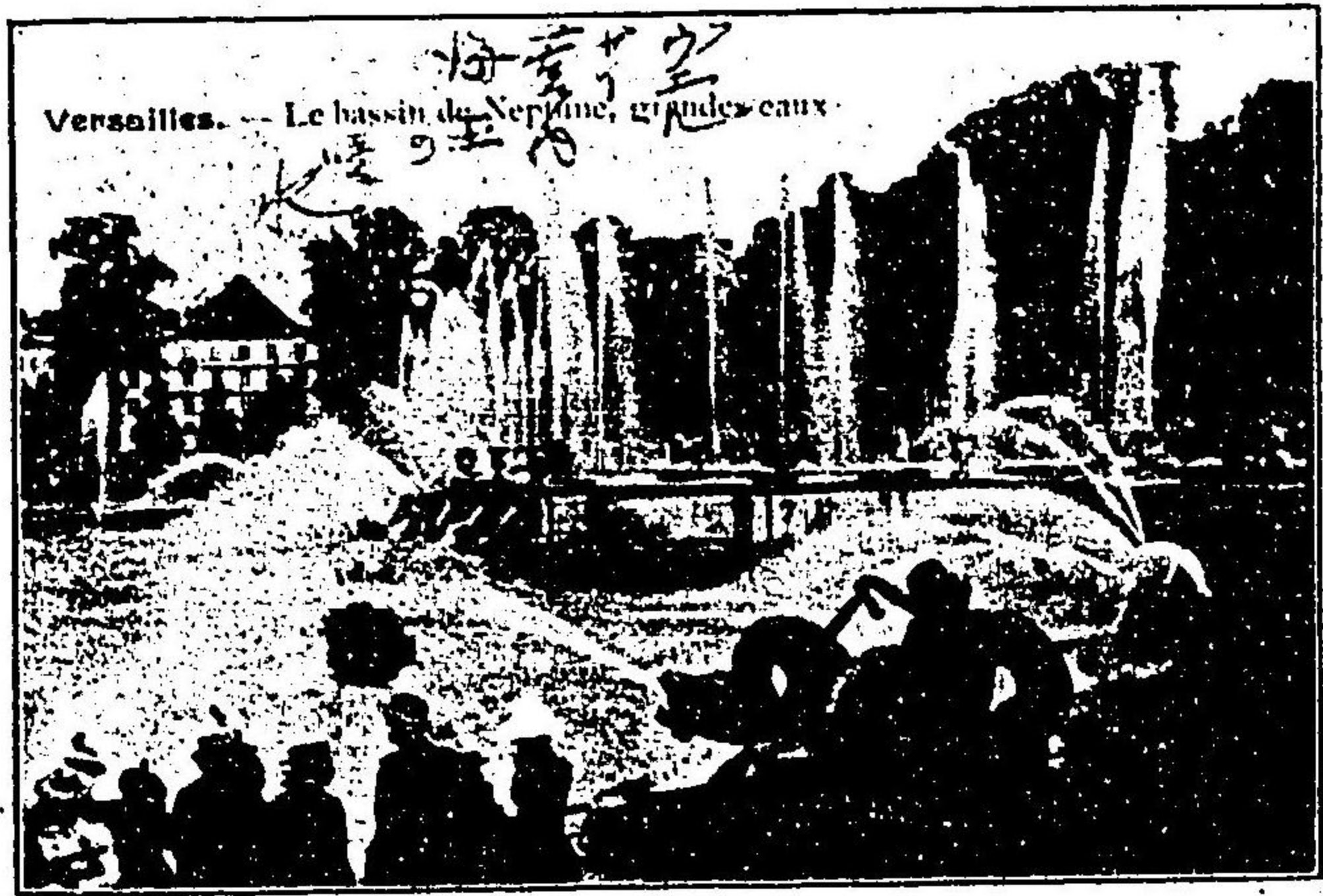
に入りて王と稱する底の痛快な芝居を打つた。

宏壯華麗なるヴェルサイユ宮は、又た實に一大美術館たるの觀あり、繪畫彫刻の名作擧げて數ふべからず、戰爭畫室の大廣間の結構と、其の大畫とを見れば目も覺るばかり。妖婦ボンバドルやツパリーの婀娜なる姿、其の濃艶なる花顔の下には、國を滅ぼし、家を亡ひたる毒刺を藏したるものだと思へば、一幅の畫はブルボン家の無道悖徳を代表するものと觀ぜらる。ルイ十四世が、七十二歳の冬の日まで、淫慾に耽りつゝ、絶命したる金色燦然たる寢床もあり、那破帝大帝が短き榮華の夢を結んだ玉牀もある。皇后、宮殿の私室、亦たいづれか華奢を競はざるは無し。

禁園の美觀は、路易盛朝の庭園術、彫刻術の粹を盡したものであるから、予等の筆では盡されぬ。鬱々たる木立は秋の露に黄ばみて、其間に此處彼處、白き大理石の女神像の立てるは、絶好なる畫題だ。一人の畫家は現に此佳景を寫してゐた。希臘神話の神々は、いづれも裸體にて、水邊、樹間に立たせたまふ。これによりて亦た路易朝の淫靡なる好尚を見るに足るべきやうである！ 噴水また園内に多く、「海王の泉」、「アポロの泉」など、幾多の銅人、銅獸が水中に出没して、高く飛泉を吐く。扱て奇妙な事には、此のヴェルサイユの廣居に、一つの浴室も

無い。路易朝には一萬人の男女が住つてゐたと云ふのに、湯浴はドゥッしてしたのであらう。想ふに王が酒池肉林の興に疲れた時、妖婦ボンパドルは、猶も其の淫興を助けんが爲に、三千の美姫を此等の池泉に驅り入れて浴泳せしめ、ヴィナス女神の波上の誕生や、ニンフ(水の女神)の嬉遊に擬せしめたことであらう?

十字形の大運河に、ボートを浮べて遊ぶものがある。予は其側の飯屋で、午餐を喫したる後、林中の道を歩いて、大ツリアノンの別殿へ来た。これはルイ十四世が寵妃メイntenノンの爲に營んだ離宮である。見物人が何人かづゝ玄關に溜ると、制服の番人が戸を開いて、ツン／＼早足、ペラペラ早口で案内し、繪畫器具などを一通り見せる。出口で案内者に十サンチームの心附をソツト掌裡



海王の噴泉

へ入れてやると、彼は一々「マルシー！」

此の大ツリアノンを出ると、少許にして大きな厩あり、中には黄金を鑲め寶玉を輝かせて、光彩燦爛たる八臺の風箏を安置してある。就中那破崙一世が即位式に用ゐたものは、最も華美を極めてゐる。那破崙三世が大婚式に乘用したるものもある。他には又た貝の形に造つたボンパドル夫人の櫓あり。周囲の棚には金銀珠玉を飾つた馬具を陳列してある。例によつて番人に十文を與へて去る。

又た小ツリアノンと云ふ別殿がある。これはルイ十五世が寵妻ヅバリーの爲に建てた瀟洒たる小邸だ。ヅバリーは美人の厄で、王に見初められて還俗してから、表面は某夫人となりながら、王の寵愛を受け、ボンパドルと共に、宮廷の紊亂に功のあつた名代の妖婦である。革命の時、國帑を浪費した罪を以て斷頭臺に送られたが、妖婦に似合はず、オイ／＼吠え立てたさうで、その泣いたことが歴史に残つてゐる。

其の後園の池畔には、マリー、アントワネット皇后の建てた、英國風の田舎家がある。革命の波が、既に身邊に逼つてゐるのにも心付かず、ルイ十六世と共に、屢ばこの田舎家に来て小宴を張り、清興だなどゝ洒落のめしてゐたことであらう。家は半ば破れて、蔦の葉が夕風に

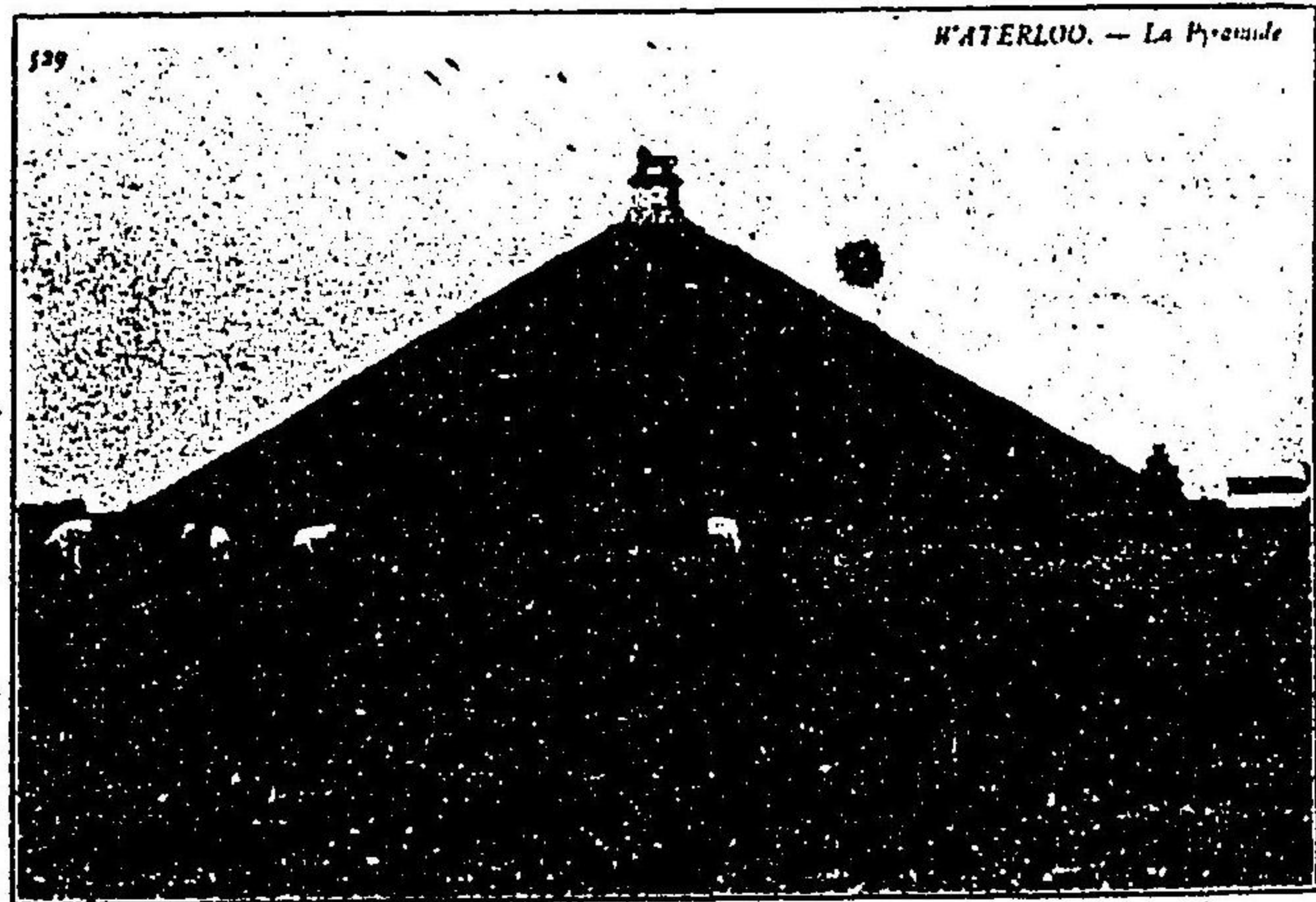
戦いでゐた。壁には夥多の落書がしてある。何處かの田舎から来た男女交りの見物人の中の一
人が、裏へ廻り、鉛筆を出して碌でも無い名前を書き付けてゐた。

池畔またルイ十六世皇后の建てた、希臘祠堂風の小堂あり、中に戀の使キエビッドを安置し
て、之を『戀の宮』と稱してゐる。路易朝にはコンナ事が流行したのである。

ヴェルサイユを一巡し、幸に贖金もつかまされずに、予は日暮る、頃巴里へ歸つた。

ブルツセルの小便人形

ヴェルサイユ宮に遊びたる翌朝は遂に巴里を辭して、正午には白耳義國の首府へ着いた。ホ
テルに着いて、ボーイに、ウオーターリーの古戦場を見物するクツク會社の回遊馬車が出るで
あらうかと尋ねると、答へて、それは夏の間だけの事で、かう寒くなつては、ウオーターリー
の見物でも無い。しかしウオーターリーと云つたところで只だの野原ですぞ、野原なら汽車で
厭々したらうと吐した。ウオーターリーは野原である、歴史も知らず、『夏草や武士どもの夢の
跡』とも感ぜざれば、蓋世の英雄ナポレオンが敗軍の地、歐洲の歴史に大變革を劃したる古戦



ウオーターリー古戦場の子塔

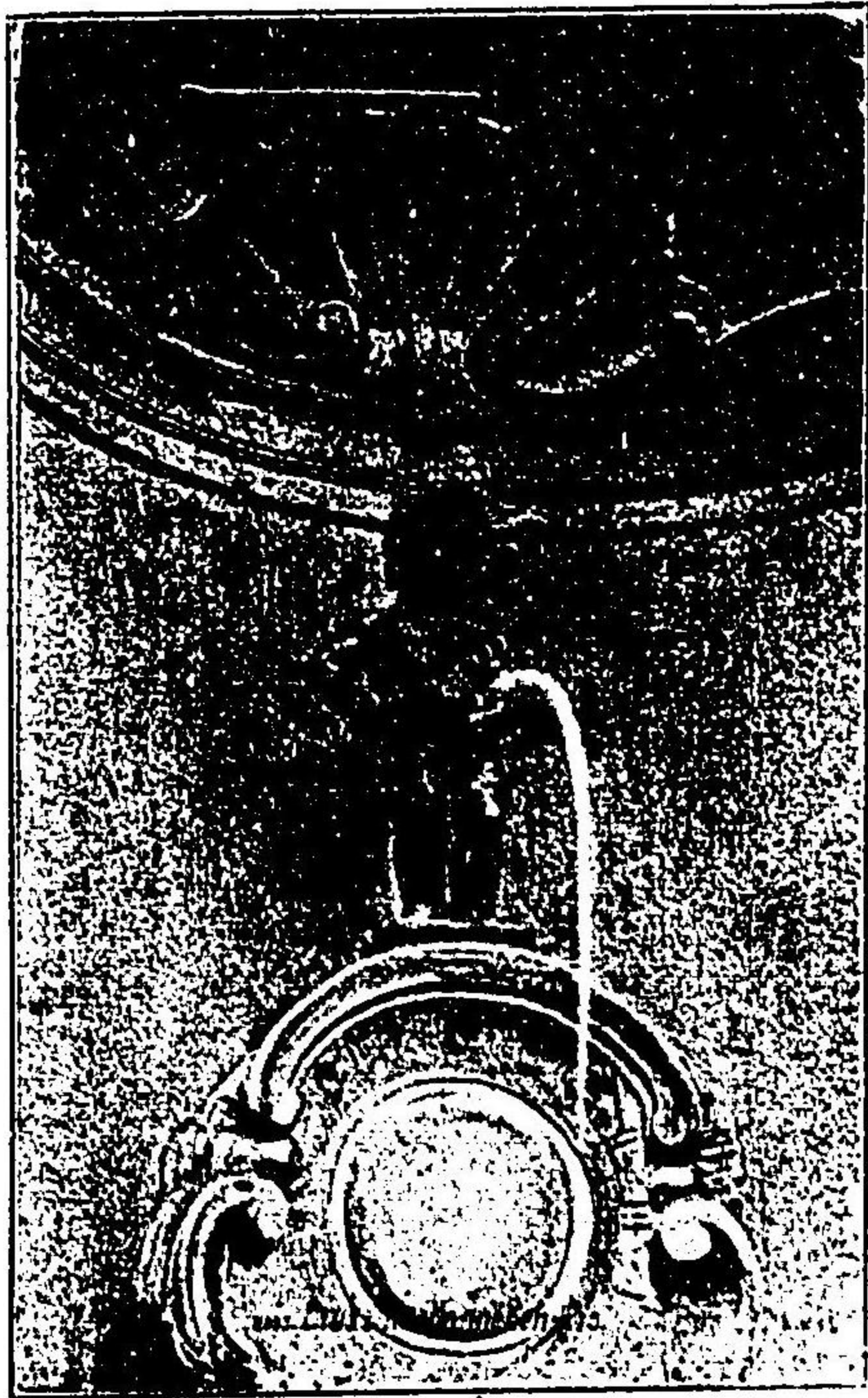
場も、嗚呼唯だの野原に違ひ無い!

汽車に頼らば往かれはするが、不案内な獨旅には
甚だ不便で、それに又た時間が多くかかる。それで
予は『ウオーターリーは只だの野原なり』とのボー
イの名言に感服し、町へ出た時、古戦場記念の繪葉
書を買つて、現場を見ないのに、見た積りにして濟
ました。以上は予がウオーターリーを見ざるの記で
ある。

とある四辻、一段と廣くなつたところに二尺許な
る小兒の裸體銅像が、晝はひねもす、夜は夜もすが
ら、小便を垂れつゝ立つて御座る。これぞ『マンネ
ケン』と申す噴水像である。ひかしく、王様の子が
不圖行方を失つたので、臣下が八方を搜索してゐる
と、王子は此の町角で小便を垂れてゐたと云ふことで、其の記念に『マンネケン』を建立したも

のなりとの傳説がある。マンネケン君小便を垂ること二百六十年、人は洒落てブルツセルの最古老と申し、平日は裸體で、只の水を噴くのであるが、何かの祭日には、或は軍人の正装を御着け、或は市民の禮服を穿ちて、其日に限つて葡萄酒を垂れて市民に振舞ふのである。今日ては儉約になつて、ビールを垂れるとの事だ。マンネケンは中々の分限者で、禮服ばかりも七八着を所有し、また近年いと物好きな婆さんがあつて、死後、此の小便小僧に一千フランの遺産を與へたさうだ。

市中には「マンネケン」を擬した看板を出せる商店、飯屋も少なからず、又た之を種にした滑稽諷刺の繪葉書もあれば、陶器焼の模造も賣られてゐる。兎に角マンネケン君はブルツセル市第一の名物と申すことなり。



小便人形マネケン

今日半日でブルツセル市の光景を概観せねばならぬ。忙がしいことかな。町通の狭い舊市街の或る横町に入つて名刹グール寺院の外観を見た。グラン、ブラステ、市役所向ふの古風な一棟は昔の王宮と云ふことだ。公園も覗いた。王城の正門通も散歩して美術館に入つたが、其の新美術館はタイしたものでも無い。舊美術館は、十七世紀に於て、多才多作の大畫家にして又た外交家たりしルーベンスや、其門弟ヴァン、ダイクに依りて興隆したるフレイシユ派繪畫の本場であるだけに、此の二人の作品を多く藏してゐる。就中ルーベンスの作が多い。扱て併し彼れの名作と云ふものは、アントワープやルーヴルに取られて、此美術館には數こそ多けれ、美術史上に特記せらるべきものは無いやうだ。此處で最も名高いものは、ルーベンス以前のフレイシユ派大匠マツイスの宗教畫一枚で、白耳義王室が九萬六千圓を投じて購入したものだ云ふ。

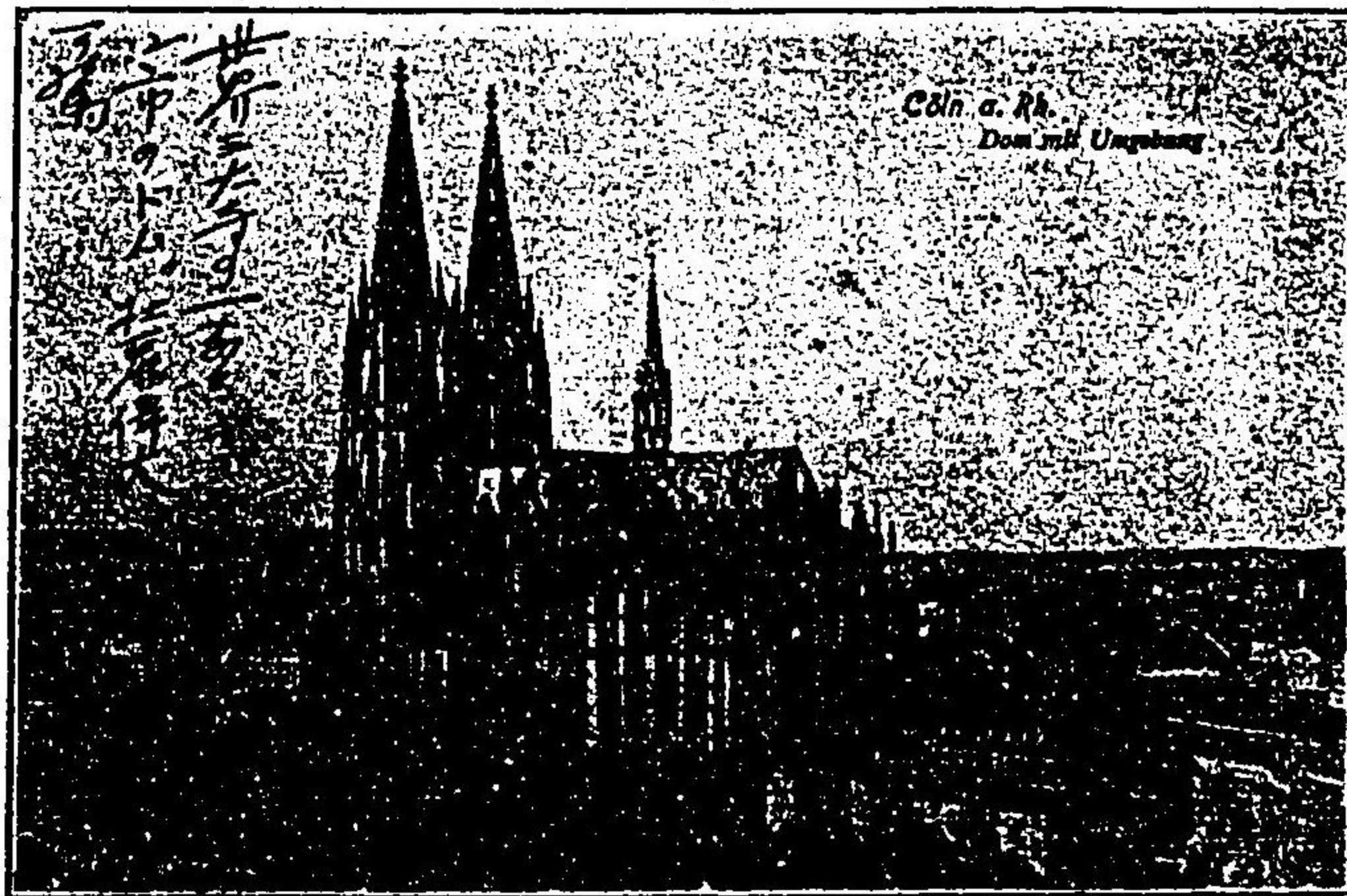
オペラから、郵便局、取引所あたりを散歩する。市中で珍らしいは、犬に車を曳かせて牛乳を賣り歩く女だ。夜に入りて大通の賑やかな所を散歩すると、酒店の大きなことは巴里式だ、煙草屋の奇麗なのは倫敦式である。煙草は廉い。巴里では政府專賣の御蔭で以て、黒い臭い而も高い煙草を喫はざるを得なかつたのが、ブルツセルへ來ては一躍して頗る安値なハバナや埃

及巻を吹かすことを得た。或る煙草屋の主人は氣煙を吐いて手に告げて曰くサ、我國は煙草專賣など致し申さぬ!

キヨルンの寺

ブルッセルを出て、キヨルンへ来たのは、午後の四時半であつた。停車場へ近づくと、白き板塀に墨黒々と『日本漆器製造所』と書いてあるのが見えた。同車のルーマニア人の新夫婦も予と顔を見合せて一笑した。予は爰に於て、己れの再び模造國の獨逸に入りたることを明かに自覺したのである。

予も今夜は此のライン河畔の都に一泊することにしたが、日は將に暮れなんとして、扱て何處を見物せん當途も無い。唯だホテルからは近かつたキヨルン寺に詣つたのである。十三世紀から十八世紀の末までかゝつて完成し、ウイルヘルム大帝自から献堂式を行つた、世界で一二と云ふ大伽藍だ。堂舎は廣く深く、また静寂、且つは既に暗うして、内陣と覺しき所、脇堂と見ゆる所に點々と燈明の光の微かに輝くものがあつた。外に出て又た見上ぐれば、大小の尖塔



キヨルンの大寺

火船が往復する。兩岸の山麓は、ラインの葡萄既に枯れて赤裸々たり。山上岩頭、塵は古城塞

は夕空に弋を樹て並べたるが如し。夜中はホッホ街あたりを散歩した。店頭の景況を見、勸工場を通り抜けた。ツエッペリン伯の空中船が大成功を奏した當時とて、玩具屋には空中船の玩具が夥多しく並べられてあつた。活動寫真も一二ヶ所覗いた。活動寫真は歐洲の何處でも大流行だ。

フライブルヒの櫻莊

我等が瀛車はキヨルンを發してより、これを『獨逸の河』なるラインの西岸を縫うて走つた。大學の名によりて記憶せるボンも過ぎた、ゴブレンツの町も越した。河流の景はいよ／＼美しくなり、水には

の高く畫のやうに立てるものあるは、漫に中世紀の頃、このラインの國に據りて武勇を競ひ、後の世に多く稗史の種を蒔きたる武士の昔を偲ばしめる。更に溯りて、對岸に突兀たる斷崖は、話に聞いたローレライの仙女が窟ぞ。ハイネが歌も思ひ出づ、されど秋既に深うしては、仙女が肌寒さ奈何にぞ！舟夫を盛惑すべき魔の歌でもあるまじなど憐む。

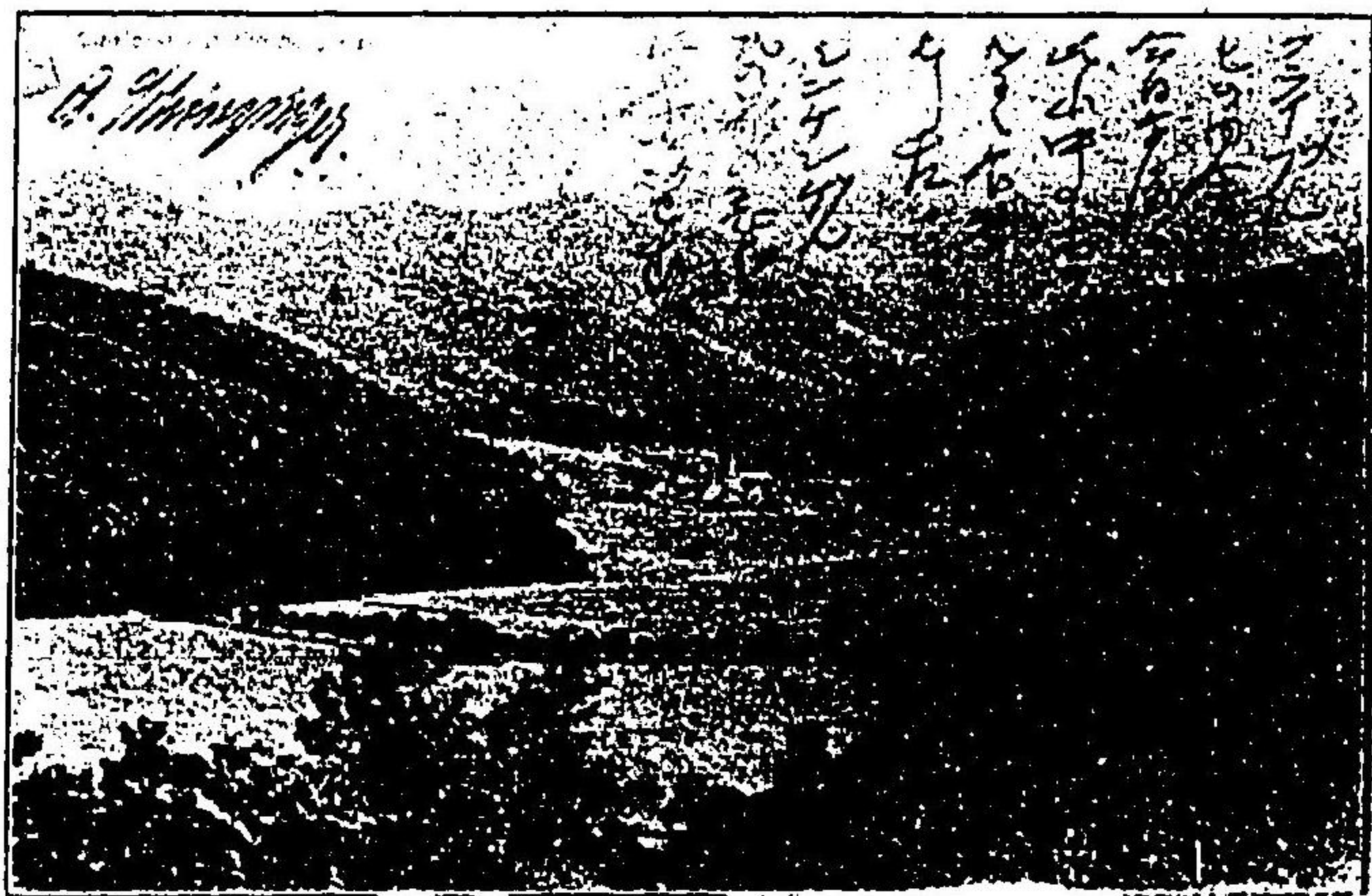
ハイデルベルヒとストラスブルグとの二大學の都も打過ぎて、午後四時頃フライブルヒへ着くと、友人シンチンゲル大尉と、此地留學の櫻井軍醫との停車場にて手を待つあり、迎へられて大尉が櫻莊に入つた。

シンチンゲル大尉は、クルツブ砲會社の顧問として、東京に在りしこと十三年。一昨年職を辭して故郷に歸るや、爰に新邸を營み、後園に我國の櫻數百株を植えて、これを「櫻莊」と名けた。フライブルヒの地は、京都の山紫水明に髣髴たるものあり、櫻莊は「黒林」の連山鬱鬱たるを望むの形勝を占めてゐる。清楚たる新屋には處狭さまで日本の甲冑刀劍を初め、種々の骨董品を陳列して、博物館に來れるの思あらしむ。大尉夫妻は日本の良友たるを以て任じ、大尉又た近く帝國名譽領事に擧げられて、ライン州に留學する日本人の指導に盡さんとしてゐる。大尉の父君は名譽の醫博士で、先には大學教授たり、而して宮中顧問官の榮稱を授けられ

てゐるが、船既に八十に及んで、鏗鏘たること壯者を凌ぎ、嚴寒にも曾て外套を用ゐたことが無い、今はほ市中で開業してゐると云ふエラ物だ。

フライブルヒも著名の大學の在る處で、殊に醫學の進歩著しきより、ずつと以前から日本留學生の跡を絶つたことが無いとの事で、櫻井軍醫は最近の一人である。予は同氏に連れられて一應市中の見物をした。ミンステルの古刹は、十二世紀に建立せられた古雅なるゴシック風で、獨逸中にも名高き建築の一である。これに近きカウフハウズの市場は多角多趣味で、巧に彫刻を加へ五彩を施して、いかにも古めかしく、印度あたりの佛刹にも似てゐる。

翌朝は櫻莊に日本國旗が立つ。午後には、大尉及び櫻井軍醫と予と、又た大尉夫人が日本より仲つた愛犬とて、馬車を驅りてロレットベルグの



郊近ヒルアイラフ

山林を一巡した。これは著名なブラック、フォレストの大森林山の連脈で、山谷一面に樅の木を植えて黒く暗く、人夫は輪伐をなして市へ搬び出してゐた。坦々たる大道の一侧には二列に



苗木を仕立てゝある。予は獨逸に於ける植林事業の成功の著しき實例を、此の山の公園に於て見ることを得たのである。山中に一寺あり、其の傍の小さき泉は清冽掬すべく、而も眼病に神効ある靈水なりとて、遠くより態々之れを汲みに來る迷信家があるとは大尉の直話であつた。

西に隣つてゐるから、まだ十一月であるのに頗る寒い。我衣薄し、震へながらに、この森山を下りて、挿圖で示した山間の狹き谷へ進み入つた。此あたりから瑞西へかけての農家は、寒國

の事とて、多くは藁若くは赤い細瓦で葺いた勾配の急な屋根が頗る目立つ。構造が何處と無く日本の農家に似てゐる。又た舊教の國だから、十字架上に裸にておはす基督の聖像が、辻の地藏尊のやうに路傍に立ちますは、如何にもお寒さう！ 野中の石地藏尊なら、色黒々テク／＼肥えておはすによつて、鳥が糞を垂れ申しても、何だか俳句にてもなりさうだが、辻の基督像は、色白々と痩せてゐて、且つは十字架上に丸裸で血を流して御坐るによつて、見ただけでもソツト身慄ひがする。それに今日あたりの寒さで、やれ／＼お痛はしや！ 予等も肌寒の二哩道、馬車はゲンテルスタールの山村にて、これは意外に大きやかなる料理屋に停つて、大尉が心配りの熱きポンチ酒、旨き料理に、途中の寒さは何處へやら。

此夜大尉は某の公會にて日本に關する演説をなす前約ありとて出かける。櫻井軍醫と予とは夫人に従つて、スタット、テアトルへ踊を見に行つた。西班牙踊もあれば、ゲインスポロウ型とて、此畫家の名作シドン夫人の肖像畫に擬した姿の美人がヌウと出て、ヌウと引込んだ。はねてから、夫人は獨り馬車で歸る——如何に獨逸式なるかな！——予等二人は町のカフェーで、演説會から歸りの大尉を待受けて、共にミュンヘンの麥酒を傾けつゝ夜を更かした。而して其の翌朝予はシンチンゲル大尉及び夫人が款待厚き櫻莊を辭して、世界の公園地たる瑞西の

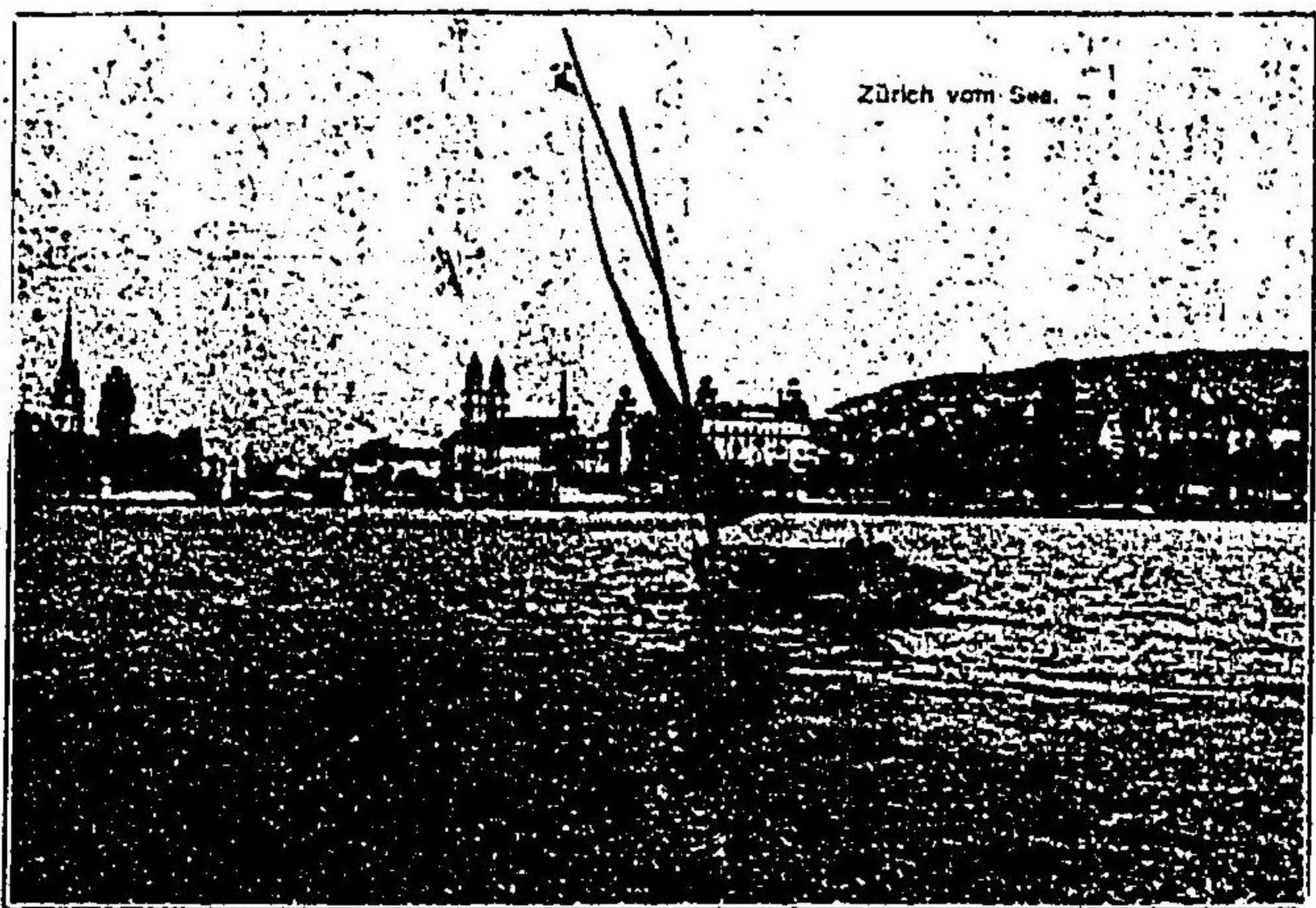
山水郷へ入つた。

瑞西の湖畔

我目我足が瑞西の美画に留まりたること僅に二日。チエーリツヒの湖畔に着いたのは十二日の午後で、湖水のリムマツト河に流れ出づる落口に架した堤橋の杖のベルヴェー、ホテルへ泊つた。河口には無数の鷗が集つてゐた。

山水の郷は夏のものだ、世界の公園たる瑞西も霜月半ば、モウ雪も降らうと云ふ冬空になつては至つて淋しい、ホテルにも客が甚だ寡い。

アルペン堤の方をブラ／＼逍遙して、公園の岸から森々たる湖上を眺め、又た遠く巖々たるアルプス山脈を望んだ。夜に入りては停車場通を散歩して、市街の景況を窺つたが、流石は瑞西の都だけに時計屋が多い。また繪葉書屋には大きな店があつて、其の四壁の天井まで高く、瑞西名勝の繪り書を陳列してゐる。予は數枚、繪葉書を買つて、年増の女賣子に一フランの銀貨を渡すと、勘定器の前に置いた大理石板の上で、コツ／＼投げて見てから、『この錢は悪い』



湖 ヒ ツ リ - ニ チ

とて返す、『價金か?』『銀が悪いのだ』とて受取ら無かつた。瑞西のやうな山高く水碧き天地清淨境でも、諸國の旅人に荒されて、價金が流通すると見えるわい!

この街通の停車場に近づいたところ、一小園内には、近世教育の開祖、博愛の義人ヘスタロチーの、一少年を擁して立てる銅像がある。

翌朝はまだ朝霧の中ながら、湖岸のウト堤からジーフエルド堤あたりまで馬車を駈り、また市中を廻つた。この馬車屋は頗る氣の利かぬ奴であるのに、予とは言語不通。予は命令を與ふる能はず、馭者は自分勝手の宜いところばかりを廻つたやうだ。予はモ少し何處かへ連れて行つてくれれば好いと思つても、彼はサツサと面白くも無い道筋ばかりを走つて、只の一時半ばかりでホテルへ歸つて

仕舞つた。

此日の正午に最早此地を出立して、ツグ湖邊を過ぎつ、二時間の後、予は更にルサルン湖畔の人となつた。昨日あたり雪が少し降つたらしく、人家の屋根も、アルプスの山も、處まだらに白くなつてゐた。

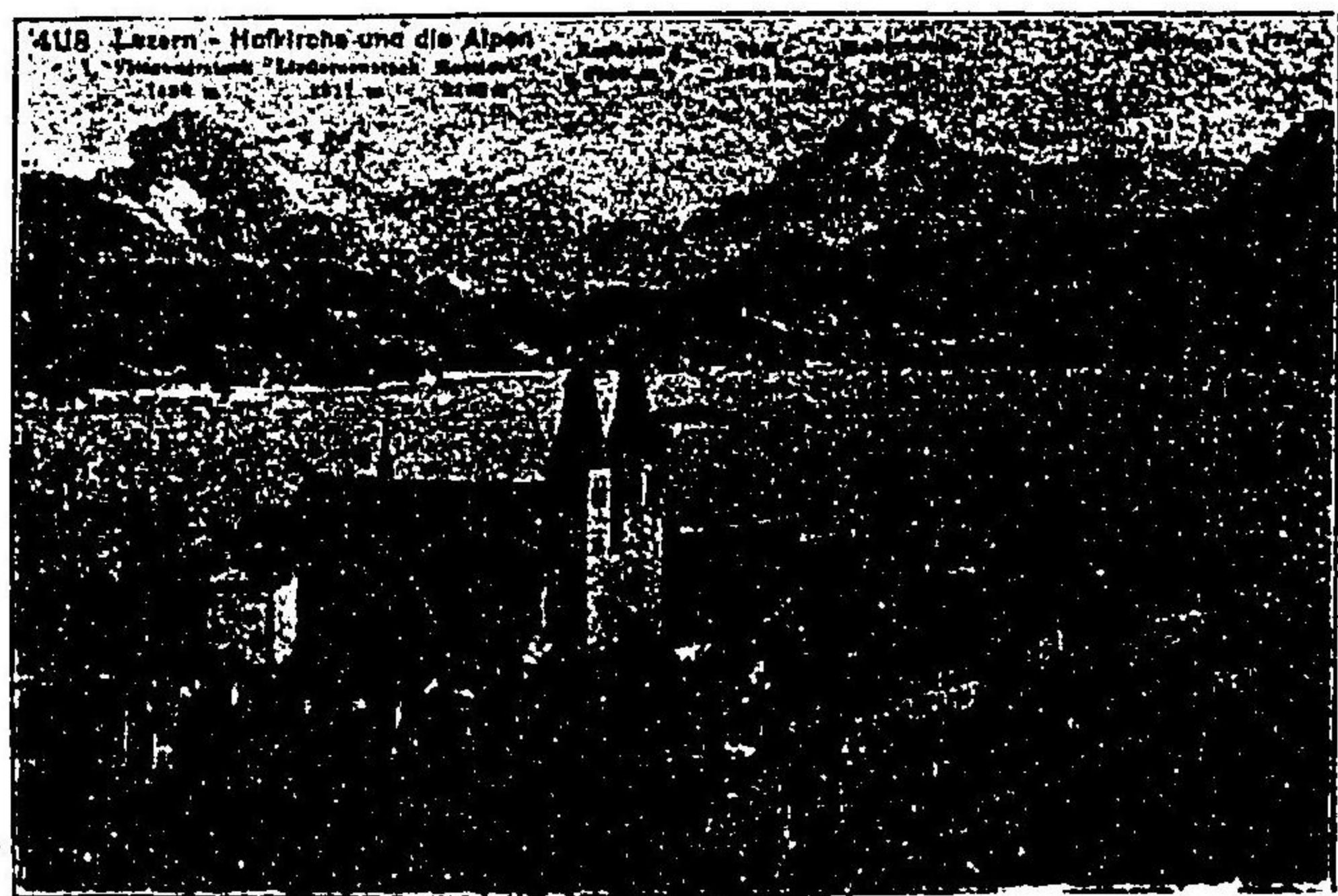
ルサルンはアルプス山脈が高く湖畔に逼りて、崎嶇たる山峯を峙て、



像 銅 - チロタスハ

湖形の又た凸凹甚だしきが故に、風景の佳媚にして變化に富むこと、蓋し瑞西山水の絶勝で、

歐米の遊客の最も多く節を曳き、車を驅るところであれば、自然と宿屋、下宿屋で都會を成してゐる趣きがある。されど最早冬となつては、大きなホテルにも客数は甚だ少く、チヌーリツヒよりも一しほ寂れてゐた。馬車を僦つて、二時間ほど湖畔の少距離を逍遙した。「ルサルンの獅子」として有名なる記念碑を見に過ぎ無いのを、小屋を掛けたり、橋を渡したりなどして、一フランの高い入場料を食るもの



湖 - ル - サ - ル

た。これは千七百九十七年佛國王の爲チヌーリル宮を防禦して、無殘にも革命暴徒のために虐殺する所となつた瑞西衛兵八百人の哀悼の爲、丘側の磐石を削りて、槍の穂に貫かれながらも、ブルボン王家の紋章たる百合の花を庇ふ巨獅の像を彫み出したものである。この近くに氷河の河床であつた岩があるとして見物したが、たゞ滑つこく凹んだ岩

であつた。又た遠く湖景を眺望すべき坂の上や、郊外の清らかな村里などへ車を驅つた。其翌朝は又た汽車にて、ルセルン湖より、ウリー湖を廻り、縦の木立に雪とところ／＼なる岩山、又た岩石に激して迸る溪流を過ぎて、アルプスの山腹を穿つこと九哩餘のサン、ゴッタール大隧道に入り、地中の暗路を潜ること二十分餘。再び重疊たる山谷を奔流に沿ひて下りつ、我車はいつしか既に瑞西を辭して、北伊太利の湖地に在り、美しきルガ湖を渡り、コモの湖水の南端を走りつ、午後三時、予はミランにて、一旦下車した。

ミランの名畫

予は唯だレオナルド、ダ、ヴァインチが一代の名畫なる『基督の晩餐』を見るのが目的で、次ぎのヴェニス行の列車を待つまでの三時間餘を利用して、ミランで下車したのである。停車場構内でクック會社の客案内から、信用の出来る案内者を世話して貰つたが、これはホテルの客引で、少しは英語の分る老人であつた。予は此の老人と共に馬車を驅つて、清らかなるミランの町々を通り、ミラン公の舊城趾を過ぎりて、志したるサンタ、マリア、デラ、グラジ

の舊刹へ來た。

寺に隣つた昔の修道院の庫裡が即ち名畫のある所である。一リーラの入場料で通ると、古びて汚い一室の正面の壁間高き處一杯に、色彩既に褪せ、形態朦朧たる大畫がある、これが即ち尊むべき『基督の晩餐』なのである、レオナルドは壁畫式に依らず、油繪具を以て灰泥の壁に描いたのであるから、月日と共に速かに毀損し、剩へ動亂の世には此庫裡が厩となり、此畫さへも一旦塗抹されたと云ふことだから、今日では殆ど見る影も無さばかりの大破損に陥つてゐる。それには何物料こそ高けれ、保存法が行届いてゐると思はれぬ。此畫は、今後二三十年も経つと、嗚呼惜しむべし、『晩餐』の名畫は全く此世より失はるゝに至らん。室内にはレオナルドが門弟の模寫畫が數枚懸つてゐるので、此等によりて辛うじて名畫の面影を覗はれるのである。併し毀れても破れても魂の入つた名作は矢張り名作で、臆げにも見上ぐる基督の溫容靈貌に、嗚呼レオナルド、ダ、ヴァインチは豪いものかなと感歎せられ、左右の模寫などは到底見るに足らぬ。レオナルドは畫家、彫刻家、建築家及び器械家と云ふ多藝多能の人で、空中飛行機さへ工夫したと云ひ傳へられ、而して畫人としてはラファエルと共に併せ崇めらるべき巨擘であつたが、憾むべし、彼はラファエルほどに多作せず、其の後世に残したるものは實に曉天

の星よりも稀なのである。ダ、ヴェインチが、此の『晩餐』を畫いた時、彼は元來遅作の人で、容易に筆を下さ無いから、中々に出來上らぬ。寺の主僧は頻りと催促する。それで彼は主僧に



（維チンイヴ、ダ、ドルナオレ） 督基の『餐晩』

云ふことに、ドウしてもイスカリオテのユダのモデルに適當な者が見付からないで困つてゐる處だが、サウお急ぎなら、丁度好い工合だ、貴僧をモデルに使ひませうと、いとも皮肉にやつけた。基督を三十金にて敵手に賣り渡したる反逆者のモデルにされては主僧は溜

も今日にも以太利の宗教界に於て、イスカリオテのユダのモデルたらざる僧侶が果して幾人あるであらうか！

案内者は馭者を差圖してミラン寺へ廻つた。世界で一二を争ふ大寺、大理石より成れるゴシック風の尖塔の間には、二千の石像が立並びて、其結構は壯大を極めてゐる。予は其塔上まで昇る時間が無かつたので、唯だ日既に落ちて薄暗き本堂内に入り、案内者の指示する巨柱や、貴人の墓所などを一見したばかりであつた。寺前には日本人と見かけて、英語で繪葉書や風景帖を賣付けやうとする煩い奴が多勢ゐた。

寺の前にて以太利建國の主ヴィットリオ、エンマヌエル王の騎馬銅像を仰ぎつ、又たアルケード式の宏大な建築で、歐洲第一と稱せらるゝ、彼王の名に因んだ勸工場を徒歩して通り抜けると、予をして今日爰に來らしめた所以の名畫の作家レオナルド、ダ、ヴェインチの巨像が天を仰いで立つてゐる。名畫と云へば、ミランの美術館はラファエルの傑作『聖母の結婚』を藏してゐるのだ。

再び停車場へ歸つた時には既に夜に入つて、暗霧深く街區を銷した。さて汽車に乗る。擔夫に相當の賃錢を渡すと、掌裡でカラ／＼音させて見て餘分を強請つた。汽車も亦たミランまで

は獨逸の清潔な列車で來たのだが、此處で初めて以太利の汽車に乗ると、第一不潔なのが便所だ。倫敦を出る時友人からして、以太利の汽車では、決して便所の側には乗るなと旁々注意されてゐたのだ。乗客は床へ唾を吐くことを何とも思はぬ。そして又た英獨などとは違つて夜行汽車が何だか心元無いやうに感ぜられた。

水の都ヴェニス

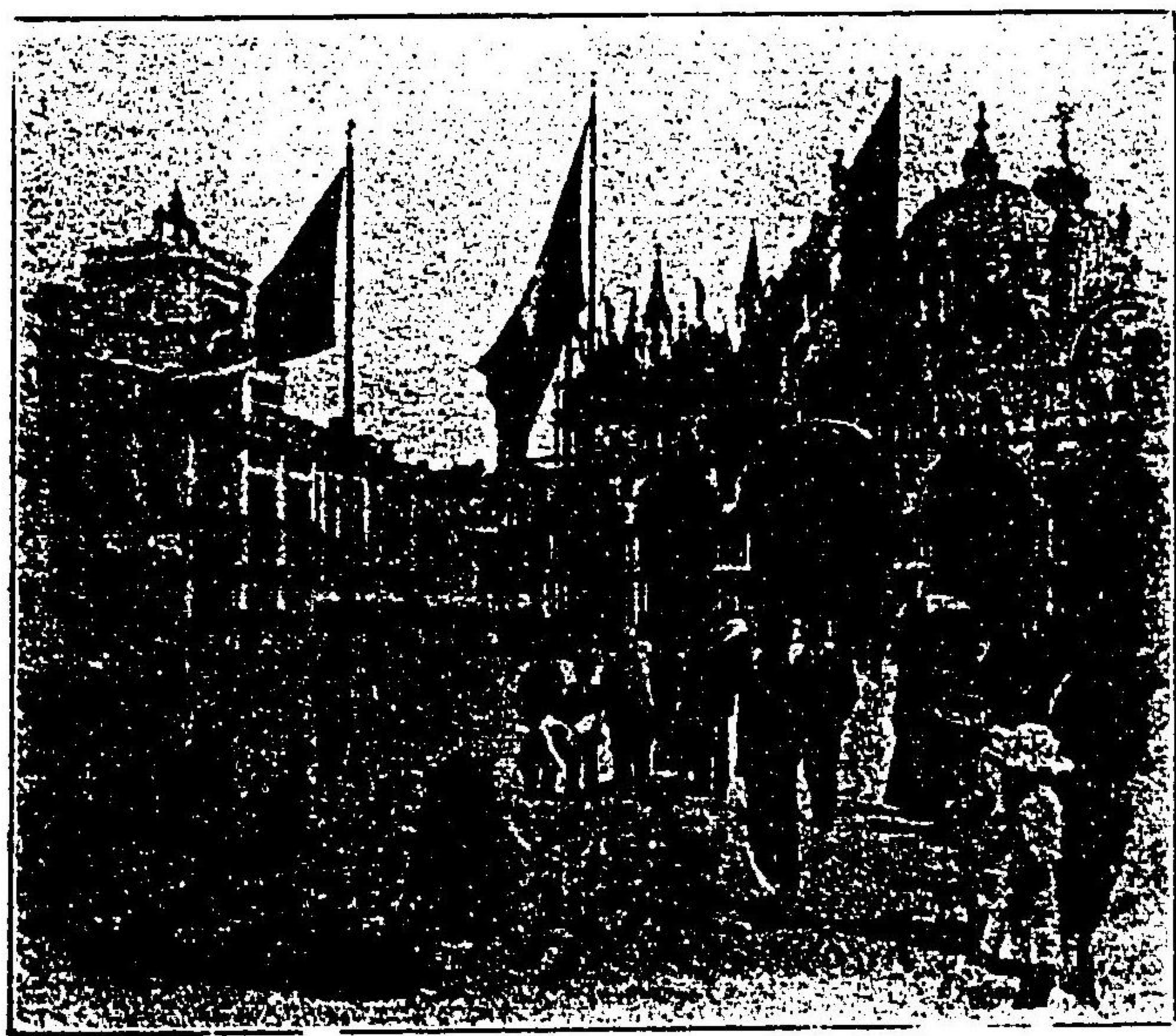
汽車が水を渡りてヴェニス湖の群礁上に建てられたる水の都に着いたのは、既に夜半の十二時を過ぎてゐた。名指したホテルの客引が黒く塗つたるゴンドラを一艘呼んでくれて、予と荷物とを乗せて、舟夫にベルビエー、ホテルまで送り届けよと命じた、彼は同行するのでは無かつた。小さき舟には予と舟夫と唯だ二人。半月空に朧なる夜半時、水際の家々は既に眠り深うして甚だ寂莫たる間を、櫂の音バサリ〜、ギー〜。町の大路の大運河、小路の小運河を此れより彼れへと往く。屢ば晝て見たリアルト橋の下も過ぎる。扱て何處へ連れて往かるとやら見た以て心細い。ベデカーの案内書に、以太利では、田舎は猶更、市街でも夜中は危険が

多いから、旅客は少慎が第一と書いてあるのに、これはまして道路では無くて、往き來も稀な運河。夜半時なれば、予たるの内心びくつかざるを得ず、かゝる時刻に見ず知らずの土地へ來たのを悔ゆるの念も萌したが、一時間ほど河風に吹き曝らされた後で、先づ〜無事にホテルへ着いたので、ホット安心した譯であつた。

十五日の朝が明け放れ、見ると、此のホテルは、ヴェニス繁華の中心にして、又た最も美しきサン、マルコの廣前に近き處であつた。しかし今日は牛僧日曜日だから、河まで行く清らかに大卵石を鋪き詰めた席前の左右なる、宮殿の階下に居並ぶ多くの商店は、皆戸を鎖して静まり返へり、磬石の上は無数の鳩の占領するところとなつてゐた。水邊二基の石柱上に立てる有翼の獅子と、鱈魚を踏めるセオドシアスとは、大運河の朝風に吹かれてゐた。

サン、マルコ寺は第九世紀の頃ヴェニス人が、基督の使徒にして新約馬可傳の著者マルコの遺骨を、埃及アレキサンドリアの回教國から、回教徒の忌み嫌ふ豚の肉に包みて密かに奪ひ來り、此處に祀りて此の都の守護神と崇めたところである。それより三世紀の間に今のビザンチン式の大伽藍が成就して、波の上に輪奐の美を興した。ビザンチン式と云へば、波斯あたりの東洋的趣味を帯びてゐるのだから、此寺は露國の寺院に髣髴たるものである。而も當時のヴェ

ニスには海上の覇權を掌握して、威を四域に振つた時代として、諸國からの分捕品を以て此伽藍を飾り、或る時代にはヴェニスから出る船は、必ず他國の珍寶名器を携へ歸りて此寺に奉納すべき掟も立つてゐたのである。伽藍の建築法と云ひ、また其の巧妙なる彫刻を施したる石柱と云ひ、金色燦爛たるモザイクと云ひ、サン、マルコは實に歐洲第一の美麗なる伽藍と稱せらるるので、而してラスキンは之れを以て以太利王國の寶冠なりと賞揚したのである。外壁アーチの下の破風には一々モザイクの宗教畫を嵌入し、屋上にも尖塔内にも幾多の聖人像を安置してある。三重になつたアーチが寺の正門である。其



前 寺 の コ ル マ ン サ

の最上のアーチの上に高く、天軍に擁せられたる使徒マルコの像を立て、其下には此使徒の象徴たる有翼の獅子を表はし、又た第二の穹門上の露臺には四頭の金馬を据えてある。此の金馬に就いても歴史がある。何の時代に造られたるものか、多分古き希臘の作であつて、其元はアレキサンドリア府に在つたのを、オーガスタス帝が羅馬へ持ち歸つた。其後ネロ帝は之を以て我が凱旋門を飾り、トラジヤン帝又た更に己れの凱旋門に移したのである。然るにコンスタンチン大帝の首府をコンスタンチノープルに遷すや、此馬をも携へ往つたが、十字軍の時に、更に此の金馬をヴェニスに持ち歸りて、初めてサン、マルコの裝飾としたのである。然るにナポレオン大帝の以太利を席巻するや、帝は此の金馬を一旦巴里へ奪ひ去つたけれど、帝の没落後に至りて、埃太利帝が再び之をサン、マルコに取返したのである。扱て金馬の下なる破風には基督昇天のモザイク畫を現はしてあつて、其下なる一列の石柱に支へられたるアーチよりして、人一人たび堂内に入りて見ると、又た目を驚かすべきものばかり、其建築、其彫刻もさることながら、最も美麗なるは、四壁及び天井の金色燦爛なるモザイクの宗教畫である。予は更に階上に登りて、處々の薄暗い隅に座つた番人共に十文宛くれて、道を開けて貰ひつゝ、手近に此等のモザイクの美しさを觀覽した。

寺の廣前の左、大運河に沿うて、元のベニス大統領の宮殿がある。モザイクより成れる



部一の『天昇母聖』 (年ノアシチ)

前面二壁の上半と、又た之を支ふるアルケイ
ドの無数の石柱の彫刻など、これまた建築の
技巧を盡したものである。宮裡に入れば、又
た其の結構は頗る壯麗精緻を極めてゐる。室
室には名畫を飾り付けてあるが、一室には世
界の最大畫たる『天國』がある。これは現に壁
上から下して修葺中であつた。

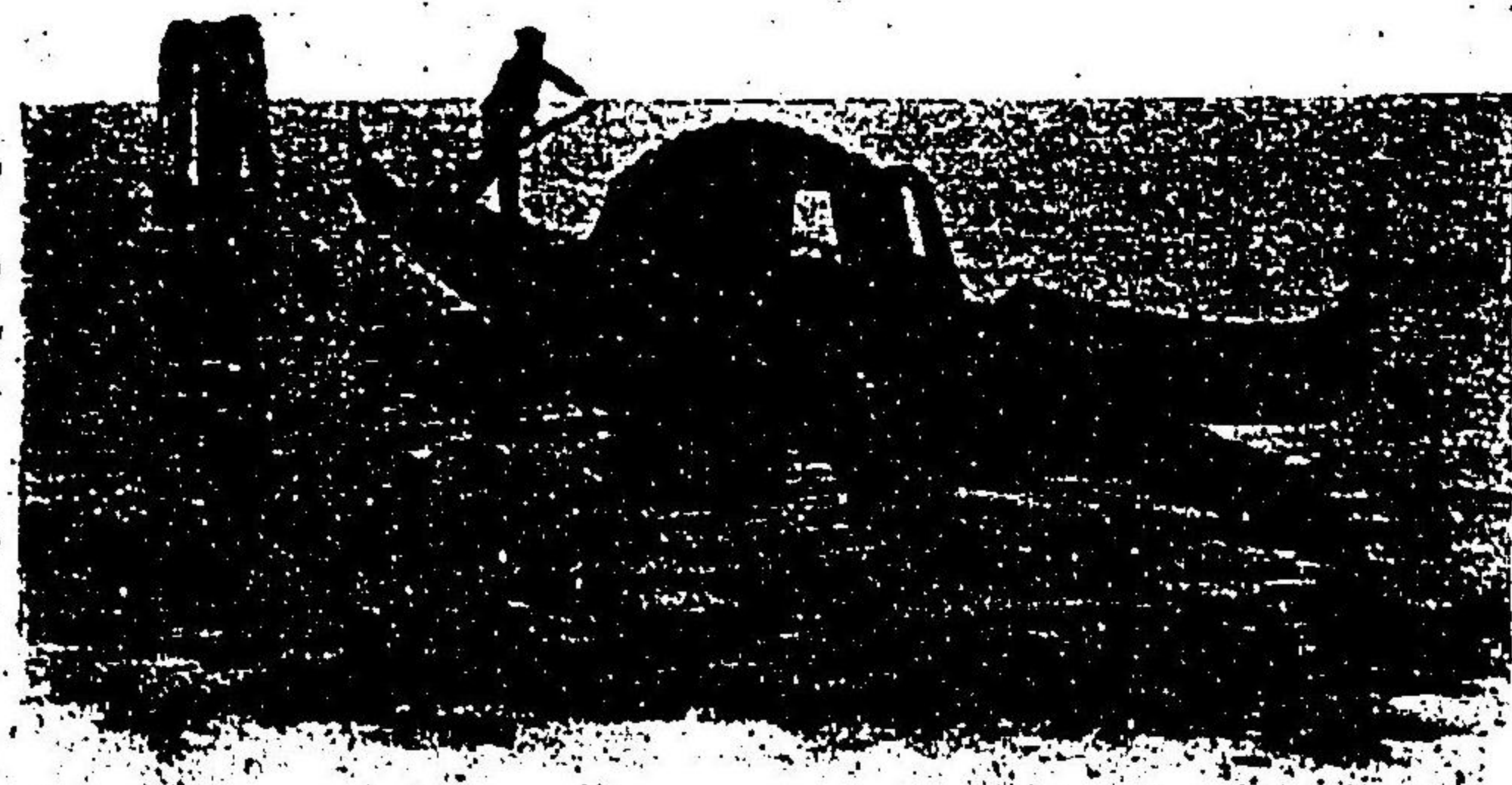
また此宮殿の一隅には石畳みの暗黒なる昔
の牢獄がある。暗き通路は行詰りになつてゐ
るが、其先さは即ち此宮殿と細き運河を隔て
た向ふの牢舎(今日でも監獄)に通ずる著名な
『獄さの橋』である。昔時此宮殿中の白洲で
罪せられた囚人が、此橋を渡されて、永遠に

獄裡に囚はるゝのであつたことから、此名が由来したのである。橋の外観は町通から能く見
えてゐる。

小蒸汽に乗つて、大運河を上り、アカデミアの美術館へ往つた。ベリニ。チシアン。ジロ
ルジョネ等の大匠を出して、十五世紀の復興書界に一時の盛大を極めたヴェニス派の作品は、
夥多此處に集められてゐるのであり、館中、最も大作なりと崇められて、観客の足を此處に引
き寄せるものは、チシアンの『聖母昇天』である。雲に駕し、小天使の群に擁せられて天驕り行
く聖母の靈貌もさることながら、予は其の小天使の無邪氣にして愛らしき姿に見とれた。

再びサン、マルコの埠頭まで歸つて、これから何處を見物しやうかと案じてゐた處で、不圖
話を仕掛けたのは、カナダから見物に來た田舎者の青年で、時に取つての好い道運となり、對
岸で、大運河の入口に在るサンタ、マリア寺へ渡つた。モウ見物の時刻を過ぎたので、戸は
閉つてゐた。すると石段の上にもた小供が十文も貰ひたさに、戸の門錠をコツ／＼やつてくれ
る、中から一人の番僧が出て、堂内を案内し、數枚のチシアンが宗教畫や、マリアの石像など
を拜ませてもらつたが、これは態々見に來るほどの名刺でも無かつたけれど、番僧は若干の心附
を與へられて『クラッシ！(多謝)』と喜んでゐた。

一旦ホテルに歸り食事を済まして、又たもやサン、マルコの埠頭で小蒸気を待つてゐると、再び彼のカナダ青年に會合したから、共に向ひ島のサン、シヨルシヨ寺まで渡り、三十二階もある粗末な板梯子を登つて、風吹き荒び鐘樓へ上ると、ヴェニス一帯の地から、礮湖の光景は眼下に集まつた。これよりは再びサン、マルコへ引返して、更に兩人で他の船に乗つて、大運河を上つた。兩岸には水に臨みて、十五六世紀時代の風流なる大屋高閣立ち並び、彼れは宮殿なり、此れは邸第なり。廊前、庭後にゴンドラを繋いだ景、富人の乗つたゴンドラの權取る舟夫が、長き衣服に赤き扱帯をダラリと結び垂らした風など、いづれも二十世紀的では無うて中世紀的であり、「ヴェニスの商人」のバスサニオやホルシアが彼の家此のゴンドラから現はれて來さうだ。畫舫船首既に在らずと雖も、どれもく黒塗りで、舳に眞鍮で大鏡のやうなものを突き



舟リドノ

立てた細長いゴンドラが、七八世紀以來その儘のヴェニスの名物とあつて、又た頗る雅趣のあるものだ。之を繋ぐが爲、岸前に有平糖式に彩つた棒杭を、高く水中に立てたのも亦た畫中の景である。且つ天然の大防波堤に圍まれたる礮湖の中であるから、運河の水の色は淺碧とも稱すべく、而してヴェニスの風景に一層の美を添へるものとなつてゐるのだ。大運河に架せる風流古雅なるリアルト橋も過ぎ、停車場側まで着くと、予等は又た同じ船にて引返し、此度は大運河を下り、サン、マルコ運河にて網干する漁師の舟や、公園の傍を過ぎて、礮湖の廣き處に出る。遂に細長きリド島まで渡つた頃は、モウ日は全く暮れ、波もやゝ荒くなつて來た。予は又たも同じ船にてサン、マルコの廣前へ歸りて、彼のカナダ青年と別れた。

今夜十一時の列車にてフロレンスへ向はんとてホテルを出た。ボーイが靴を持って、河岸へ出てゴンドラを呼び立てたが、幾艘も繋つてゐるのに舟夫がをらぬ。それで折柄來合したる小蒸気に乗つた。船の事務員は靴が大きいから運賃を別に貰ふぞと云ふ、ところへ一人ゴロッキ然たる男が、しきりと予の靴に手を付けて、何か言ひく船に乗る。不案内な外國人と見くびり、停車場まで荷物擔ぎの積て尾いて來て、幾許かにしやうと云ふ蟲の好い奴だ。追拂はうとして言語不通、其中船は出る、仕方が無いから、勝手にしろとて相手にせず。扱て停車場ま

て著いて、船賃として一リーラを拂ふと、事務員は荷物の運賃があるから、これで可いのだと吐す。して見ると一人前の船賃十文を控除した後の九十文は荷物賃の譯だけが、但し其金たるや、事務員の役徳になつたものに相違無い。又た彼のゴロツキは予の鞆を提げて出たが、丁度昨夜のホテルの客引が迎へに出たから、首尾能く此奴を追拂はせた。それでもつまり二十文ほどは呉れてやつたのだ。

汽車が出る段になつて、改札口の驛員が其の鞆は大きいぞ、預けろと拒む。英國以來幾度か汽車を乗換へて、ツイぞ大きいと云はれたことの無い鞆だ、ソシナ法があるものかと理窟を云つたが通らぬ。すると客引の注意で、二十五文ほど此奴に取ると、「グラッシー」と云つたさう、最早黙つて通した。又た客引には一リーラをくれたが、一旦は禮を云つて去りながら、又たやつて来て、先きに切符口で予の持てる乗車切符を検査して貰つた時に、二十五文取交へて置いたから、それを呉れよと云ふ。これも全くは客引が虚言を吐いて強請つたのだ。鞆を車室に運んだ擔夫が、また賃錢の倍額を強請つた。ア、扱てもヴェニスに風景の佳いところ、しかし人間は下等だ！ 風景と故蹟と美術とて飯を食つて、外國人から金を食ふ以太利根性の淺ましさを、予は先づヴェニスに於てツク／＼と感じたのである。

ダンテが花の里

此列車はフロレンス直行で、途中乗換無しであると、ヴェニスの宿屋でも、停車場でも念を入れて問正した上、安心して乗り込み、一夜を車中で眠り明かす積りでコックリ／＼やつてゐたが、夜中の三時を過ぎてボロンヤへ着くと、車中の者は孰れも降りた。併し予は飽くまで直行と信じてゐたから、獨りジツト車中に留まつてゐると、車掌らしきが来て、出よ／＼と手眞似する、何の事だが分らぬから變に感じてゐると、又た一人の車掌が「乗換」と一言英語を使つたので、扱てはと今更周章で、降りる、擔夫が居なかつたので、二つの鞆から、傘、寫眞器など引さげて、やう／＼フロレンス行に乗換へた。

フロレンスへ着いたのは午前七時頃、停車場外に待合す多くのホテルの馬車の中に「ヘルビユー」と書いたのがゐた。「ヘルビユー」とは何處の都會にも普通なホテルの名だ。美景旅館と云ふからには定めし相當の處であらうと、其馬車に乗り込んで、送り届けられたホテルこそ、場處はベッキオ宮に近き目抜の土地だか、何が扱て美景旅館どころが、ヘルビユーでは無くて

ペラボイ、な汚いホテルだ。建物が古い、寝室も穢い、これでは此處で一夜でも泊る氣にもならぬ。及かず、今日一日で見られるだけのフロレンス見物をして、早速又た夜行汽車で羅馬へ往かうぞ！

予はフロレンスの市を、電車にも乗らず、馬車にも乗らず、地圖を案内に面白さうな處を探し歩いた。凡そ何處の都會へ來ても、一見の旅客は先づ美術館と故蹟とを見るに留まるものであるが、フロレンスは以太利國文藝の中心を成した都であるから、その詩聖ダンテの故郷たるは先づ暫く措き、美術上の名作の見るべきもの甚だ多く「花の里」てふフロレンスは實に美術の花の都である。ホテルを出て、先づシニオリアの廣場でランチの廻廊に幾多の石像を見る、其前には海王の大噴水がある。此處は熱烈なる宗教家ザヴォナローが、異端の罪に問はれて焚殺された趾である。ザエツキオ宮には、以太利建國當初の國會議場の跡あり、階上の廣間には美しい繪畫を織り出したる帷帳あり、又た彼のザヴォナローの大石像を見た。

廣大なるウフィチ宮の高き石段を登ると、此處を以太利美術の粹に誇るウフィチ美術館である。其宮の廣さ、其畫の多さ、予は其悉くを見て、殆ど凡てを忘れたのである。予は數多のチシアンを見た、ラファエルを見た。チシアンが筆とて名高き、裸體なるヴィナスの二畫と、



詩聖の像

無き處を通り抜けて、此處は又たピチ宮附屬の美術館へ出た。此處にもチシアン多く、ラファ

「花神」との美しさ、ラファエルが筆なる多くの聖母の尊さ。彫刻には「メデチのヴィナス女神」

もあれば、ミケランジェロが「カ士」もあり、而して外國畫家の逸品も亦た多く此宮に寄與せられてある。

ウフィチからヴェツキオ橋上に架せる、長き廊下の其左右の壁皆畫ならざる

エル多く、チシアンが「マグダレン」、ギドリ、レニーが「クレオパトラの自殺」、ドルチの「聖母と聖子」などは館中の名物でもあるが、又た予の足を停めしめたものでもあつた。

ウフィチでもビチでも、男女の畫師が此處彼處で名畫の模寫をしてゐたが、彼等は美術研究者では無くて、模寫を賣つて生活する商賣人なのである。ビチ美術館の一室には、此等の模寫を山のやうに陳列して、それ〴〵定價を附して賣つてゐる。チシアンのヴィナスの模寫など殊に多く、其一枚には六百フランとの札が付いてゐた。市中へ出ても、この模寫畫を賣る店が多い。而して聖母の畫像や、天使の畫の模寫の如きは、これは本山參りの信者が買つて歸つて、我家の祭壇の守り本尊とするものなのである。又た大理石像を賣る店に並べたものも、いづれも亦た此處彼處の美術館にある名作の模型である。フロレンスの古美術品は子に子を産んで、市の一大財源を成すものだ。而して予は又たフロレンスに於て、以太利人は祖先の墓と遺物として生活する國民なるかの感じを起したのである。

濁流混々たるアルモに架せるベツキオの古き橋を渡つた。橋は此都にて最も舊きもの一つで、詩人ダンテや、策士マキアベリ等の足にも踏まれたものだ。橋上の長廊下は、先に予の通つたところ、橋には粗末なモザイク製のブローチや、ピン其他の金銀細工を賣る店が並ん

てゐる。これは橋と云ふよりも寧ろ河上の町通と云ふべきものである。

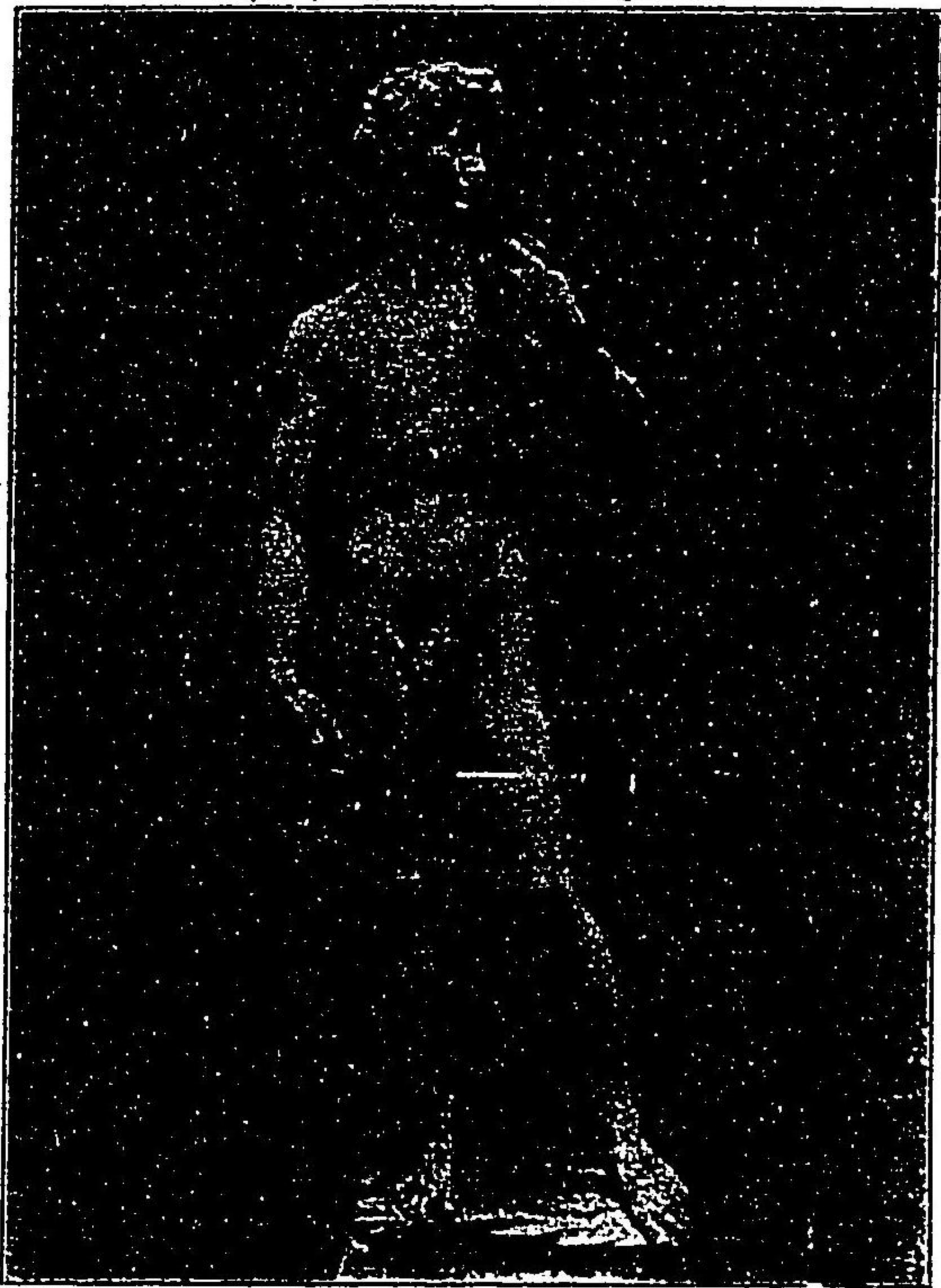
アカデミーの新古美術館へも往つた。佛畫に髣髴たる筆法意匠の宗教畫で、アンゼリコやバルトロミオ等中世紀畫僧の作品が多く保存せられてゐる。其中の一枚なる地獄極樂の畫に、法皇や僧侶が地獄に投ぜられて、角の生えた鬼に食はれたり、釜熬りに會ふ有様を描きたるものは、趣構も、色彩も亦た線畫の筆法も、共に佛畫と殆ど擇ぶ所が無い。ドメニコ派の僧ギランダーヨが「牧羊者の禮拜」の如きは全く信仰を表はした理想畫である。

アカデミーの至寶は、ミケランゼロが青年の英氣を以て其の天才を働かし、思ふ存分に鑿を用ひて彫り出した、巨大なる牧羊者ダビテの大理石裸體像である。臂力に満ちたる其の筋骨、智慧と勇氣とを表する其の容貌、我等は此の石の巨人に就いて、一撃ゴリアスを斃したるダビテが智勇の生命の注溢するを感ずるのである。

堂母の大寺へ往つたが、鮮かに美しき羅馬式建築の雄大宏壯なる堂母の内外を唯だ一覽したるまで、此寺の美術館は見ず。寺前古き八角の浸禮堂に、七世紀時代の建築と、大理石彫刻の古色を帯びたるを見た。

サン、アポロニアの修道院には、種々の壁畫あるが中にも、十五世紀の作ながら、完全なる

形を保存せる『聖晩餐』を一見してより、予はサン、マルコの修道院へ向つた。此處は其昔ド
メニコ派の修道院にて、傑僧サヴォナローラは其の講壇から、貴族の墮落、僧侶の腐敗を熱罵し



(作 ロゼンラケヨ) テ ビ ヌ

メリコ等が熱烈なる信仰を以て描き出した聖畫を見ると、乍ら目を新にし、心を清くするの思

たのである。

其の廣き庫裏にも、數多
き僧房にも、畫僧アンゼリ
コ及び其門弟等の壁畫を存
して、而して今のサン、マ
ルコは既に修道院に非ず、
唯だ見料て此等の名畫を見
せる美術館なのである。

既にラファエルやチンブ
ンに飽き足つた後で、この
サン、マルコに來り、アン



(筆 コリゼンア) 胎受母聖

ひがある。廊下に畫き残されたる『聖母受胎』
の壁畫の如き、又た僧房の一に存する白衣の基
督が天に在りてマリアに玉冠を授くるの畫な
ど、中にも優れて神々しさものである。ザウオ
ナローラの僧房には、著名なる彼の畫像がある。
番人は手に銀紙張りの板を携へて、薄暗き
僧房内の壁畫に光線を照らしては、參觀させて
ゐた。

これより又た市街を逍遙して、クロースの廣
場にて、詩聖ダンテの大理石像を見てより、更
にダンテ町の狭く汚い通り、此詩聖の舊宅の前
へ來た。小さな石造で、窓には金網の張つてあ
る棟別長屋だ。門鍵をコック叩いて案内を乞

うたが、一向に誰も出て來無いので、遂に其の内部を見ることは出来なかつた。

汚い美景旅館で一泊する氣にもならぬから、即日午後五時に予は羅馬へ向つた。乗込んだ列車が定刻を一時間も遅れてまだ發車せぬ。同車の客が、ブツ／＼云ひながら、予に日本の汽車はとうだと聞くから、昂然として我國の汽車は時間など違はずことは無いと答へた。吁、愛國心は往々人をして虚言を語らしむるものである！

羅馬の都

太古、ジユピターの神はオリンパスの山にいまして、ヴァイナス女神と神議りし、女神の處生エニアスの建つる國こそは『永遠の都』たるべけれど定められた。而して軍神マースの落胤たるロミュヌスがバラチン丘上に市を立て、『弱さを助け、強さを挫きて平和の計を定むる』を以て國體となしたる堅實雄武の羅馬を創めたるより、シーザー以後、外は南歐を統一し、亞弗利加を服し、内は七丘の都に輪奐壯大なる金殿玉樓を飾りて、大帝國の威を天下に輝がしたるまで、墊實純朴なる羅馬より、淫靡暴虐なる羅馬となるまで、其間は久しきに似て、而も僅に千三四百年。古來武力を以て建てたる國の永存せしこと無く、恒に保つべき城邑あること無く

して、エニアスが永遠の都は遂に亡びた。古羅馬の滅後また既に千五百年、予等は今茲に其跡を訪ひて、亡はれたる永遠の都を弔ふのである。

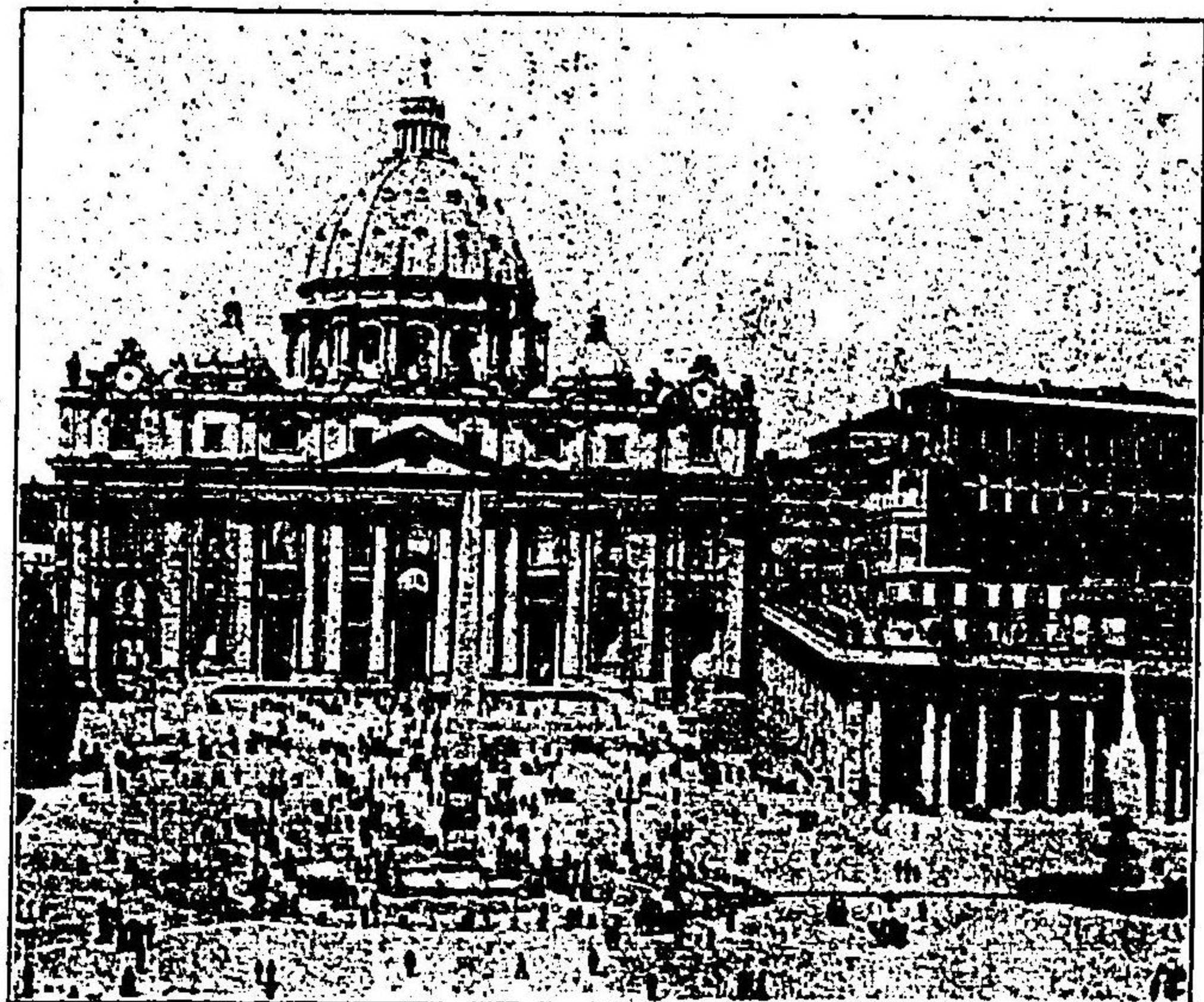
羅馬の都には、三つの羅馬が顯然として存在してゐる。一は即ち古羅馬の廢墟なり、二は基督教の本山として、中世初以來教權俗威共に歐洲を壓したる法皇の首府なり、三は又た即ち以太利建國後の新首都なり。されど予等羅馬に遊びて何ぞ新しき羅馬を見ることをせんや。

サン、ピエトロの大伽藍

予は羅馬加得力教の大本山にして、歐洲の最大伽藍たるサン、ピエトロの寺に來た。左右に半圓を描きたる大廻廊に圍まれて、清らに石を登みたる階圓形の大廣前の中央には、埃及の方尖塔を立て、其の左右には大噴水が絶えず空に霧を吹いてゐる。正面には宏大壯麗なる大伽藍が、中央にはミケランゼロの精神を籠めて造り上げた圓塔を聳て、堂々雄視してゐる。外觀の美は敢て稱すべき程に非ずと雖も、其大は遂に及び難きものなり。既に本堂に入れば、其の宏大にして雄麗なる、それに又た他の諸大寺とは異つて、光線が能く射し入りて明るく、外觀

とは更に光景を一變し來りて、大理石の塼、雲斑石の柱、モザイク、石像また金銀珠玉の内陣など、唯だく目を眩し、心を奪ふばかり。シャールマン大帝、コンスタンチン大帝等の銅像は物の數ならず。見よ是れがミケランゼロ一代の名作たる「ピエタ」である。其の聖母が十字架より下したる裸體の基督を膝に載せて、愛子を神の爲、人の爲に犠牲となして、慈母の悲しみに堪へざる顔にも亦た神々しき表相があり、大匠の整一たび觸れ、頑石を化して靈人となしたるには、自づと頭が下るのである。聖ペテロの巨像の右足が千五百年の間、教徒の接吻によりて磨滅されたるは、唯だ人の迷信を憐むの種に過ぎない。さりながら此伽藍に入つても、予は露國のサン、イサク寺を見た時のやうに迷信がドゥのと云ふ感じが、左迄起ら無かつたのは彼とは大いに異つて、此れが一大美術殿であるが爲であつたと思ふ。サン、ヒエトロに入りて、ペテロが尊いとも、法皇が豪いとも思はぬが、予には此伽藍がラファエルや、ミケランゼロの靈覺の大意匠を籠めたるものなるが故に尊いのである。

玉塼の中に圓形の雲斑石を嵌めた處があるのは、シャールマン大帝以來諸帝が此に跪きて、法皇より帝冠を授かつた坐である。予等東亞の一凡人も此處に來ては、此のシャールマンの坐を踏むのだから面白いには無いか。イヤ何に、此の座ばかりでも無い、羅馬に來ては、三千年



寺口トエヒンサ

の昔からの英雄、美人、奸雄、暴主の死灰の中に立つのだから、これは實に愉快であつた。

黄金づくりの小天蓋に被はれたるが、即ち法皇の玉座で、其下には使徒ペテロの靈廟あり、羅馬人の使徒を縛した鐵鎖が黄金の箱の中に祭られて、硝子越しに見えてゐる。田舎出の善男善女が我も我もと順押しで、番人の指揮に従つて、此の鐵鎖を拜みに下りてゐた。

堂内には我等如く見物人も多かつたが、また本山詣りの信徒も多く、黒衣褐衣を裾長く着た僧侶は既に廣前から、石段から、種々の法衣を纏うた坊主が群を成して

又た本堂へかけて、夥多徘徊してゐた。否、市街にも、

歩いてゐたので、予は羅馬に入りて、先づ寺町へ来たかの感じを起した。これと云ふがツイ昨日の事、法皇の祝典があつたので、外國からも、以太利の田舎からも、僧侶はじめ信徒が群々と本山へ上つて来たためである。されば何處のホテルも、此の本山詣りて一杯で、予の泊り合した宿屋にも殆ど明間が無く、一夜は他客の部屋を都合してくれ、翌夜は遂に應接間の椅子や卓子の間に寝かされた始末。不平を云つても、宿では明間が無いから仕方が無い、氣の毒だとのみて取合はぬのであつた。食堂へ出て、また僧侶と信徒と一杯だ。而も彼等は下宿並の旅籠で泊込んでゐるのに、多勢を頼んで中央の大テーブルを占領し、我等ごとさ泊客は高い宿賃食料を拂ひながらも、脇のテーブルで小さくなつてゐるのであつた。坊主等は肉を食ひ酒を飲みながら、以太利人的にしきりと手真似をしながら甲高い耳觸りな聲で話す、時には老僧のやうな奴を引ばつて来て、御祈禱などとさせて、他客の迷惑をも憚らず振舞つてゐる其面憎さ。面と云へば、ドノ坊主も、コノ坊主も皆テク〜と肥えて、殊勝らしき顔した奴が一人としてゐ無いのにも呆れた。待合室で屢ば話相手になつた米國人の夫婦も、予と同じやうに感じたと思へて、『どの坊さんも至つて壯健らしいぢや無いか』とは、頗る皮肉を評であつた。予は不平の餘、食堂で時々ナイフを置いては、手帖へ僧侶共の悪口を書いた。坊主を肥やすから以太利

は疲せるのだとか、坊主は國家の條虫だとか、羅馬の滅亡の一原因は僧侶の勢力が増大したことにあるとか、サン、アンゼリコが、法皇や僧侶が地獄に陥ちた慘状を描いたり、ダンテが明僧智識を地獄に叩き込んだのも尤もだぞなどと書き付けた。そして日本が若しザツイエ以来の勢力で、舊教の蔓延するに任かせてあつたことなら、我國は亡びたであらう、徳川氏の邪宗門禁制は、實に日本の幸福であつたと、予は羅馬で斯様な感想を起したのである。

法皇の美術殿

サン、ピエトロの大伽藍を圍める巨大崇曠なる幾棟の大夏高閣は、即ち世界無比の大宮殿たるヴァチカン宮である。これぞシャイレマン大帝以来、以太利の半國を私領して、教權と俗權とを以て、歐洲に威臨したる羅馬法皇の政廳たり皇居である。以太利建國の後、其の私領地は官沒せられ、ヴァチカン僅に治外法權地たるに止まつた。かくて法皇の俗權は全く地に墜ち、舊教の教主たるに過ぎざるものとなりてよりは、ヴァチカンの榮華亦た往時の如くならず、法皇は僅かに其の大宮殿中の一小邸に住し、領地の無くなつた腹立まされに、宮門外に出て、以

太利の國土を踏むことをなさじと誓つてゐたが、先般の大地震で、今のピラス十世が被害地方の慰問に出かけたのが、此の誓を破つた唯一の異例であつたのだ。

ヴァチカン宮も今では予等の目に、唯だ一個の宏大なる美術館としか映せずなり、法皇の功德も威光も、予等凡俗とは何の關するところが無いのである。されど其美術館は、餘りに宏大であり、又た開館の日に定めがあつて、必ずしも毎日俗人の足を許すので無いから、二三日の羅馬滞在では逆も其全部を一覽することだに出来ぬ。

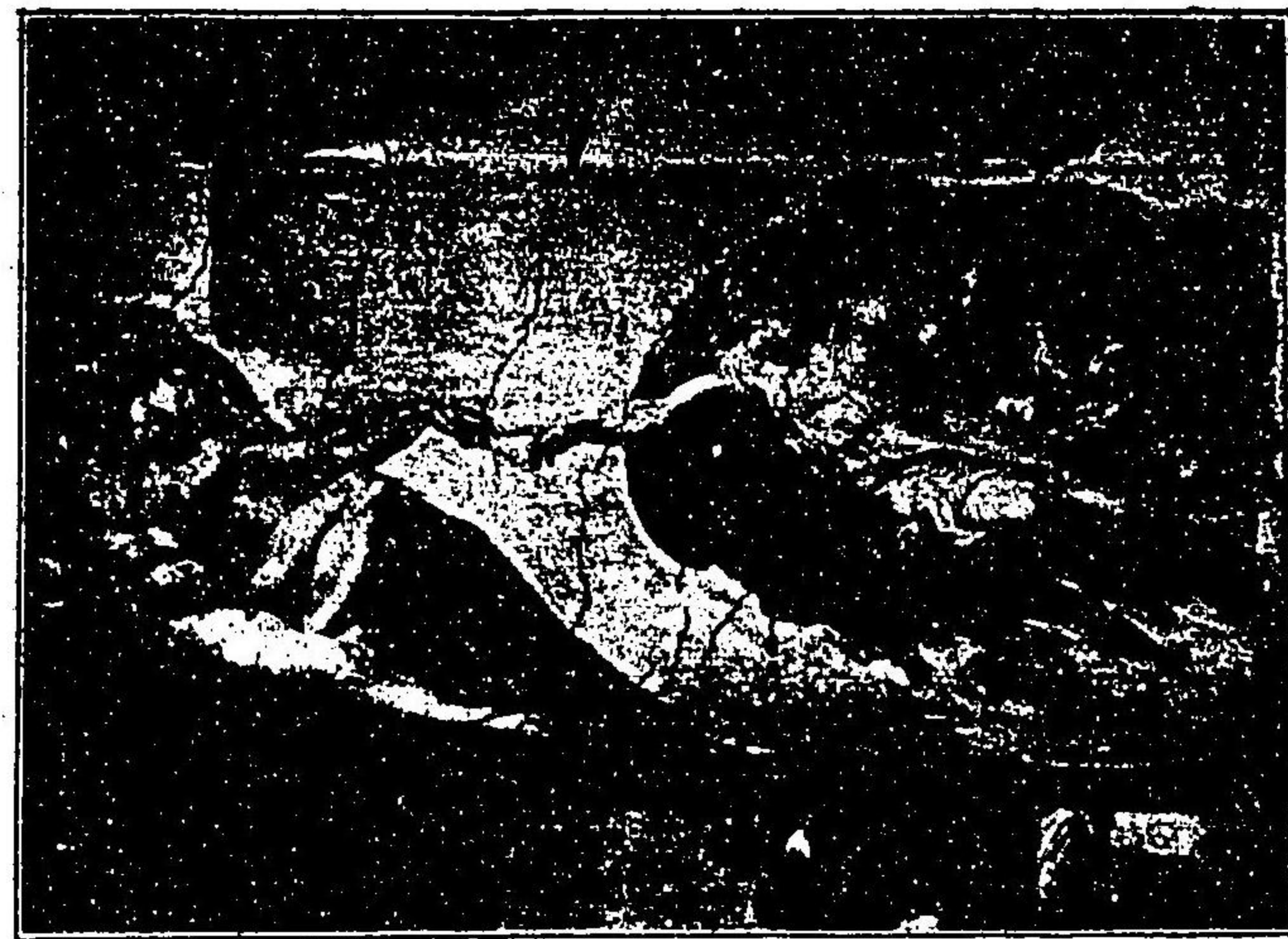
ヴァチカン宮の正門は、サン、ピエトロの廻廊の一端に在りて、爰には淺黄の軍服に斧の附いたる長槍を携へた瑞西兵が警衛してゐる。名匠が心を凝して造り上げた裝飾華麗なる大石階を登り、番人から入場券を買つて、先づ近代の繪畫や壁畫を飾つた三室に入るが、これ等は左程注意を値ひし無いもので、目的は其奥のラファエル室と稱せらるゝ四室である。ラファエル室こそは、此の畫聖が靈妙神秘の精神と天才とを其壁畫に寓したところで、彼れは其の年尚ほ若さころより此の大事業に任じて、遂に一生の間に之を完うすることが出来ず、門生等が師業を嗣いで大成したものである。されど其の第二第三の室の如きは天井畫壁畫共に殆ど全くラファエルが筆に成つたものであり、其畫には宗教畫あり、歴史畫あり、又た象徴畫あり、

孰れを仰ぎ見ても、只だ其靈妙なるに打たるゝばかりで、殊に其の第二室のスタンザ、デラ、セナチュラの天井に、『神學』、『詩歌』、『哲學』、『正義』を寓したる象徴畫の如きは、此の畫聖の傑作であると思はれた。否、ラファエル室は擧げこ是れ、彼が非凡の天才、畢生の苦心の跡を留むるものである。

スタンザを去りて、廊下のロッグに出る。その天井も亦たこれラファエルの下繪に基きて、其門生の妙腕を揮つたもので、孰れも聖書中の畫であるから、このロッグをば、又た『ラファエルの聖書』と呼ぶのである。

更にシスチン堂に入る。此處は又た大才ミケランゼロが、最も放膽なる理想を縱横に發揮して、其の天井と壁とに絶世の名畫を残したところである。彼は建築にも、彫刻にも、共に偉大なる天才であつて、此のシスチン堂には、其の多岐なる天才が悉く發揮せられてゐる。穹形の天井に、先づ繪具と筆とを以て、梁や、樞や、窓を假設して、其間々へ我が思ふまゝ、理想の逆するまゝを描いたのである。天井の中央には、神が明暗を分つ處、草木禽獸を造る處、人間を創造する處、アダム、イヴが罪を犯して樂園を追はるゝ處、又たノアの洪水などの九畫を表はしてあるが、其中にも『人間創造』の畫は、神が指頭を通じて、土より造りたる人間に生

命を與へてゐるところで、人間の指が先づ動き、胸が又た脈々として波を打つてゐる有様は、



(兼ロセンラケミ) 造創問人

高い天井を下から見上げる、予等の目を恍惚たらしむるものである。此畫こそ、この天井畫中の傑作なりと稱へられるものであるが、これを見ても、如何にミケランゼロが想像力の偉大なりしかを察せられる。彼は「神始に土より人を造りて、鼻より生命の息を吹き入れた」と云ふ、創世紀の傳説を全く打破して、遙に之よりも秀でたる想像を働かしたものであり、ミケランゼロの筆端には神智が宿つて、此畫を成さしめたものであるとしか思はれぬ。さりながらかゝる名畫も星霜の變には勝てず、既に多くの龜裂を生じてゐるのは、實に遺憾やるかたなき事である。

創世畫の周圍には舊約の豫言者や、埃及、羅馬の巫女十二人を畫き、また其下には、舊約物語を描いてある。扱て又た正面祭壇の後の廣大なる壁上一杯には、「世の終りの審判」に基督が人の靈魂を審判するの狀をば、バイブルと神話とを巧みに融和した、最も放膽なる理想で畫いてあるが、ミケランゼロは之を描くに、凡ての人物を裸體とした。ミケランゼロをして、このシスチン 堂に其の天才を自由自在に働かせた法皇は、豪い人物だと云はねばならぬが、兎角法皇の中には教理などに囚はれた没分曉漢がゐるもので、ヴァーヂルの大詩篇「エネイド」を焼かうとした者さへあつた位だ。ポール四世と云ふ没眼識の法皇は、此の壁畫の人物が裸體だとは怪しからぬとて、一思ひに塗抹しやうと途方も無い馬鹿な事を考へたが、人から諫められて、僅かに他の畫家に命じ細布を畫き添させ、或る人物の裸體を少しづつ被はしめたが、其後クレメント十二世と云ふ是も亦た没分曉漢が、更に多くの人物に布を纏はせた。法皇も法皇だが、かゝる名畫毀損に雇はれた畫師も阿呆の骨頂である。これが爲にミケランゼロが筆は少からず汚損せられたのに、又た祭壇で焚く香煙の爲に燻ぶる、歲月の變の爲に壁面に龜裂を生ずる、それで此の大壁畫は天井畫よりも一層破損の狀態である。四壁の中央には、十五世紀のフロレンス派及びアンブリアン派の名匠の壁畫が六枚あるかなれど、此等はミケランゼロの景物

たるに過ぎず、シヌチン 堂へ来て、此等に目を配るものも無いのだ。

ラファエル 室と、シヌチン 堂とは、蓋し復興時代美術の極致に達したものであつて、扱て其中いづれが優つてゐるかとは、美術界の久しき問題であるが、素人眼が、彼れより此れへ移ると、ミケランゼロが殆ど超人的想像力を以て、あらゆる形式を破つた最も大膽な、彼がカラ、の大理石に鑿を加へたやうな勢の筆法に成つた此等の壁畫は、雄渾壯大なるに於て、ラファエルよりも大に優れるものと感ずるのであつた。

翌日午後、予は再びヴァチカン 博物館へ来た。而して昨日は時刻が遅れて見ることの出来無かつた其の繪畫館で、ラファエルが壯年の大作たる『フオリノのマドンナ』と、又た其の絶筆たる『基督の變貌』とを拜まんと欲し、今日は開館日なり、時刻も大丈夫と心得たのに、ドウしたのか、番人はモウ既に閉館されたと告げたのには尠からず失望した。この繪畫館は那破番が一旦以太利からルーヴルへ奪ひ去つた名畫を再び取り返した時、其の保存の爲に設立せられたものである。

予は直ちにヴァチカン 博物館へ廻つた。埃及館などは鎖されてゐたが、予の最も希望した古代彫刻館へ入つて見ると、宏大なる殿舎の中に、希臘、羅馬の名匠に成りたる石像の夥多しき

こと、嗚呼、これ程に逸品が多くあるなら、日本にも一つ位は貰ひたいものだなど慾氣がさした。シーザーだのシセロだのと、羅馬英雄の顔の古い彫刻もある。併し何が豪いと云つても、このヴァチカン 博物館で最も豪いものは即ち『ラオコン』の彫刻像である。アポロの宮の祭主ラオコンが神罰に觸れて、其二子と共に毒蛇に殺される、其の死の苦痛を、最も凄愴に現はし、往昔希臘の名工が、一塊の大理石より彫み上げたもので、豫想してゐた程に大きくは無いが、ミケランゼロさへ、『美術の不思議』と讚嘆したものである。之に近く『ベルヴェドロのアポロ神』があつ



ラオコン像

て、これも亦た名作以上の名作なりと稱せられ、我が神罰の如何に恐ろしきか、彼れ「ラオコン」を見よと指し示してゐるやうだ。

博物館の階上の一室には、窓際に高い脚榻を置き、側に守衛がゐて、これへ上つて見よ、法皇の寢殿が見えるぞと云ふので、上ると、熱帯植物など植込みて、清らかに廣々とした窓外の庭園中に、瀟洒たる一棟が現はれてゐた。予は守衛の目的とする銅貨二枚の心附を、彼に與へて去つた。

大帝國の廢墟

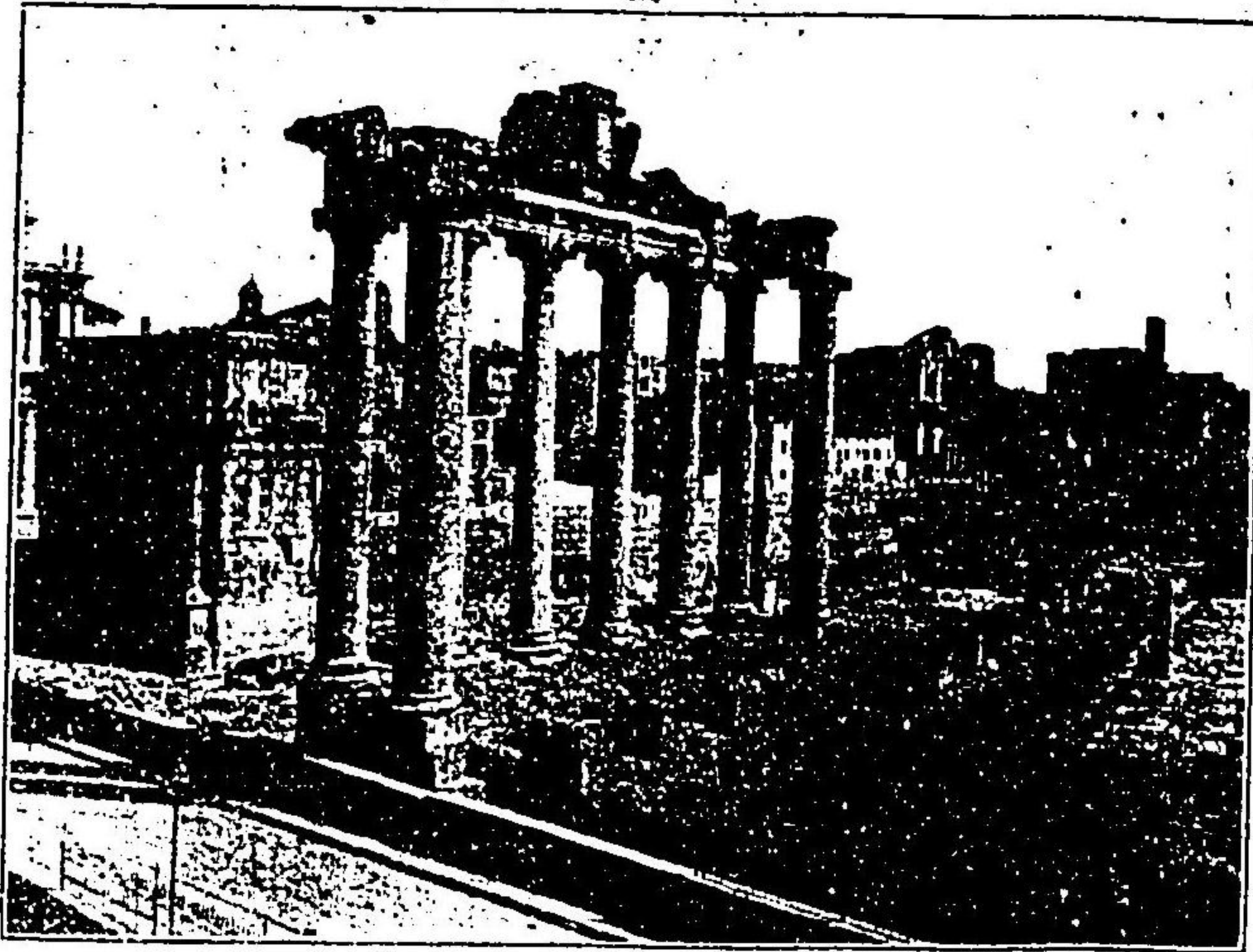
羅馬の天子は孰れも普請道樂であつた。シーザー既に然りて、其甥のオーガスタス帝となる、「我は瓦の町を受繼いで、之を大理石の都となして後に傳ふ」と云つたのである。それより歴代の天子は、戦勝ある毎には大なる凱旋門を興す、圓柱を建て、軍功を誇る、又た宮殿を營む。人民娛樂の爲には、公堂、劇場、浴室を造つた。ネロは金宮を興し、タイタスはコロシヤの演武場を建て、カラカラは浴室を造る。而して由來羅馬帝は人民の歡心を買ふ必要からし

て、彼等の民政時代に享有した自由を奪ふ代りに、龐大なる劇場、浴室等を興して、彼等を娛樂に耽らせ、心を政治の外に移らしめたのである。「瓦の羅馬」の世には勇武敦厚なりける民情が、「大理石の羅馬」となりては、戦勝と榮華とに酔うて、奢侈淫靡に流れた。羅馬人は「強きを挫き、弱きを助けて、平和の計を定むる」て先祖の嗣業を大理石で賣渡したのである。羅馬帝の樓臺は、國民の自由と純朴とを剝奪したる記念碑のやうなものであり、而して又た巨大なる帝國を轉覆せしめた蹟く石であつたのだ。奢侈と殘虐と淫靡とは遂に羅馬を亡ぼして、金殿珠閣は蠻族の爲に劫掠せられ、破壊せられ、其の僅かに形を存するものは基督教の爲に併呑せられて、彼のゼイナス神に護られ、ロミュラスによりて興りたる七丘上の羅馬は、ナザレのイエスの都たらざれば、榮華の夢の跡に、累々たる石片瓦礫の横たはれる廢墟となり了つた。而して伊太利政府が、此の廢墟を發掘保存し、四方の來遊者から金を取つて見物させてゐるのは、我等には古史の寶であり、驕りて不義なる者は久しからずとの教訓であるかなれども、亦た翻へつて思へば、以太利人こそ失禮ながら、微祿した子孫が祖先の屋敷跡と墓場とは、コンナに豪かつたぞと、盛んな昔を自慢して觀世物にし、それで生活の助けにしてゐるものゝやうにも思はれるのである。

公 堂 の 趾

羅馬建國の上古よりして、羅馬人の政治、商業、宗教、社交の中心となり、遂に巨大なる羅馬帝國の核心となりたるものは、實に『羅馬公堂』である。このフォーラムは六世紀の頃まで、稍や古への形態を存してゐたのだが、羅馬帝國の滅亡後、基督教會の跋扈と、蠻族の劫掠によりて、遂に全く破壊せられ、其の高閣玉殿を築き上げてゐた大理石は奪ひ去られて、寺院となり、民家となり、そればかりか、其の大理石を焼いて石灰を製造する處となり、又た終には羅馬の芥捨場となつて、羅馬の元老の國事を謀り、ポンペイ、シーザー、オーガスタス等の民心を收攬するに用ゐた公堂は、遂に地中幾十尺の下に埋もれたのである。以太利建國後となりて、政府は銳意之が發掘に従事して、歴史上最も尊むべき遺跡が、今や二千年の盛時を弔ふ我等の目に映することゝなつた。

政府の故蹟保存局の役人が番をしてゐる門口で、一リトラの入場料を拂つて通る。吁、これが羅馬のフォーラムなるか、荒れ果て、見る影も無く、丸て火事跡の石問屋のやうだ。千古の



趾 の ム ラ - オ フ

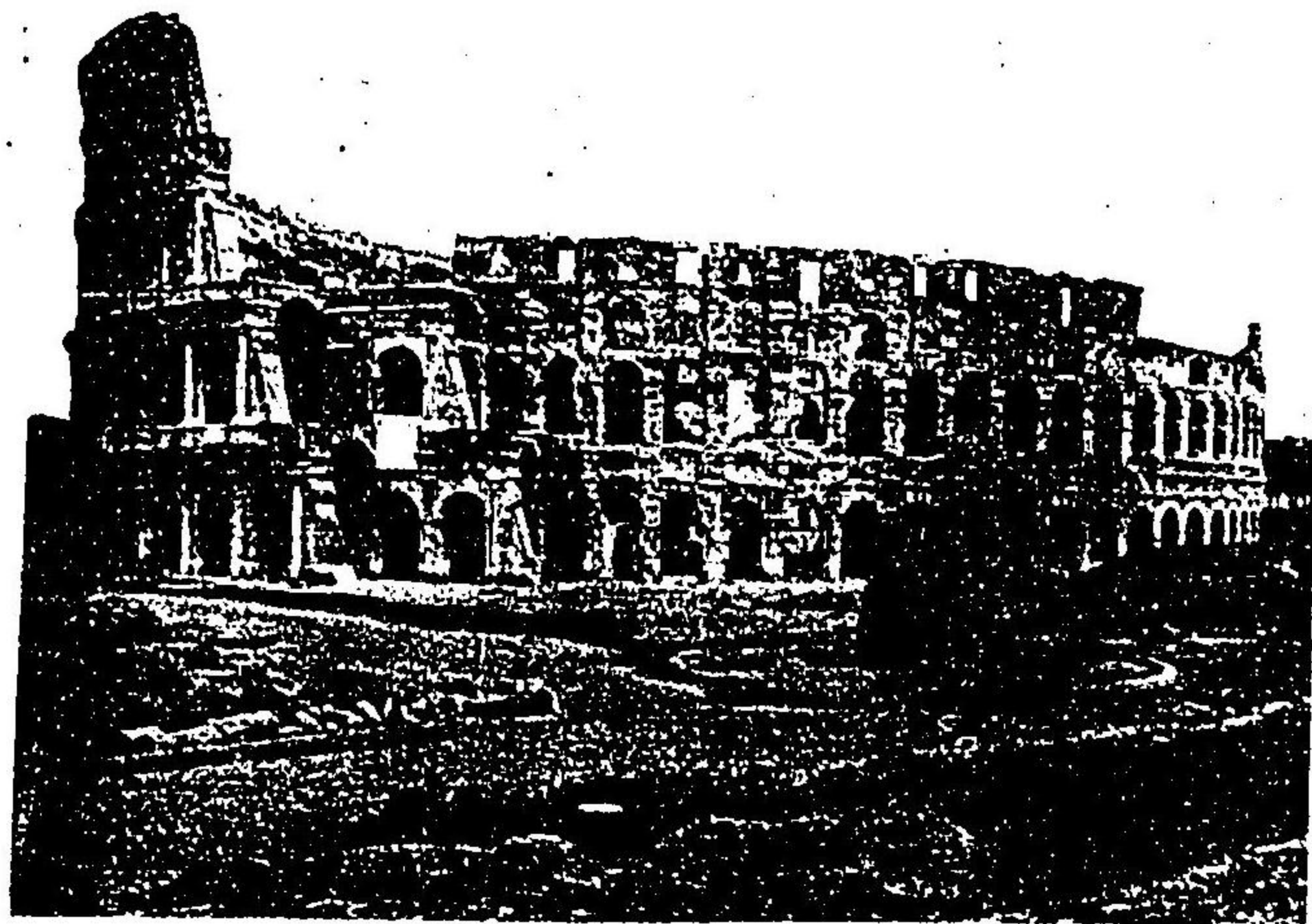
英雄只だ斷碑と云ふが、此處、羅馬の偉人、傑士、英雄の活動舞臺は、累々たる石塊である、荒涼たる殘礎である、兀々たる石柱である。圖を案じて、昔時の盛觀を追憶すれば、彼の八基の石柱の半ば碎けて孤立するものは、サタルンの神殿であつた。羅馬民政の初め天より二頭の白馬に跨つたる二柱の神が降臨して民軍を指揮し、暴主タルキンの軍を破つて羅馬を救ひたる後、フォーラムに入り、馬に飲して再び昇天した其跡に、羅馬人の建立したるカストルとポラックスとの宏大なる廟社は、今僅かに三本の石柱となつてゐる。タイタス帝並びに暴帝カラカラの凱旋門は、辛うじて其當時の形を保存してゐるが、羅馬の守護神なりしヴェスタの宮も、この宮に奉仕して『羅馬の聖火』を護りたる

「ヴェスタの巫女」の殿舎のありしあたりも、草莽々たる中に、石片の横たはれるを見るのみ。聖火既に消え國亦た亡びて幾許年ぞ、今は爰に其の廢墟あり！ シーザーが親友ブルタスの爲に刺されて、「汝ブルタスも亦た？」と歎じて、顔を掩ひつゝ斃れたるポンペー像下も、アントニーがシーザーの遺骸を運び來りて、「ブルタスは正直なる人ぞ！」と暗罵しつゝ、羅馬人を煽動したる演壇も、圖を見れば此處であつた、彼處であつたとは記してあるが、皆これ等しく碎破せる大理石の磊々たるを見るのみである。隅々には又た昔の殿堂の石柱や、石像の破片を累と積み重ねてあるが、其中にはシーザーの血に染みたまものもあるであらう、ポンペー像の破片もあるであらう。

コロシアン演武場

石累々草莽々たるフォラムの敗趾の中にて、僅に其の昔の面影を保存せるタイタス帝の凱旋門を通りて暫く歩むと、曠大無比なるコロシアン演武場の圓さ顔壁が、轟々として掘り崩された小山の如くに巍立してゐる。

羅馬人が武勇を好むの甚だしきや、其の弊は流れて殘忍暴虐となり、戦時の捕虜を或ひは陣頭に屠り、或ひは戦車に繋いで之を奴隸となすは古來の風俗であり、ポンペーの如きは、一時に數千の奴隸をアツピア道にツラリと並べて磔殺したる程であつて、羅馬の歴史は、其の建國以來、無辜の血に染んである。此國に暗殺、毒殺の盛んに行はれたのも、當然な事だ。而して又た上古からして、勇士の墓前に捕虜を殺し、父母の葬式に亡魂を慰むる爲なりとて、兄弟相屠つたことさへあつた習慣が、後には劊奴なるものを養ひて、人と人と、又た人と野獸とを闘はしめ、其の相屠戮するを見て、男女共に之を樂むの甚だしきに至つた。帝政の世となりては、この恐るべき風習が更に劇烈となり、劊奴の養成所さへ設けられ、奴隸、罪囚のみか、貴族の子弟までが自から好んで劊奴となり、往々にしては女子の劊奴さへ出した。この劊闘の爲には、宏大なる演武場が設けられ、人は演劇を見るよりも殺戮を見るを快として、之を以て羅馬の最大娛樂としたのである。ネロ帝が基督教徒を迫害して、彼等を宮園に焚殺し、之を炬火なりと稱して、帝は後宮の美人と共に酒を盛つて之れを見たことや、羅馬の民を喜ばせんが爲に大演武場を起し、基督教徒を驅り入れて猛獸の餌食となし、其の又た猛獸をも残り無く殺して、觀樂に狂する男女を喜ばせたことは、「クオ、ヴァヂス」を讀むものゝ、覺えず膚に粟を生

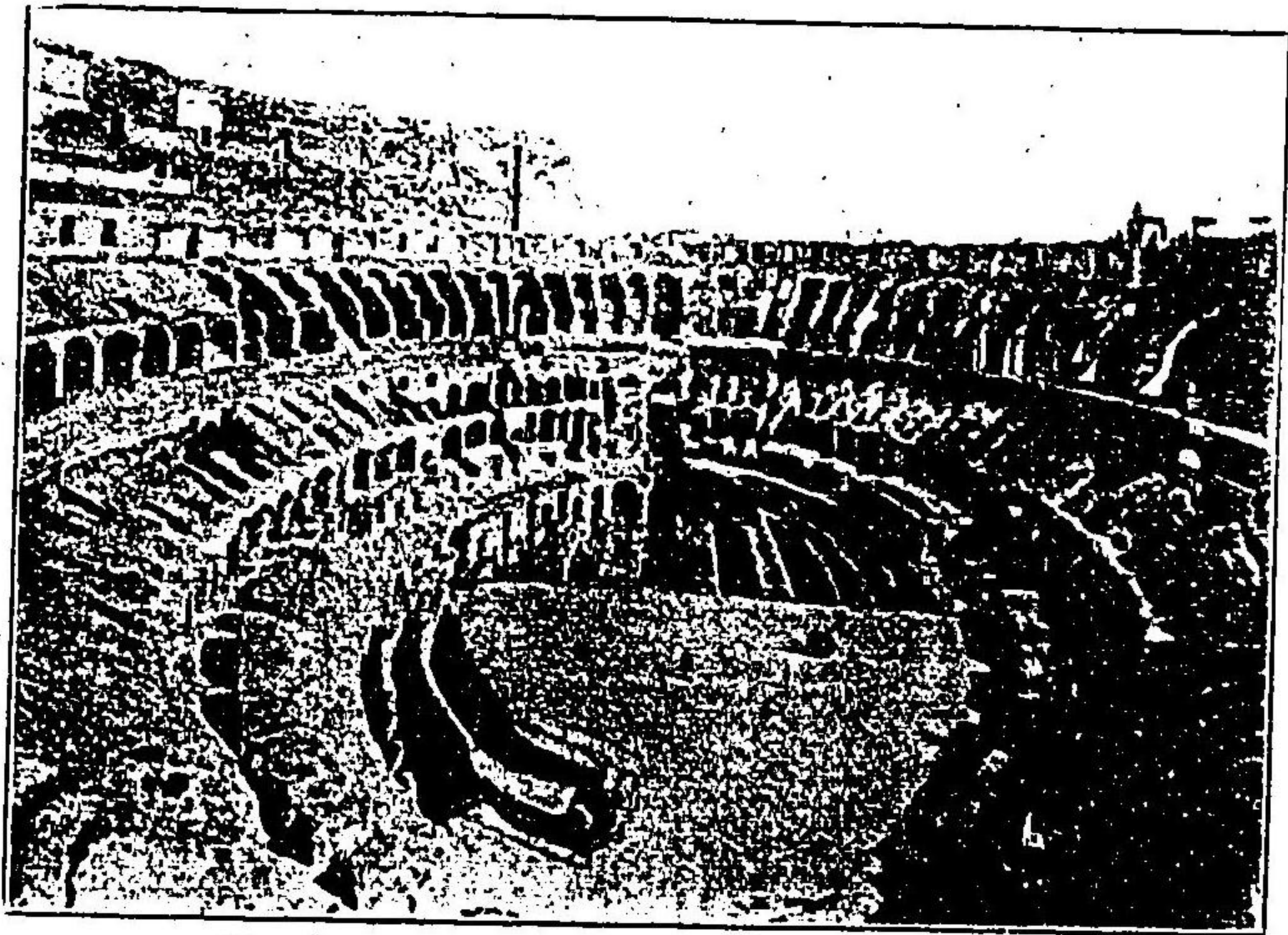


壁 頭 の ム ア シ ロ コ

ずることであり、羅馬劍奴の慘俗は、暴君をしてかゝる殘虐を敢てせしむるに至つた。

ネロより五代目のタイタス帝は『人類の快樂』と云ふ仇名を取つた程に、何すれば人民に快樂を與へられるかと、そればかりに苦慮熱中して、浴室も興せば、凱旋門も建てた。而して今予等の眼前に巍然た、コロシウムは、實に此帝が人民の最も快事としたる劍奴猛獸の格闘を大規模に行はんが爲に築造したのである。楕圓形の巨屋、其の數層の坐席には八萬の觀客を容るべく、演武場の下には數千の猛獸を幽すべき密穴あり。タイタス帝は一日に亘つた其の開場式に、獅子、虎豹の類五千頭を屠り、又た場中に水を漂へ、軍艦を浮べて擬戦を行はせた。トラジャン帝亦た其の戰勝の祝祭なりとて、此處に於て一萬人の劍奴を闘は

せ、無數の野獸を殺した。而して又た此のコロシウムこそ、歴代の皇帝が殘忍なる羅馬人の歡心を買はんが爲に、基督教徒を虐殺したる處であり、彼の哲人マーカス、オーレリアス帝すら、此の演武場に臨んで、無辜の基督教徒——可憐なる女子、無邪氣なる小兒、清癯の老人までが、天を仰いで來世を望みつゝ、飢たる獅子の牙にかけられるの見て痛快なりとしたのである。暴戻なるデシアス及びダイオクレシアン帝が大迫害を行つて數萬の信徒を慘殺し、これに忌むべきナザレの耶穌の徒は根絶したぞと喜んだのも、此のコロシアムの演じたる大慘事であつた。基督教がネロ以來の殘忍なる迫害に耐へて、遂に羅馬を精神的に征服した後、オノリアス帝が蠻族と戦つて捷つたので、



部 内 の ム ア シ ロ コ

羅馬最後の祝勝祭があると、このコロシウム

むて一時中止せられてゐた劔奴の血闘が再興された。其時テレマカスなる一僧あり、自から場
 中に跳り入り、劔奴の格闘を制せんとして却つて其刃に斬られたが、これが幾千萬の人と獸と
 の血に汚されたるコロシウムに於ての最後の犠牲であつた。これよりは劔奴の跡を絶ち、國も
 また既に傾いて、蠻族の侵入屢ばなりしより、コロシウムは要塞となりて敵を禦いたこともあ
 れば、後世には貴族等が之を毀ち、其石を盗んで、我が邸宅を建てたこともあり、商人の店を
 張るところとなれば、伊太利乞食の巢窟ともなり、遂に又たこれ羅馬市外の塵塚となり了つ
 たが、那破嶺大帝の以太利を征服した時、之に大掃除を行つて、頽れたながらも其形容を留
 め、この羅馬の最大記念碑を保存することゝなつた。

コロシウムは、羅馬の偉大なるを表するものであつた、而して又た羅馬罪惡史の大なる證據
 物件である。昔の巡禮歌に「コロシウムが立てる間は、羅馬立つべく、コロシウム倒れば、
 羅馬も倒れん、羅馬倒れば、世界も亦た倒れん」との文句もあつたさうだが、コロシウムは
 砕けたり、羅馬は壊れたり、されど世界は此のコロシウムの跡に、悚然として羅馬の罪惡を追
 想しつゝある。その緒い磚瓦て厚く積み上げた巨壁の間を通りて、頂邊の見物席の跡から、闘
 場を瞰下すと、下にゐる人間が小さく見える。吁、紫衣桂冠のデシアスやダイオクレシアン等

が、半ば裸體で、頭に花冠を巻いた窈窕たる美人に擁せられつゝ、基督教徒の血で朱唇を染め
 たあたりは何處なるぞ。コロシウムはネロ帝の演武場では無かつたが、されど此處に立つと、
 暴戾なる彼が、多淫の毒婦ポツペアの膝に凭りかゝりて狼の吠ゆるが如き聲で、自作の歌詩
 を歌ひつゝ、屠戮の慘虐を楽しんだことも聯想せらるゝのである。

獅子の牙に劈かれたる無辜の死骸を鉤にかけて、設けたる穴へ引落す、其跡へ砂を蒔いて流
 血を拭ひては、又たもや血を流さしめた。此の闘場には、凡そ幾萬人、幾萬頭の碧血を濺いだ
 ことであらうぞ。二千年後の今日とは云ひながら、腥風の鼻を襲ひ、叫喚の耳を侵さぬのが不
 思議な程である。既に破壊せる此の闘場の下には、石壘の獸穴が露出してゐる。又た基督教徒
 を猛獸の餌とするまで、假に繋ぎ置いた石牢も見えてゐる。而して其の牢獄の上には、今は聖
 母マリアが小基督を抱ける悲像を祭り、數萬の殉教者が血を流したる、此の演武場を崇めて神
 の宮となし、基督の平和の遂に羅馬の暴戾に勝つたことを誇つてゐる。

コロシウムの壁外に、高く磚瓦を積み重ねた圓壇の、最早既に破壊したまゝに残つてゐるの
 は、往時此上にネロ帝の自から造りたる巨像の在りし趾であり、之に近くはコンスタンチン大
 帝の凱旋門、今尚ほ完き形にて存置せられてゐる。手は之を通じて、更に羅馬の據つて興りた

るバラチン丘上、諸殿の廢趾に登つた。

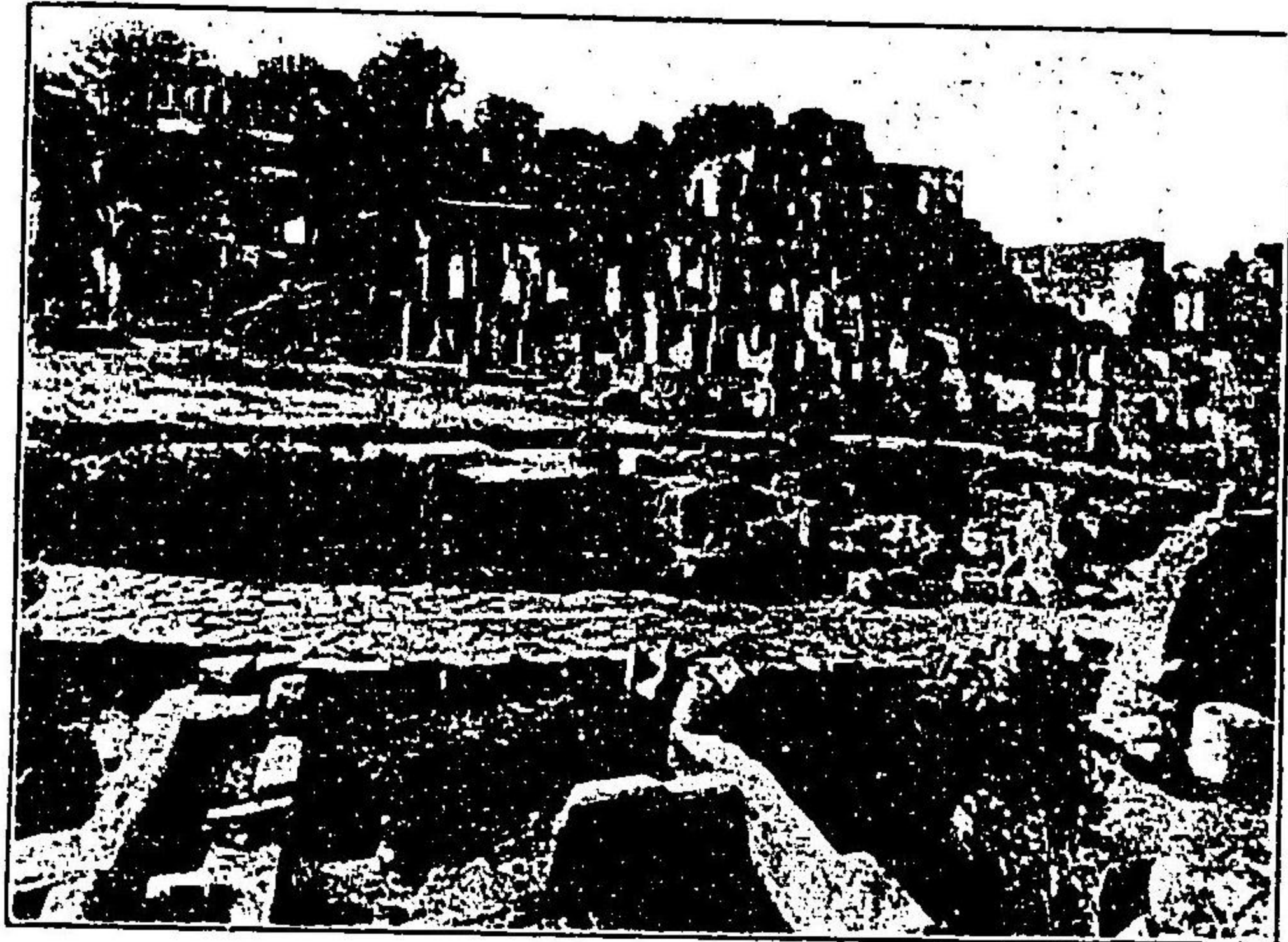
バラチンの故宮

古今の歴史の中で、羅馬の古史ほど趣味のあるものは無い。先づ其建國勲業の昔に溯るなら、遼々なる紀元前七百五十年の頃とかよ、軍神マースが、ヴェスタの宮の聖火を守りて一生不犯を誓へる童女に産ませた、雙生児のロミュラスとレムスとが、狼の乳を吞んで成人してから羊飼となり、遂に兄弟はタイバー河畔沃野の間に重疊たる七丘の地を相して一都を開き、先づバラチン丘上に世間のあふれ者、無頼漢を集めて、ローマ村を建てた。ロミュラスは自ら犁を執りて塹濠を掘るとき、レムスを殺す、それで羅馬史の第一頁は既に血を以て書かれてゐる。されば爾來千年の歴史が流血淋漓の慘事に満てるも尤もな次第では無いか。扱て諸王の世を経て、民政となり、帝政となり、武威八荒に輝くに及んでは、ロミュラスが建てた茅屋土階は、漸次に金殿珠樓の豪華を街ふものと變り、羅馬大帝國の朝廷として輪奐の美を極め、民の膏血を枯らしたのである。然るに滄桑の變また夙に此の宮殿臺榭に及びて、今のバラチンは

果して何の状かある?

圓形なるサン、テロドロ寺の側にて、爰でも一リーラの入場料を以太利政府に拂ふ。そしてバラチン丘上に登り、赭き磚瓦を疊みたる宮門の頽然なるを過ぎ往くと、廣やかなる丘上には、オーガスタス帝の玉殿も、暴帝ダイベリアスの高閣も、畫壁、彫牆皆剝落し盡きて、其の形骸を留むるもの稀に、當年帝子の家多くはこれ斷柱、殘礎、頽垣のみ、否、累々たる石片の散布するあるのみである。ネロが羅馬を焼いて其の灰燼の上に造營したる金殿は、今や其礎をだに見ること能はず。手は頽れ盡したるアポロ神殿の荒壇上、短く折れて横たはれる大理石柱に腰うちかけて、漫るに

バラチンの宮の廢趾



懐古の情を催し來つたのである。

我れバラチンの丘に登り、頽壊せる宮趾に立ちて、フォラム及びコロシアムの荒墟を瞰下しつゝ、且つ夕陽既に七丘に暮れてタイバーの濁流に沈むを望めば、昔を懐ひ、今を見て、羅馬の榮枯は眼中に在り、英雄去つて豪華盡き、神の定めたる永遠の都城夙に亡びて、秋風只だ山河に落莫たるの感無きを得無かつたのである。

雨のアツビア道

十八日は朝來、降りみ降らずみの秋雨だ。予は此度の旅行で、羅馬が初めての雨だ。「日の照らす以太利」も最早雨期に入つたのである。しかし雨だとして厭ふべき身かは。ホテルから馬車を僦うて、郊外アツビア道の彼方にあるカタコムの見物に出かけた。羅馬の馬車は振つてゐる。馭者臺には鉛屋式の大輻輳傘を立て、馬は濡るれば濡れよ、我身は濡れじ、大事ぞと馭者は澄まし切つてゐるのだ。

天下に通ずる羅馬の道路の中でも、アツビア道は「路の女皇」の稱あり、羅馬の盛朝には貴人美女が花を飾つた車で押し歩いたところ、凱旋の將軍が、戰車に捕虜を繋いで行進した大道で

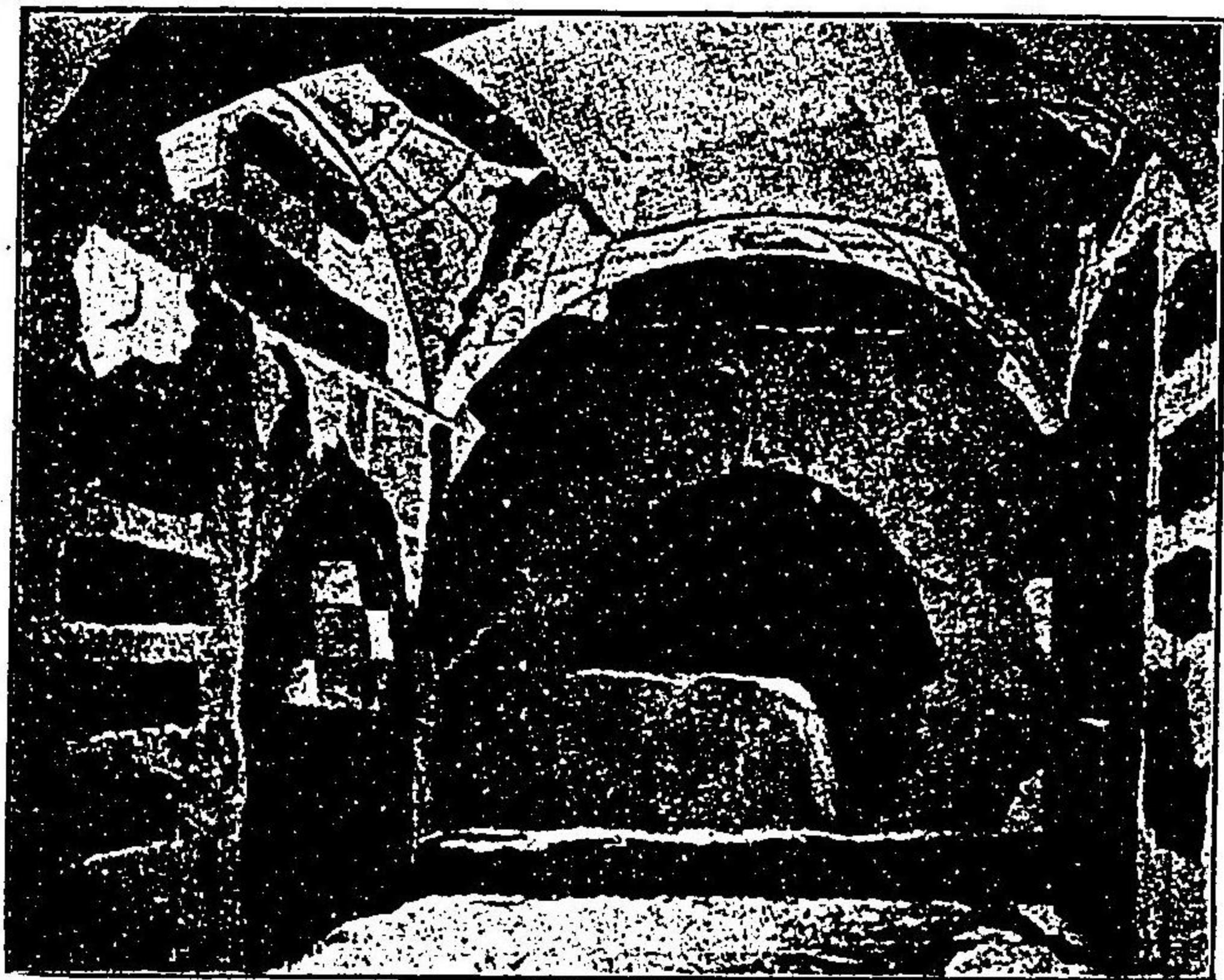
ある。しかし今日見受けたところでは、狭くて汚い道路だが、此路も亦た既に久しく埋没してゐたのが、五六十年前に發掘せられたのである。兎も角も紀元前四世紀に築造せられたまゝの敷石の上を、我等の馬車は駆け行くのである。

道の左右には、羅馬の城壁の跡が處々に残つてゐる。これも大昔に建築せられたサン、セバスチノ城門は既に頽破して、屋根には草が茫々と生えてゐるが、これでも今尚ほ市門を成し、兵卒が番をして、田舎から牧草を積んで來た馬車の検査をしてゐたのは、即ち入市税を取立てる爲の税關と見受けられた。路傍折々彫刻を加へた大理石柱の破片が駒止石となつてゐる。

使徒ペテロがネロ帝の迫害に恐れを抱き、羅馬を遁れ出でんとして、アツビア道を走り、アルモの小流を涉つて、カペナ門まで差しかゝると、忽然として主基督が幻に現はれた。ペテロは驚いて、「主よ何處に往きたまふか?」(「Domine Quo Vadis?」)と尋ねると、基督は「再び十字架に懸けられんが爲に羅馬に往かん」と答へたので、ペテロは大いに己れの意志薄弱なるを恥ぢ、再び羅馬へ引返して、遂に教に殉じたとの傳説があつて、其の基督と會つた所には今もドミニネ、クオ、ヴァヂスの一小寺が立つてゐる。寺内には基督の大きな足跡を印した石があるとか云ふことだ。

昔は肥沃の野であつたカンバナは、今や一面の荒れ果てた曠野となり、それに瘴癘の毒氣に充ちてゐるので、羅馬市が繁昌の都會となつてゐる今日でも、農民の此野を耕さんとするもの無く、此處彼處に巨木の淋しく孤立せるあり、又たクローチアス帝がバラチンの浴室に水を供給するが爲に建設した、高架水道の破壊せる柱列が散在してゐる。

行くこと二哩餘にして、予はサン、カリステの壁塞に來た。このカタコムは紀元一世紀の頃より、基督教徒の墓地として官許を受けたところだ。地上に墓を建つことは許さぬが、地中に穴を掘りて埋葬することを許したのである。然るにネロ以來の迫害となりて、彼等教徒は地上に膝を容るべき處が無くなつたために、遂に土中深きこの壁塞に潜み、先祖や教友の墳墓の間に隠れて、辛うじて其の堅忍不拔の信仰を守つてゐた。此種類のカタコムは羅馬の郊外の土中幾十尺の下を掘り繞らして、幾ヶ處もあるのであるかなれど、其の最も廣大で且つ最も著名なるは、このサン、カリステである。害上の地は、死の標なるサイプレスの木立の茂つた廣き一圃の庭園となつてゐる。其の門前て馬車を下る。門側には褐衣の僧侶が繪葉書、珠數、御書像など賣つてゐる。カタコムの入場料は一リーラで、著程な蠟燭を一本くれる。案内の僧は同じやうな細い蠟燭の長いのを棒の尖に巻きつけて持つてゐる。案内者は英語のでも、獨逸語



カ タ コ ム の 内 部

ちた骨の遺留せるものもある。法皇の墓跡もあれば、著名な殉教者を埋めた處もある。又た教

のでも、佛語のでも、御望み次第だと云ふ。

今日は、門前に多くの馬車が止つてゐた。

境内には僧侶や、本山詣りの田舎者が夥多御詣りに來てゐた。予は案内僧に従つて窟中に下る、僧も予も蠟燭に火を點じて、地中土龍の道の暗處を通つた。掘りも掘つたり、道を蜘蛛十文字に掘り割つて、穴は遂に羅馬の市下に達してゐるとか、悉く歩めば幾哩もあるとのこと、案内僧は唯だ其一部分の最も肝要なところばかりを見せるのだ。穴道の兩側には幾層にも横穴があつて、これ皆基督教徒を葬つた墓の跡である。遺骨は凡て他に改葬せられたのであるが、なほ處々の穴には、朽

會音樂の守護者と稱へられた殉教婦人セシリアの墓には、横死の姿を彫んだ石像を安置して、燈明など掲げてあつた。

窖中と云ふには、聖書物語に因んだ圖、當時信徒の符牒であつた魚の形などの、極めて簡單なる壁畫が彫りに残り、又た粗雑な彫刻なども存してゐる。明日の命も知れぬ囚人が、牢屋の石壁に、文字繪畫を彫み付けて、不平を訴へ、無聊を慰めたやうに、羅馬の基督教徒は土中の暗處に悲惨痛苦の信仰生活を送りながらも、なほ美術的な本能心から、死者の靈を慰るため、また我が信仰を寓する爲めに此等の壁畫彫刻を作つたのである。

このカタコムと、デアチカン宮とを比較すると、基督教會史の経路が歴然として心眼に映ずるやうだ。土窖中にて、暴帝の毒手が、何時誰れの身に及ぶかも知れぬ危き境遇に在り、暗處に飢餓しながら、信仰を以て天光を仰いだ初代の基督教徒は單純熱誠であつた。然るに基督教が帝王の金殿に入り、又た宏壯なるデアチカンを興すやうになつてからは、其教義は、奸諂、暴戾、邪淫、放肆のあらゆる罪惡に漬されたのである。

このカタコムに近く、サン、セバスチノ寺院の地下にも一つのカタコムがある。予は又た車を驅つて之れへ往き、多くの僧侶や善男善女と共に、寺堂の中から、このカタコムの暗密を下

りて一見したが、これはサン、カリステほどに大きくは無い。

カラカラの浴室

予は悲惨なるカタコムから車を返して、此度は快樂に溺れた羅馬人が、淫逸嬉遊の日夜を送つたカラカラ浴室の廢趾へ來た。

暖國に住みたる羅馬人は、いたく湯浴を好んだものと見えて、それで人民の歡心を買ふことに腐心し、彼等を快樂に縛つて自由を忘れさせやうとした帝政時代には、血を流す演武場や、闘を解く劇場だけでは、まだ民心を醉はしむるに足らずとし、更に都城裡に多くの大浴室を興して、奢侈なる社交場としたのである。夙にオーガスタス帝の寵臣アグリッパも、「人民の快樂」てふタイタス帝も、暴帝カラカラも、前古無比の基督教徒大虐殺を敢てしたダイオクレシアン帝も、孰れも宏大壯巨なる浴室を造營したのであるが、此等は皆又た荒涼たる敗墟となりて、羅馬懐古の種ならざるは無い。殊にダイオクレシアンが、邊境屢ば蠻族の侵すところとなり、國歩頗る艱難なるに當りて、而も民力を靡して建築したる浴室は、其の規模の巨大な

るを以て他に優絶するの稱があつた。其跡はミケランゼロの改築を経て、今は寺院ともなり、學校ともなりて殘存してゐる。

カラカラ帝と云へば、流石のネロさへも後へに堂若たらざるを得無い程の、暴虐無道なる人鬼であつた。弟を殺す、猜疑心から二萬の臣下を屠る、又たアレキザンドリア府の民が不敬だとして、其住民は老幼男女の別無く刃に掛けた。されど彼も亦た民心を買はんが爲と、且つは我が淫樂をも娶かさんが爲、アツピア道を卜して結構壯麗なること前古に比無く、最も奢侈を極めた浴室を興した。其趾は既に荒廢し盡きて、纔に頽壁殘礎を留むるのみであるが、之を訪へば尙ほ其昔の偉觀を偲ばしむるに足つてゐる。

頽破せる巨壁の小山の如くに巍立せる間々に、昔は蒸風呂もあつた、湯舟もあつた、水浴池もあつた、流し場もあつた。其の巨大なりしことは一時に千六百人の浴客を容ることが出来たのである。又た食堂、遊戲室、競技場、書籍室、談話室等の設備もあつた。而して此等の跡には、彫牆畫壁の斷片、首も手も無き大理石像など散在し、又たモザイクの牀の殘んの面影が、折からの雨に洗はれて土中から露出してゐた。

羅馬の人民は基督教徒がコロシアンで、犠牲の碧血を流すを見て快とし、カタコムの穴中で



カラカラ浴室の跡

男傾城もゐたらう。立琴を彈ずる者があれば、さぐめさ笑ふ男女もゐる。衣寛く肌露はなる美

は信仰の徒が、國の無道墮落を呪うてゐたのも畏れず、又た塞北の野には犖犖なる蠻族が窺ひ寄せてゐるとも知らず、彼等は唯た飲めや食へやのエビキユリアン主義に沈淪し、ダラリ然たる寛袍を着た貴紳、花環を頭に飾れる麗人が、既に傾いた國礎の上で泰平の象を粧ほひつゝ、浴室に遊び、悠々閑々日を銷し夜を徹して、馳樂に耽つてゐたのである。角力も取れば、舞踏もする、競走もやる。そして疲れた軀に湯を浴びる、水を浴びる、美女孩童に手足を洗はせる、香油を塗せらる。かくて粉黛凝脂の粧を成して、食堂や談話室にだらりと横たはつて淫酒を飲み、淫樂を聞く。男は女に戯れる、女は男に戯れる、湯女もゐたらう、

女の肩先にキッスする音も聞える。薔薇サフランの芳花、波斯、亞刺比亞の名香は四壁に蒸す。戀も、嫉妬も、詐欺も、隠謀も其間に胚胎し、又た成果するのであつた。實にカラカラの浴室は羅馬の歌吹海であつた、現世の喜見城であつた。然るに漁陽の鼙鼓一たび地を動して、ヴァンダルの夷族、潮の如くに侵し來るや、見よ浴室も演武場も、唯だ荒涼たる頽垣殘礎を存するのみとなり、羅馬人の快樂は盡き、羅馬の帝國は亡はれた。

遺跡とこころ

予は又た車を驅つて、羅馬七丘の一なるカピトリシの今の殿舎に、ミケランゼロが階段を登り、羅馬最後の保民官リエンジの榮枯を偲び、又た其の美術館にては、希臘、羅馬の哲人及び帝王の半身像や、古へよりの名作なる『カピトルのヴァイナス女神』の彫刻像などを一覽したる後、更にヴァイトリーの寺に赴いて、ミケランゼロが傑作の一なるモーゼを見た。

ドラジャン帝の公堂の廢跡を過ぎた。二三尺ばかりの花崗石柱の斷片が數列を成して立つてゐるばかり、其側に屹立する大圓柱塔こそは、此帝の戰勝記念碑で、凡て大理石を以て築かれ

て、其面には螺旋狀に戰況の浮彫がしてある。昔は頂上にトラジャン帝の像を立たせたものだが、今では使徒ペテロの銅像と代つてゐる。羅馬には此他に幾多の圓柱塔の存在せるものありと雖も、基督教は其の頂上の諸帝像を廢して、無趣味なる使徒ペテロの像を立つるところとなした。基督教は如斯くにして、異教時代の古羅馬の遺跡を悉く併呑したのである。

オーガスタス帝の建設したる聖賢廟バンテオンは、羅馬の殿堂中、唯一つ古への形態を完全に保存するもので、宏大なる圓堂は側面に窓無く、天井に大なる圓穴を明けて、日光を受けてゐるから、堂内は一しほ莊嚴である。然るに内部の裝飾や諸神像は既に破壊せられて、これ亦た中世紀の頃よりして、基督教の一寺院となり了つた。されどバンテオンは、今猶ほ王國の名士を葬る聖廟で、畫聖ラファエルの墓もある。

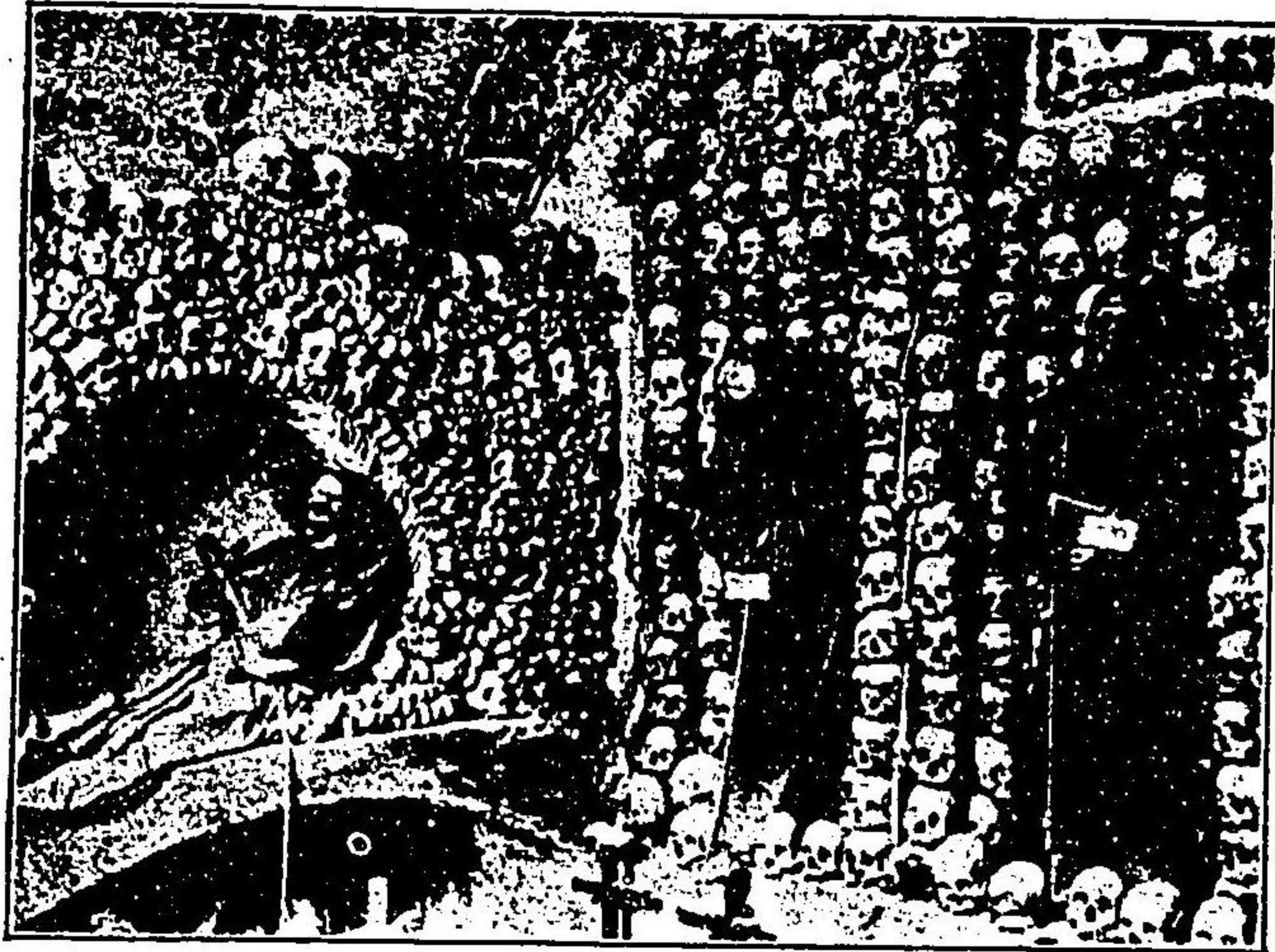
タイバーの濁流に臨み、夥多の大理石像の行列せるアンゼロ橋を控へて、サン、アンゼロ城が、既に毀たれたるながらにも、なほ巍然たる圓塔を峙てゐる。此の城はハドリアン帝が己れの墳墓として造營し、爾來諸帝の塋域であつたが、朋黨の亂には城砦となり、又た法皇の宮殿ともあつたのである。予は案内者に導かれて、隧道を成せる道を行いた。案内者の説明が面白い、お客は予一人であつても仔細は無い、彼は『レデイス、エンド、セントルメン！』これ

が昔の牢屋！』『レデース、エンド、ゼントルメンよ！これは倉庫！』と、度毎に『紳士淑女諸君』を繰返したのは、頗る愛嬌であつた。

『レデース、エンド、ゼントルメン！これが法皇の居室』と云ふ廣間の四壁には、『キエビツドとサイケ』の戀物語が、而も裸體で描かれてある。場所柄不都合千萬、法皇が居たら、この状は何ぞと叱つてやりたかつた程だが、扱て如何に聖教の教主だとして枯木寒巖にも非らず、否、往時羅馬の法皇は斯るものが大の御好きであつたのだと承はつてゐる！

十六世紀の頃まで、猶太人を押籠めて苛虐を加へたゲットーの、その忌むべき跡は既に拭はれたが、これに近く、大シイザーが礎石を置いたマーセラス劇場の荒墟がある。下はタイバーの流す泥砂に埋れ、上は風霜に碎けて、辛うじて残す岩の如き頹壁の間には、穢げな小店が並んでゐる。昔の歌舞場裡は今や貧民窟である。羅馬人は悲劇なら演武場で流血淋漓、阿鼻叫喚の活歴を見やうぞ、劇場は喜劇に限るものとしてゐたのであるが、曾て悲劇を演じたことの無きマーセラス劇場も、世の轉變、國の滅亡てふ大慘劇の舞臺となつて、遂に荒敗せざるを得なかつた。

タイバー河畔にヴェスタの宮趾と稱せられてゐる小殿堂がある。これも今は荒れ果たる堂内



堂骨骸の寺ニチアカ

たものである。往時は信徒の遺言で、死後の骸骨をこのカプチニの寺に納めることの習慣があ

に、聖母の畫像が佗しく祭られてある。

凡そ羅馬で最も物凄くものは、カプチニ寺の骸骨堂でかなあらう。寺の本堂の下の密中が四つ程の祠堂に仕切られて、孰れも人間の骨で築かれてゐる、無残なる人骨を祠堂の裝飾に用ゐたものがある。三方の壁には髑髏、手足の骨、肋骨等を無數に積み重ね、又た完全な骸骨に墨染の法衣を着せて立たせたり、骨造りの穴の中に寝かせなどしてある。天井には又た白骨や肋骨などを配つて様様の紋様飾り付けをなし、頂邊からは骸骨が俯けに見下してゐるなど、人骨の利用法も爰に至りては慘亦た極れりである。この骸骨祠堂は生蕃の遺跡では無うて、基督教徒の遺骨を斯様に集め飾つ

つたのだが、後には山師坊主共が、無縁墓の骨まで掘り出して来て、今のやうに物懐く飾り付け、つまり觀世物としたのであるとは沙汰の限りだ。

ボルゲーゼ離宮はポポロ門外にあり、ピンチ公園と相對してゐる。此處はナポレオン大帝の皇妹ボルゲーゼの住居せし跡なるが、其離宮の今は美術館となれるに、此のボルゲーゼ姫をモデルとしたる「ヴィナス」の大理想像がある。またチンアンが若き頃の名作で、希臘悲劇を畫材としたる「ヴィナス」がある。廣々庭中には、獨逸現皇帝から羅馬市民に寄贈になつたゲテの大理想像が、あたりを睥睨してゐる。

終りに羅馬の都の一名物なる噴泉の事を書き添へて置かねばなるまい。羅馬人は道普請が上手であつたごとく、又た水道布設にも長じてゐた。往古既にカンパナに高架水道を渡して、パラチン丘上まで水を引いたことである。今も羅馬の市中には、巨大なる噴泉が處々にありて、他の都會には見受けられぬ壯觀を成してゐる。タルタルゲの噴泉、ツリトネの噴泉、モーゼの噴泉、海王の噴泉、トレヴィの噴泉など、孰れも結構雄大にして、幾多の金石像を飾つた間から、清水が渾々として流れ出てゐる。街區の間の狭い區域が、場處に不似合な大噴泉で塞がれてゐるところもある。此等の噴泉は都市の裝飾でもあるが、第一は昔より市民に清水を供給

するのを目的した設備である。又た市中を歩くと、折々家の壁に附けた獅子の口から、絶えず一條の水を吐いてゐるのを、貧女が壺など下げて汲んでゐるのを見受けたことがある。

ボンベイの大雷雨

一日にて成らざりし羅馬の見物を三日で切上げて、ネーブルスへ来たのは、夜の十二時過、停車場でベルツェー、ホテルの客引を捜がすと、やつて来たのは、ホテルの徽章も着けてゐない男だ、何だか怪しい。それにホテルの馬車が来てゐないからとて、辻馬車を雇うて来る、客引は馭者と相乗て予を連れて行く。由來人氣が悪いと聞いてゐたネーブルスの真夜中道、人通りの無い町筋の、ジョボく降る雨の中を往けども、車は駐らぬ。元よりホテルの在處を知らぬのだから、扱ては何處へ連れて往かる、ことかと、心元無さの限りが三十分餘にも及ぶ、それが甚だ長いやうに感じつゝ、遂に山手まで登つて来て、先づ無事にホテルへ着いた。門は既に締つてゐたので、客引がコック叩く。すると一寸法師のやうな男が、寝むさうな目をこすりながら戸を開けて予を寢室へ案内した。

夜が明けると、我が寢室の窓は、眼下にネーブルス灣を臨んで、眺望佳美の形勝を占めてゐるのであつたが、生憎今日も雨空だ、朝からポツ／＼降り出して、ヴィスヴィアスの火山も、カプリの島も曇つてゐた。

今日はボンベイの廢墟へ見物へ往きたいものだと言つたと、番頭は此雨だから、明日にしたらと止めたが、此しきの雨を厭つてはゐられぬ。それでは案内者を雇うてやらうと云つてゐるところへ、表に一人の老人が来た。すると番頭が、此人は官許の案内者で、又ホテルの召使共の英語教師であるのだ、之れを案内者にお連れなさいと云つた。名はフェデリコと云ふのであつた。

フェデリコ老人に連れられて、電車で停車場へ往つたが、雨はいよいよ烈しく降つて来た。列車に乗ると、同室へ一人風采の堂々たる紳士が乗つた。ボンベイまでは十五哩、一時間の路をネーブルス灣に沿うて進む。村々も今日の雨だから、以太利名物のマカロニ麵を干してゐない。路傍の火山岩を鑿割つて搬び出してゐる、これはネーブルス市の道路の鋪石にするもので、フェデリコは曰く、ヴィスヴィアスの山は、時々灰を降らし、ラバを流して市街村落を埋めるだけで、礫な山では無いが、唯だ一つネーブルスに多量の石材を以てするの利益があると。

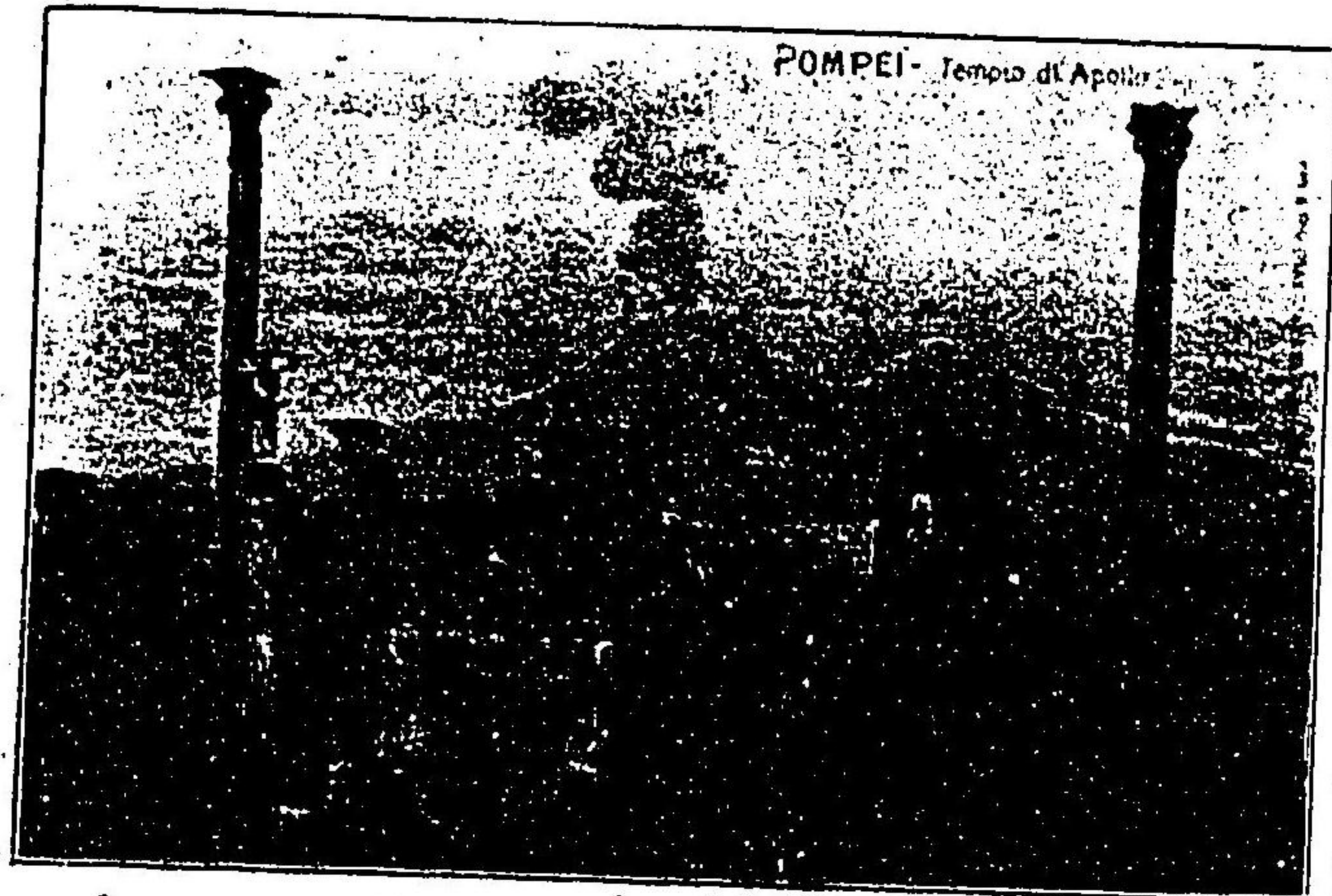
ボンベイと共に埋没したるヘルキエラニアムの上に建ちたるポルチチの市を過ぎた。ヘルキエラニアムは劇場其他の少しの部分が發掘せられてゐるばかりである。グレコは、今の三代目の町である、即ち灰に埋れた町の上に建てたものが、また灰に埋れて、其上に現今の家屋が出来たのである。人間は妙なもので、地震と火山との暴威に度々荒されても、故郷尙ほ忘じ難くして、懲りもせずに家を建て町を造るのだ。ヴィスヴィアスが幾度火を噴き灰を降らしても、其の山麓から住民を全く驅逐することが出来ぬのである。

ボンベイ停車場に着くと、かの同室の紳士も降りて、予等の後に尾いて来た。

ボンベイは其昔、秀麗なるヴィスヴィアスの山麓に建てられ、明媚なるネーブルス灣に臨んで、『日光和煦なる以太利』の國にても、就中、美しき都、樂しき地であつたので、羅馬より、希臘より、埃及より、貴人美女が此都にエリシアンの快樂を求めて移り住みつゝ、人口は二三十萬にも達し、當時は強大なる羅馬帝國の別荘なのであつた。然るに紀元六十三年に大地震が起つて、都の大半は破壊せられたのに、住民は更に大なる災厄のやがて落ち来るべしとも知らねば、昔に倍して美麗なる都市の再建に従事して、而して其の未だ完成せざりし紀元七十九年の八月二十四日と云ふに、是まで熄火山であつたヴィスヴィアスが俄然大破裂をなし、火を噴き

石を流して、ポンペイを埋むること三四尺、住民多くは逃れ去つた。災變の静まつた後、生存者は灰を掘り返して、目ぼしき物品器具を運び去つて他に移つたのである。而して其後數回の噴火の爲に、灰の上に灰が積りて、榮華の市は遂に二十餘尺の地中に葬られ了り、爾來千七百年の間、人は舊都の存在せしことだに知らざりしに、偶々此地に井戸を掘らうとしたものが、地中尙ほ死せる都の在るを發見して、それより遂に發掘の功を累ねて、ポンペイは再び地上に現出するに至り、今尙ほ盛んに發掘をつゞけられてゐる。

雨いよく頻りなる中に、廢墟の入口へ往くとニリーラの見物料を徴收せられた。以前にはこれだけで案内者を一人づつ付けてくれたものであるが、今日では上もずるゝなつて、案内者を呉れぬ。門側の溜屋には案内者が多くゐて、フエデリコと言葉を交はす、「旨くやつてゐらア」とても云つたのであらう。然るに彼の紳士は案内者を雇はずと、只だ／＼予等の後に尾いてアーチになつたマリナ門に入る。予等が博物館へはいると、彼れもはいつた。ポンペイ遺品の大部分はネーブルス博物館に移されてゐるのであるが、此の博物館内にも、多少の遺物が蒐集してあり、千八百三十年前の麵包の黒く化石したもの、門の扉、商家の窓などの型がある。又た變死者の死體もある。これ等は灰で自然に出來た型の中へ、灰坭を流し込んで造つたもの



アポロ神殿の跡

て化石いな化灰では無い。指輪を飲めた女

娘中(にんちゆう)の女もあり、また悶死(もんじ)した犬も一頭ある。

雨中(うら)だから圖面(ずめん)を廣げて見(み)ることもならねば、只だフエデリコが駆け足(かけあし)で歩きながら、此處(こゝ)は、ポンペイの守護神(しゆごじん)ヴェイナスの廟(みや)であつた、これは市場(いちば)兼(けん)法庭(はふてい)のバリシカであつた、これはアポロの社(やしろ)であつたと説明(せつめい)する斷礎(だんそ)類(るい)垣(がき)の間(ま)を通(とほ)り、公堂(こうだう)の跡(あと)まで來(き)て、祠堂(しだう)の殘柱(ざんちゆう)や石像(せきざう)の破片(はへん)など見(み)てゐる中に、いよく雨(あめ)は盛(も)んに降(ふ)つて來(き)たので、頽壁(たいへき)の陰(かげ)に避(か)け、依然(いぜん)として附隨(ふずい)して來(き)る紳士(しんし)も亦(また)立ち止(と)つた。彼は手(て)が大枚(だいまい)十(じゅう)リを投(な)げて雇(やと)つたフエデリコの案内(あんない)と説明(せつめい)とを無(む)代(だい)で横取(よことり)りしやうと云(い)ふ横着(わうちやく)者(もの)だ。予等(よら)が止(と)まれば、止(と)まる、驅(か)け出(だ)せば、又(また)驅(か)ける。フエデリコは不平(ふへい)をこぼして、犬(いぬ)のやうな奴(やつ)だと呟(つぶや)く。予(よ)も不(ふ)快(かい)だから、彼(かれ)が何處(どこ)までも尾(お)いて

来るのなら、フェデリコよ、彼れから案内料を請求しろと教唆した。

市街には人道もあれば、車道には一段低く火山石を舗き詰め、角々には、人道の高さに飛石を置いてある。車道には荷車の轍の跡が左右二條に深く窪んでゐる。これを見ても、このボンベイが埋没するまでには久しき年月を経て、而も繁華の地なりしことが察せられる。

人家は多く小石や煉瓦をセメントで固めた上を、色壁で塗つた一階造りて、大理石は殿堂邸第などの外には使用せられてゐない。瓦葺の屋根のなほ存留せるものもある。町角には日本風に石で四角に圍うた共同井戸があり、其の一端には獅子の首など彫んだ石の水栓がある。井側の石は、其昔、甕を携へた町の女が水を汲みに來ては、井端會議を開いて、甕を置き腰うちがけるを常としたためか、磨り減らされてゐる。井戸と云つても、掘つたもので無く、水道井戸で、ボンベイの水道は頗る完備したものであつたらしく、その水道鐵管の錆び腐れたのが、家の前後にとろろく残つてゐる。麵麩屋もあれば、酒屋の跡と覺しきには甕が残つてゐる。紺屋式に壺を埋け並べたのは油屋であつたとの事だ。また商家と並んで娼家がある。其の屋前の鋪石の上に巨大なる物を浮彫にしたるもあれば、軒端に之が突起してゐるもありて、奇怪奇抜なる看板だ。これでは女郎屋で無うて、男郎屋であつたやうにも思はれる。ボンベイは道德地

に塗れ、淫風横行したところであつたから、市民はかゝるものを別に怪しみもしなかつたらしい。况んや富人の家の居室寢室などで、「男子のみ入場を許す」とて、番人が鍵と持つてゐて明けて見せる處には、實にいかゞはしき壁畫などが残つてゐる。かゝる風儀問題に關するものも、多くは、ネーブルス博物館の秘密室に納めてあるのだが、なほ其の殘留せられたるものを見て、ボンベイの類俗の如何に甚だしかりしかを察せらるゝのみならず、若し夫れ天變地異にも神慮の存するものなりとせば、此の虛榮墮落の都は、かの猶太のソドム、ゴモラの淫市が、神の怒り、觸れて覆没し、其跡の恐るべき死海となつたとくに、等しく神怒を促がして、サイスアイアスの灰に埋められたるものであると考へられる。されど帝國と其末路を共にして破壊せられたる羅馬の都は、遂に往昔の偉を留むること能はざるものとなつたのは異り、榮華般盛を極むる時に、一朝灰石の下に葬られ、而も十數世紀の久しき間、風霜や時世の有爲轉變より免れて、能く舊型を保存せられてゐた此のボンベイの市が、突如として今日の地上に再現して見ると、これこそ實にホーレスやシセロの昔の、羅馬人の生活状態を明示するものとなつてゐるのだ。且は又た類俗淫風の市の遂に永存する能はざることを、之を見て鑑とせよとの至大なる教訓を人類に垂るゝ實例となつてゐる。吁、一旦此市を罪して之を灰石の下に葬りなが



レギナ通り

どつた人形の姿などが壁に描かれて見えるのは、市尹選挙運動の掲示であつたさうで、また二千年前にも人間は樂書を好んだものと見えて、其痕もあるのだ。

らも、而も尙ほ之を天下後世の爲に保存したるヴィ
スヴィアスの山の業と、其の山靈を役したる神慮と
は、實に不可思議なりと云はねばならぬ！
フェデリコは繰返し、「君は今二千年の昔に返
つてゐると思へ」と云ひつゝ、荒涼たる雨中の廢
跡を案内する。殿堂を見せる、邸宅を見せる。鎖さ
れたる家の門には制服の守衛が鍵を持つてゐて明け
てくれる、さやうな家には必ず何か如何がほしいも
の、即ち「男子のみ許す」ものがある。そして守衛
は十文ばかりの心附を無論貰ふ積てゐる。

の跡の見えるのは、市尹選挙運動の掲示であつたさうで、また二千年前にも人間は樂書を好んだものと見えて、其痕もあるのだ。

雨師雲伯の勢ひ愈々猛烈となつて廢墟を襲ひ來り、剩さへ遂には雷神殿々として轟き渡り、
ボンベイは大雷雨の光景となり、空は凄しく、道路はやがて河水を成して滔々の流と變じた。
美しき二つの峯の火山は雲に鎖されて素より見えぬ。而も此の荒涼たる廢墟に在るものは、
予と案内者と、彼の犬の如き紳士と、加ふるに數人の守衛の散在するあるのみ、寂寞の状いは
ん方無し。先きに停車場へは三四人の米國婦人らしきが下車したが、此雨に恐れて引返したら
しく、遂に其姿を見せ無かつた。フェデリコは、サアこれだから今日のやうな日に來るもので
無いと止めたのだ、君も後悔するだらうと云ふから、負惜みに、「何サ、大雷雨中に二千年前の
廢墟を見ることが、頗る痛快だ、かやうな好機會が又たとあらうか」とほざいた。

とは云ふものゝ浴室の廻廊で、雲と雨とを見て、少し小降になつてくれれば可いにと祈つた
が、ドウして、光景は益々悪くなるばかり。雨待ちの退屈凌ぎにフェデリコはいろく話す、
以太利も數日前から雨季にかつたので、今日からは愈々本物になつて來たわい。米國人など
は「日光の以太利」だと稱して、雨の多い冬にのみネーブルスなどへ來ると、以太利でも雨が

降るとて驚く。いかに伊太利だとして雨が降ら無いもの乎、年中四時「日光の以太利」だと思ふのが莫迦だ。それで此頃は漸く雨の降らぬ夏季にも来遊し、真に「日光の以太利」を見物するものが殖えて来て、夏ても我等案内者の商賈があるやうになつたと云つた。

彼の紳士は四五間離れたところをブラ／＼しながら、同じく雨待をするのに、決して予等に近寄つては来ぬ、一言も話をしかけるで無い。フエデリコが態々寄つて言葉を掛けても一向に口を利かぬから、無論以太利人では無し、英語も、獨逸語も、佛語も分らぬ、露國人でもあらうか、變な奴だと云ふ。しかし彼はウカと口を利いたら、遂には案内料の幾分を出さねばならぬかと思つて、態と黙つてゐたのであらう。予等はいくら雨待をしてゐても仕方が無いから、フエデリコを促して豪雨の中、河流の街道を駆け出すと、彼の紳士も亦た駆け出した。

我等がリットン卿の『ボンベイの末日』で讀んだ、好漢グローカス、俠士サラスト等の名を命じた家もあれば、知事パンサの邸宅と名づけたるは、市中の最も宏大なる結構だ。吝嗇漢チオメードの娘で、戀の故にグローカスを毒殺せんとしたジュリアの家からは、十八人の屍骸が出て、手に／＼食糧を携へてゐたさうだ。チオメードは鍵を持ち、一人の奴隸は金銀の囊を提げたまゝで一處に死んでゐたさうだ。扱も又た美人イオネや、可憐なる盲女ニデア等の家は

何處なりしか？ 埃及人の悪僧アルバチエスの邸宅は何處なりしぞ？ 市門の一からは、武裝した番兵が、直立不動の姿勢で骸骨になつて掘出されたさうだ。敗徳虚榮のボンベイにも、尙ほ羅馬兵士の武勇と嚴格な訓練とは残つてゐたのだ、彼は大變災の中にも、命令無きが故に、歩哨の地位を去らずして埋没したのである。

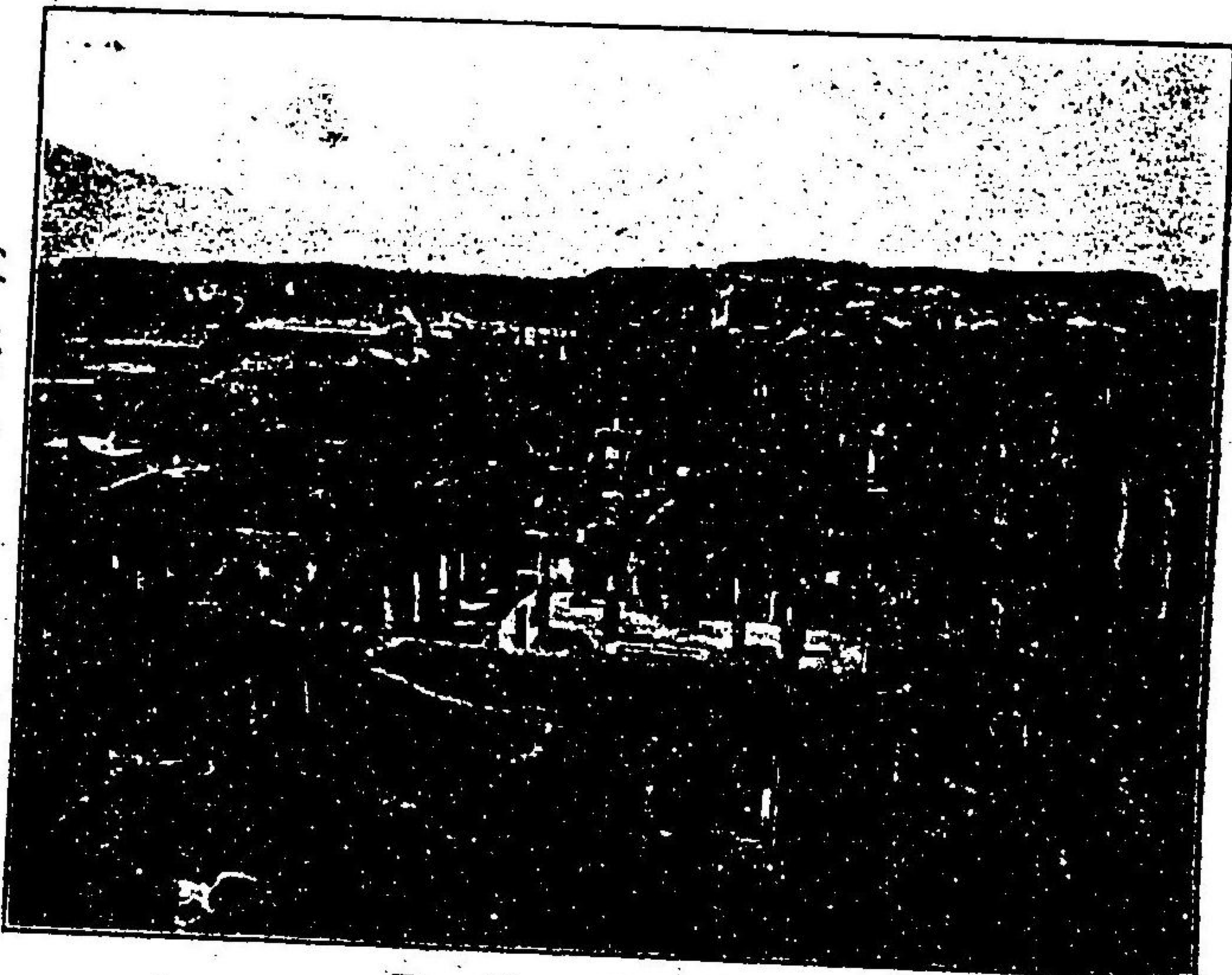
『骸骨の家』には、白く晒れたる骸骨が横たはつてゐる。奢侈と淫慾とを極めたヴェネチーの如きは、廣き中庭に噴水池あり、大理石像あり、之を圍める廻廊に接して、神の祭壇あり、祖先の廟あり、其の又た奥が寢室、居室で、戀の使キユビッドを假りて、ボンベイ人の遊戯、生業を現した美しい壁畫もあれば、また女人禁制の見せ物もある。守衛は男とさへ見れば直ちに戸を開けてくれて、若干の心附に有附く。その秘畫には猛烈にして又た滑稽なるものもある。此のヴェネチーの家の構造が、やがてボンベイ富人の家造りて、近頃發掘せられたと云ふ何某の家なども、頗る完全な形態を存してゐる。其の中庭には今日の植物が植ゑ込込である。凡そ斯る富人の家の裝飾、石像、壁畫などは、殆んど一として健全なる思想を代表せるものが無い。醜狼の極に陥らざるまでも、凡そ好んで彫刻描寫したるものが、戀の神ヴェイナスなり、戀物語のサイケなり、又た酒神バッカスの祭の無禮講に、薄き衣から肌の見え透いた姿で踊り狂ふ美

女である。公堂にさへ、當時ボンベイに多く住みて、女娼にして男娼を兼ねたと云ふ兩性の美人像を、神體に擬して飾り附けたものである。今は既に色も褪せ形も磨滅してゐるが、往時、黒地の壁に、赤、青、黄、白等の鮮かな色彩で、かゝるものを描いて楽しんで人間の心術操の程が思ひやられる。我れちもしろて後世に残さうなどと、更に考へたもので無いのが、二千年の後まで歴々と保存されて、ボンベイ敗徳の證據に取られるとは、實に恐ろしいものだ。ボンベイの昔を詩的に美化して云はば、ヴィナス女神に愛てられたる戀の都であつたが、直筆すれば、淫祠アイシスを崇めたる淫亂の市であつたのだ。

一旦は少しく雷鳴も静まり、雨も減つてゐたのが、又もや轟然沛然とやつて來たので、予等は大劇場の趾の見物席の屋根下に隠れた。大劇場に接して小劇場がある。大なるには四五千の坐あり、小なるも二三千を容れたと云ひ、舞臺も見物席も既に荒敗し盡して、雑草のみ生ひ繁つた上を、雨が烈しく叩いてゐるのであるが、されど人口二三萬の小都にして、これ程の劇場があつたとすれば、これも亦たボンベイ人が快樂の民なりしことを語るのだ。予等が此處で又た雨待ちをなし、フェデリコと煙草など飲んで雑談してゐると、彼の紳士も例によつて二三間離れて煙草を吹かしてゐた。フェデリコは彼れを痛罵する、又た己が經歷を自慢する。彼れは

英佛獨はどれても話すのであるさうだ。先年李鴻章が來遊した時、彼れが案内して此のボンベイを見せた。そして彼の偉人から筆蹟を貰つてゐたが、五フランで人に賣つて仕舞つたと云ふから、それは惜しいことをしたものだ、今まで持つてゐたら、モット價值があるのだと云へば、サウか、それは残念だと悔んでゐた。

日が暮れかけたから、雨でも雷でもソウソウは待つてゐられぬので、又た駆け出す、紳士も後を追うて駆け出し、悪僧アルパチエス等の奉仕したアイシス淫祠まで往つた。グロカスが獅子の餌とならんとした刹那に、俠士サラストが、盲女ニデアの密告により、アルパチエスの家に幽せられたる盲女と、墮落坊主



景 全 の 都 慶

墮落坊主

のカレナスとを奪ひ來りて、グローカスを救ひ、アルバチエスの罪惡を發いた其時しも、グイ
スヴィアス俄に火を噴き灰を降らして、歌舞囃樂の地、忽ち阿鼻叫喚の焦熱地獄と變じた
リットンが凄しき筆で、其光景を描きたる演武場は、市から少し離れたところにあるので、此
の天氣には逆も見に往くことが出来ないであつた。

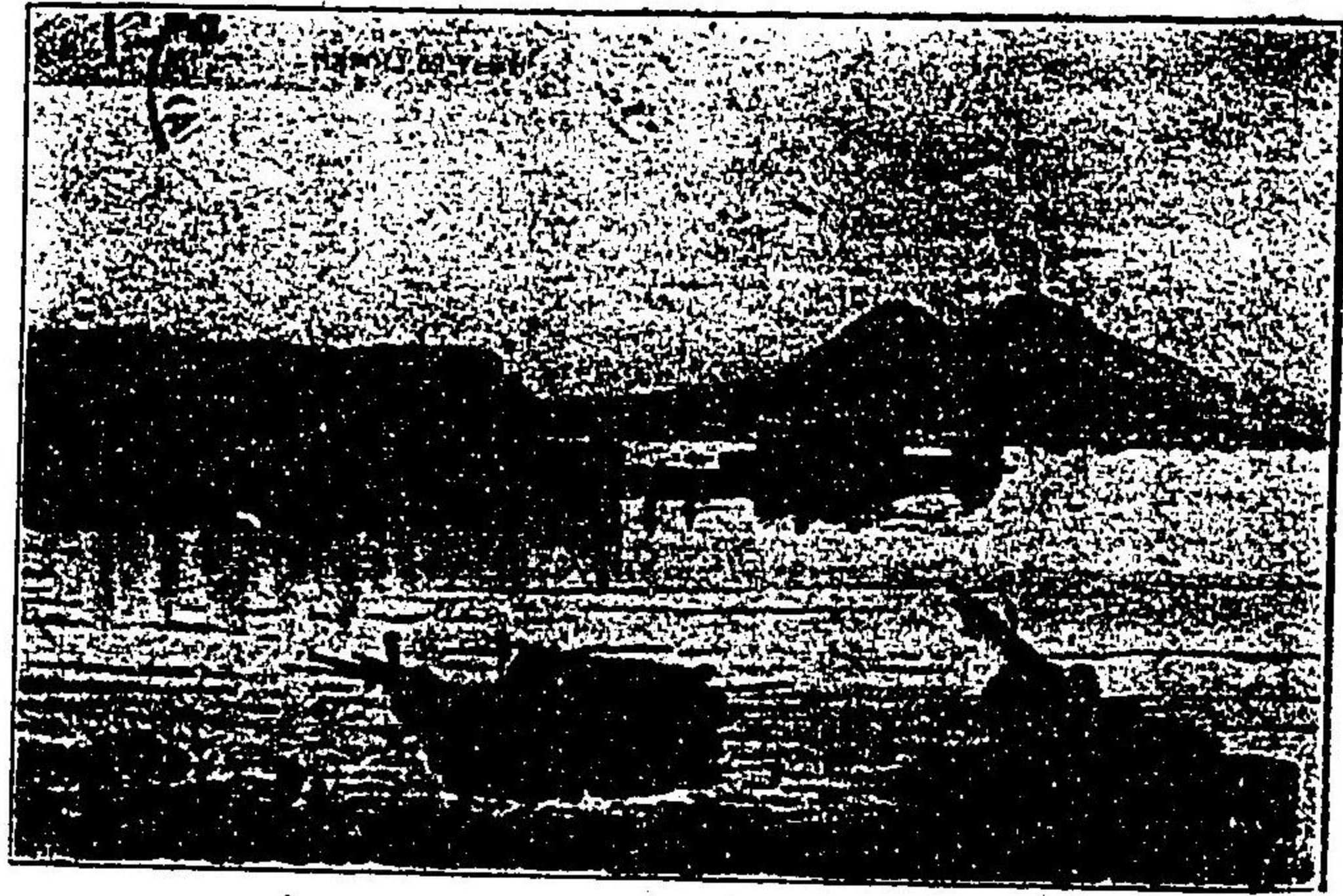
予等は雨を犯して廢都の町々を走り、電車の停留場へ出たが、今日の雷雨で停電となつてゐ
たので、再び汽車の停車場へ引返す。紳士も又た尾いて來て、予等が料理屋へ入ると、彼等は
いつて陰の方の席に潜んだが、予がフェデリコ老人と一杯呑んでゐる間に、姿が見えなくなつ
て仕舞つた。彼は終に予等に對して一言の挨拶もしなかつた。予もフェデリコも、帽子から、
衣服から、靴まで、ひた濡れに濡れて、河へ落ちたやうに濡れた。それで數杯のブランドーに
風を引かぬ要心をなし、數皿の料理に飢えた腹を満たした。

停車場前には、ボンベイ土産の店が並んでゐる、繪葉書、繪帖は勿論の事、古器物の模造品
など賣る。發掘品だとして、灰の附いた家具彫像などもあつて、目が飛び出す程の高値を吹いて
ゐるが、これ等が此廢墟から出た眞物だと思つて、高い金を出すものが若しも有りとするれば、
それは米國來の成上り者ぐらゐであらう。

ネーブルス街上

二十一日の日が窓に明けると、意外にも朝日が刺し込んで來た。戸を開けば、碧深きネー
ブルス灣は、カプリの島や、ソレントまで霧晴れに見え渡された。左の方にはグイスヴィアス
の二峯が、其の一峯からスウと煙を噴いてゐた。麓の町々村々が遙けく連り、右には眼下に近
きオウオの古城が、海上奇巖の上に峙つてゐる。水面には帆を揚げた漁り舟もある。英吉利は
た亞米利加から、日照らす南以太利の冬を慕うて來遊する客人を乗せた汽船が、波を蹴り煙を
吐いて前進して來る、まことに畫のやうな景色だ。

今朝も門前にフェデリコが來てゐて、これから市中を案内しやうかと云つたが、又た十フラ
ン取られては容易で無いから、先きの船で米國の新客が着いたやうだ、此のホタルにも泊つた
ぞ、この好天氣に誰か捕まへてボンベイへ往くが好からう、予は獨りて市中をブラムして見
やうとて追拂つた。フェデリコはグイスヴィアスを指して、先年の大噴火以來、山からあれ
ほどの煙が立つのは今日がはじめてだと云つた。



ネーブルス頭

ホテルの前に電車が通うてゐる。而も單線であるので、此處が交叉點なのだ。車掌や運轉手が、行違ひの電車を待合はす間、行商人から果物など買つて食つてゐるのは呑氣なものだ。予は此の電車を下町まで出かけた。

ネーブルスは風光明媚の地であるが、これに住む人間には、野鄙なる以太利根性が、公共心など云ふ安全辯を叩き破つて自由に漏洩してゐるのだ。ベテカーの案内書には、筆を極めて此市の人氣を罵つてゐる、ネーブルスは歐洲第一の騒々しき都會、住民は公共心などに全く無頓着で、無作法を極めてゐる、馬車屋は客を乗せてゐてから、不當な賃金を擡ることが通り者になつてゐる、朝から晩まで市中の野

菜賣や、果物賣が大きな聲をする、土地不案内な旅人と見たら、物賣が取巻いて押賣をする、

案内者が付き纏ふ、馬車の馭者は長い鞭をバチン／＼と鋭い音をさせる、大通では新聞賣子が吹鳴る、夜になると物騒な奴がカンテラを提げて、シガターの吸端を拾つてゐる、小路では道中に屋臺店を出して煮賣をしてゐるなど、不快な光景を容赦なく並べ立てゝゐるが、實に其のとほりなのだ。

以太利と云へば必ず乞食を聯想し、殊にネーブルス乞食は、押が強く、闘々しくて、旅人とあらば、女でも容赦せず、胸元に取り付いてまで、いくらか呉れと強談すると聞いてゐるが、昨年以太利政府は大英斷を以て、此の不潔なる乞食の群を一掃したので、予は以太利は何處へ往つてもツイを乞食に製はれず、大いに其の政府を徳としたのである。併し押なべて以太利人なるもの、女はさうでも無く、ミランなどは美人國だと思つたが、男は何だか物騒な忍な面付をしてゐる。ホテルの主婦さんや娘が予を見て、あなたはネーブルス人に似てゐると云つたから、サウカ、それは難有い、では以太利美人を女房にでもして、ネーブルスに住まはうかなど、御世辭振に返辭したのであるが、予は内心何で以太利人に似てゐると云はれて嬉しからう、予は以太利人を尊敬し無いたのである。電車内などで、堂々たる紳士が自分に話しかけられたのでも無いにせよ、他人の話を買つて、あの鋭い耳觸りな以太利語で、両手や首をシキリと

振つて、些細な事を浴々と辯ずる、それを又た向側の紳士が受返事をしてペラ／＼喋り、車内これが爲に騒々たることなどもある。以太利人は饒舌の民で、又た佛國人よりも一層手振身振を使ふ人間であるのだ。

數頭の山羊を連れだ女が、御用とあらば乳を絞つて賣る。驢馬に曳かせた荷車に、野菜や果物を満載して呼び立てゝゐる。甜瓜程な大きさの蕃椒が黄に青に赤に實に美しい、これは煮て食ふものであるさうな。石榴は大きくて甘さうだ。百目柿の色の好いものもある。外國で柿を見やうとは意外、食指頓に動いたが、體裁を重んじて手を出さ無かつた。後でホテルの主婦さんに柿の話をしたら、あれは近年に出来始めたものだが、澁くて食へぬ、ネーブルスでは最下等の果物だと云ふから、予は柿は日本の名果だ、以太利人は食ひ方を知らぬのだとて、柿の澁拔法など講釋して聞かせた。

頭髮皮膚の色の日本人に似たる以太利人が麵類を好むことは、日本人よりも甚だしいものである。以太利へ來ると、宿屋でも汽車でも、晝夕の食事には必ず一皿の温饅、否、マカロニ麵が出る。乾酪の粉末や、番茄の汁など掛けて食はす。そして貧民の主食はマカロニであり、而もネーブルス附近が是れの名産地であつて、市中の汚い屋臺店や露店でまで賣つてゐる、汚い

男女が手掴みて食つてゐるのを見かけた。

以太利は石炭に乏しい國だから、多く木炭を用ゐる。フロレンスでも、羅馬でも、このネーブルスでも炭屋があり、町の角などで、ぼろ／＼の婆さんが、手の附いた小火鉢を振廻して、炭火を起してゐるのを見たことがある。又た葡萄酒——これは以太利人の常用で、獨乙人がビールを飲むごとくに葡萄酒を飲み、三度の食事に必ず飲む。百姓は鉄の先に徳利を引かけて野良へ出る、市中では木通莖で巻いた大小の徳利を車に積んで、牛乳を配達するが如くに葡萄酒を配達してゐる、これは以太利の何處とも同じ風俗で、而して南へ來る程、葡萄酒が能く賣り、ネーブルス灣のカプリ島の如きは、葡萄酒の名産地であるのだ。

物賣の聲、取者の鞭音に威かされつゝ、この騒がしき市を歩み、詩聖ダンテの像の立てるあたりへ來た。停つた電車の車掌が車臺で辨當を食つてゐた。ガレリアの勸工場で、廻廊のゴタゴタした露店の間には、代書人が机を置いて手紙の代書をしてゐた。このガレリアの向が即ちネーブルス博物館である。

ネーブルス博物館

ネーブルス博物館は、以太利はるか、歐洲にて最も有数なるもの、一である。而もヘルキ
ユラニアム、ボンベイ其他を埋めた灰の中から發掘したる器具、裝飾品、彫刻像などを蒐集し
てゐるので、必ずや一見すべき價値のあるものだ。

ボンベイ及びヘルキユラニアムより發掘したる石像壁畫などを見て廻る。黒地に極彩色の壁
畫には無禮講に出る霞の衣、雪の肌の美人の舞姿を一つ宛畫いたのが多く残り、畫師が又た
これを模寫してゐる。客人と見るとコソ／＼畫架から寫畫を出して、一枚五フランに自けて置
くが買はぬかと、此の室でも彼の室でも、公設博物館内で商賣をしてゐる。番人は心附の欲し
さうな顔をして、此處へ來て見る、面白いものがある、これはボンベイに在つた産科器械だと
か、これは何だとか引廻す。銅貨一枚十文(四錢程)をソット呉れると、「グラッシー！」と禮
を云ふ。然るに館内の何の戸にも御丁寧に、英、佛、獨、以の四ヶ國語を以て、「觀覽人は番
人に金錢を與ふべからず」と嚴重に貼出してあるのだが、觀覽人は與ふべからずでも、番人は



踊スカツバの畫像イベンボ

貫つて差支へ無いものと見えて、何の奴も十文か二十文の欲しいばかりに、しきりと近附いて
案内をしたがる、與ふれば拒みもせず却つて禮と云ふ。倫敦を出る時友人から、以太利へ往
つたら、諸方の見
物には必ず銅貨を
澤山に用意して往
けと注意されたの
だが、成程！ボ
ンベイ既に然り、
心附禁制掲示の博
物館ですら、この
銅貨の用意が肝腎
なのであつた。
秘密室がある。此處には心附禁制の掲示と共に、婦人入場禁止の掲示がある。併し男が近づ
くと、これも銅貨の欲しさうな顔の番人が、はいつて見よとて招く、錠を開けて呉れる、説明

する。室内に陳列せられたるもの、一としてポンペイの淫風類俗の證據物件たらざるものは無い。壁畫より、牀のモザイクより、各種の器具まで、又た女郎屋の看板や異形の燈籠の、一として奇妙珍無類ならざるは無い、醜態ならざるは無い。實に驚いたもので、これでは婦人に限つて秘密に附する譯だ。予の後から三人連の若い米國人が案内者を連れて入つて来て、苦笑しながら壁畫などを見廻して、英語の耳のある予が居るのにも容赦せず、「二千年前と同じ事だぞ」とか、「人生を樂んだものだな」となど大聲で喋つてゐた。予は秘密室の事だと思つたから、番人には高札の表を犯して二十文ソツト握らせたら、これも「多謝」を以て報いた。此室を出てからも、其處らあたりにある番人が、「秘密室を見たか？ 教へてやらうか？」と頻りに云つたのは、孰れも銅貨が欲しばかりなのだ。

繪畫室には例によつて、以太利名匠の作品なり、チシアンンの「ダイアナ」は卑猥の評あり、ギド、レニの「小兒の基督」は愛らしい。此室でも例によりて番人が、おせつかい振に案内して、觀覽人がポケットに手を入れるや否やを覗つてゐる。規則を正直に守る西洋人をば、後指さして笑つてゐた。以太利の乞食は一掃せられても、乞食根性は、既に人心の發育に入つてゐるのである。

橄欖の野

此日午後、予は馬車を驅り、丘上又た郊外に遊び、更に灣頭の風光に親しみ、又た火山の煙を遠く眺めたが、扱て人の好きくてもあらうが、我等の目からは、日照らす以太利の、この美しと云ふネーブルスとして、遂ひに我が瀬戸内海に及かずと思つた。風景なら矢張り日本の事であるぞ！

ビー、オー會社の郵船によりて、埃及ポートサイドに渡らんが爲に、ネーブルスを發してプリンチンを指したのは、二十二日の是れ亦た夜行汽車、停車場まで來る途中で、ホテルで雇つてくれた馬車が一リラの割増を強請つたが、この「馬鹿野郎！」と罵つて、トウ／＼呉れ無かつた。停車場構内には、米國歸りの移民が、箱や鞆の間にゴロ／＼してゐた。折角遠方まで往つても金儲の筈にあり付か無いので、スゴ／＼と本國故郷へ戻つて來たものだ。ホテルの客引は、ドウも以太利政府の移民政策が悪いのだと悪口してゐた。

改札口では、ヴェニスと同じく、驛員が其の荷物は大きいぞと小言を吐かしたから、ハア、

心得たりと、二十文——驚く勿れ、僅に入錢を與へると、「多謝！」て通した。

汽車で夜が明けると、南以太利の野が窓前に展開した。予はこれまで以太利を夜汽車ばかりで通つて来たのであつて、爰に初めて荒涼として佗しき田舎の景色を眺め渡したのである。地は礫礫なる一面の白き岩石、それを割り砕いて、橄欖の木を植ゑたるが老い繁り、石は積まれて家を成し、寺を興し、また只だの石山に重つてゐる。このあたりは何處までも石と橄欖との野である。

プリンヂシに着いて、クック會社の者に船便を尋ねてゐると、直ぐ背後で日本人らしき英語が聞える。振り返つて見ると果して日本人だ、互に刺を通ずれば、其人は南滿鐵道の精谷工學士であつた。而も氏も亦たポートサイドに赴き、予と共に讃岐丸に搭じて歸朝の途に就かんとするのであつて、思ひ掛け無くも、これより三十餘日の旅の道運を獲たのであつた。

アイシス號の船室に荷物を入れてから、精谷君と共にプリンヂシを見物したが、まことに荒れ寂れた市だ。往古は希臘と交通の要港で、詩聖ツァーシルも希臘よりの歸途、この處で白玉樓中へ還つたのであつた。又た十字軍時代には頗る殷富なる港であつたが、其後大いに零落して、今は只だ埃及への急行船の寄港場となつてゐるばかり。羅馬時代の石柱は一は折れ、一は

破れて悲しげに水際に立つてゐる。されば此市には何の見るべきものも無いが、何處までも人道車道に立派な石が鋪き詰めてある、又た港灣の設備も日本などでは迎も見受けられぬ程に届いてゐる。

ブラ／＼してゐると、案内しやうか、ガールを見せてやらうかと吐かす男にも逢つた。市場の果物店には、見事な石榴、無花果、葡萄が積み重ねてあつた。拳大なる柿も出てゐた。澁いと云ふことだが、日本では今頃旨い柿を食つてゐることだと思へば、我も地中海で一つ柿を食つて見たい、明日まで置いたら熟するだらうと、十文で一顆だけ買つて船へ持込んだ。

夜半予等が眠つてゐる中に、アイシス號はプリンヂシを乗出した。昨日は少し雨空であつたが、翌朝は快晴で、アドリアチック海上、希臘の島々——岩がちで不毛礫礫たる島々の近くを過ぎ、後にはクリート島の影も見えてゐた。併し地中海の波や、荒んだもので、予は大方船室に引籠つて、ミラン停車場で買ったラフカデオ、ハインの「未知の日本瞥見記」を讀みつゝ、憎眠を食つた。昨日の柿も食つたが、甘くなつてゐた。

(553) 二十五日未朝に船は埃及ポートサイドに入つた。予の倫敦を去りてより二十二日に亘つた歐洲縦断の旅も爰に終を告げて、日本人常宿のコンチネンタル、ホテルに入つた。

蘇士以東

大金字塔

讚岐丸の入港は、いづれにせよ明日の事なり、今日の間にカイロへ赴きて、ケオツプス王の大金字塔に遊ばんものと、予は糟谷君と共に朝の汽車に乗つて出かけた。埃及の汽車なりと侮る勿れ、これを英國人の經營するものであれば、車掌等が土耳其帽を被つた色の黒い埃及人も、車は美しい分室になつてゐて、廊下が附いてゐる。唯だ併し砂漠の中を往くのだが、砂塵の甚だしいのには閉口した。

漠々たる砂の海を蘇士運河に沿うて往つた。途中の停車場で、土耳其帽の土人や、黒い布を頭から深く被つて口まで包み、鼻柱には金色の輪塔形の物を附けてゐるから、黒い眼ばかりの光つてゐる女共が昇降する。密柑や、土徳利に入れた果物の汁などを賣りに来た。砂漠の中、鐵路の沿岸には、切りに植林を試みてゐるのは中々の苦心である。イスマイリアでは、停車場前に荷を附けた駱駝が長い頸を擧げてウヨウヨしてゐた。鐵道は此處から運河と離れる、又た

次第に駢作されてゐる地方へ入る。十一月の末であるが、恰も麥の刈入時になつてゐたし、又た盛に棉花の收穫をしてゐた。牛馬が畑を鋤いてゐる、駱駝は俯し屈んで、刈束や棉を積んで貰ふと立ち上がる。大きなアラビア人が、小さな驢馬に跨つて街道を往復してゐる。鐵路の右には霸王樹が繁り連つてゐる。

四時間でカイロへ着くと、大きな停車場だが、プラットホームにはホテルの客引、案内者乃至繪葉書賣りが入込んで雑沓を極めてゐた。予等が停車場の食堂で中食をしてゐると、四五人の案内者が包圍攻撃を行ひ、我もくく金字塔へ案内しやうと云ふのが煩くてたまらぬ。素直な返事をしてゐては追拂へるもので無いから、遂に勵聲一番「馬鹿野郎！ 其處どけ！」とやつたら、漸くの事で引き下る、我等は始めて落着いて食事が出来た。

出かけると、又たもや先刻の案内者共が寄つて来る、中にも片目の男は四十間でも五十間でも附き纏つて来る、何程聲を勵まして追うても去らぬ。其上に云ひ草が可笑しい。私は貧乏者で、三人の子供がある、金は御心任せて可いから、連れて往つてくれろと泣言を云ふので、予等はトウ／＼噴き出した。此奴は可笑しい！ 連れて往かうぢや無いかと、それで案内料は三リングだぞと定めてやると、ニコ／＼して先に立ち、サア此の電車に御召しなさいと云ふ。

然るに又た一人白い長衣の若い男が、我等に尾いて電車に乗り、しきりと向ふへ往つたら駱駝に乗つてくれと云ふ、嫌だと嗷鳴り付けると、暫くは黙つてゐるが、又たしても思ひ出したやうに駱駝に乗らぬかと聞くのだ。煩い奴だなどと叱り飛ばしてもニコニコしてゐる、こゝろが亡國根性を遺憾無く現はしてゐた。



(供子と房女は上馬) 族家の人及埃

ナイル河畔で一旦電車を降りた。此の河に架した大鐵橋は、船を通す爲に丁度開いた處で、待合してゐると、赤服の英國兵や土人が多勢集つて來た。案内者は、掏摸がゐるから時計や財布の用心をしると度々注意する、白衣の男は又たもや駱駝乗を促した。扱て橋が再び架る

と、まだ制止の鐵鎖が渡してあるのに、英國兵はツント、其鎖を越して橋を渡つて往く、亡國へ來てゐるのだから、それは、威張つたものだ。

橋向ふで又た電車に乗る、駱駝屋はまだ性懲りも無く附いて來る、而も自分で電車賃を拂つて、ドウにかして物にしやうとする、その辛抱の強いのは驚いたものだ。乗換場に来て、暫く待合してゐる中も、駱駝屋はまだ同じことを繰返して勸めて見たが、予等がモウ相手にし無いので、いよいよ駄目な事だと初めて解ると、今度は、駱駝が嫌なら、運氣縁談の占ひをしやるから、一シリング呉れないかと、早や砂の中に圓いものを描きはじめた。糟谷君は「ナニ占ひだ! 貴様等の占ひて何が解るものか? 一つおれが占つてやらうから、一シリングよこせ!」などと調弄つた。五千年來卜筮に長じたるを誇れる埃及人も、日本人に合つてはホウホウの態で、彼もトウ、引退つて、この先きはモウ電車に乗つて來無くなつた。

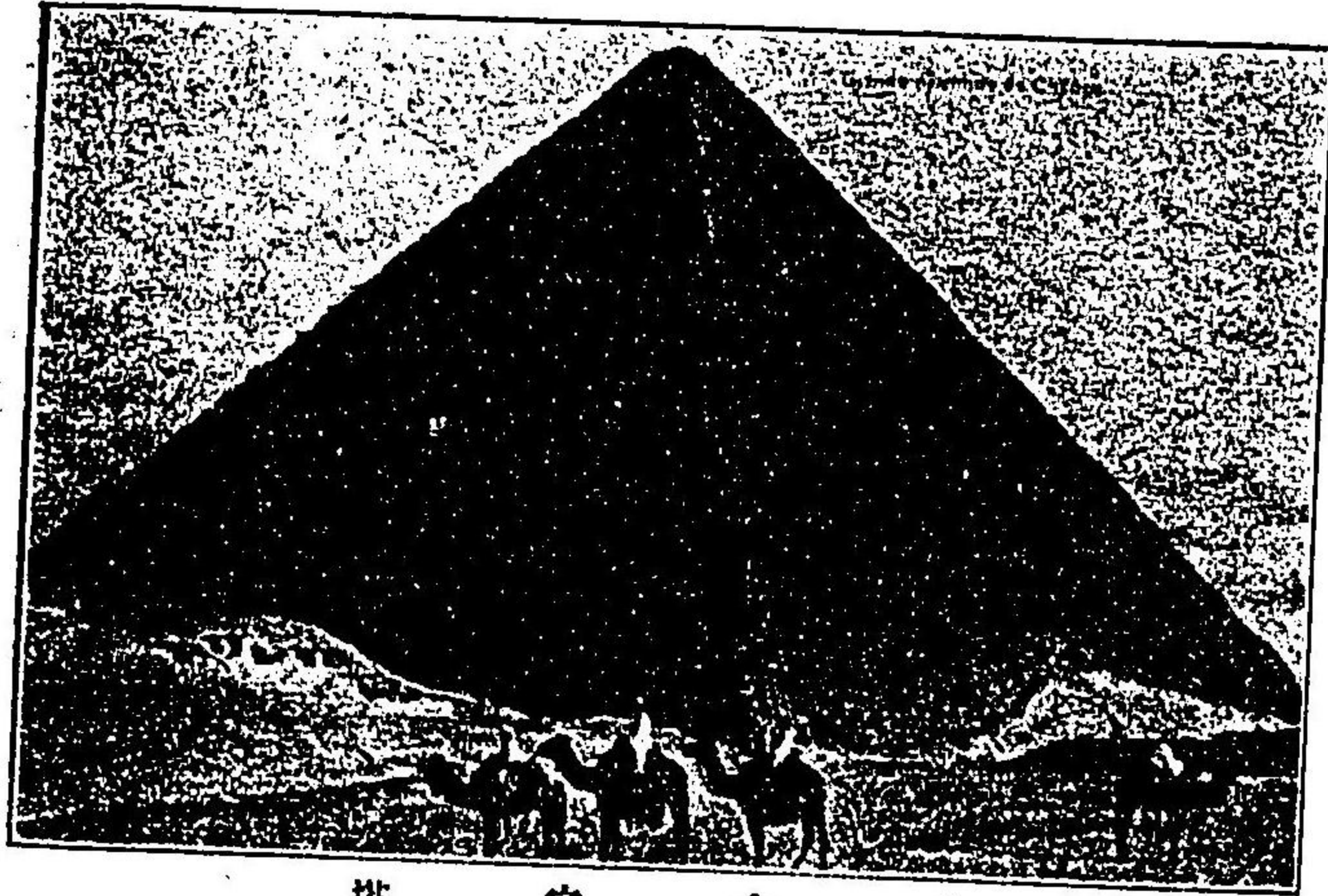
今度の電車には埃及の美人が二人乗合つた。眞黒い西洋服に——黒いのがおめかしなのだ——例の通り黒い布を眉深く被つて、鼻から下には白い紗を長く垂れてゐるが、未婚者なる故か、ハイカラなる故か、かの輪塔形のを鼻柱に付けてゐる。眉黒、黒目で、鼻は低く、それに厚化粧、全く以て日本風の美人だ。多分高加索種か、希臘種であらう、そしてタレオパトラ

の血裔を引いてゐるのであらう。察するに埃及教王の後宮三千の美姫の中のものか。埃及教王が後宮の美人は、夜は内職に出稼するので、朝の九時までに御殿に歸つてゐれば可いことになつてゐるとは、後て案内者の話であつた。

五千有餘年の昔、爰に榮華を極めたる埃及王の都メンフィスも、今は一本一草も無き沮洳たる沼地か、然らずんば漫々たる砂漠となり、其間に「時は凡ての者を嘲る、されど金字塔は時を嘲る」と埃及人の俚諺の如く、此處彼處に幾多の金字塔が太古より依然として巍立し、其の最も大なるは、即ち予等の眼前に隆起せるケオツプス王の金字塔である。

ケオツプス王の位に即くや、先づ我が墳墓を造營せんとし、數十萬の奴隸を苦役し、三十年の歳月を費して成就したるが即ちこの大金字塔で、一塊の石を運ぶにも五百哩の遠きより、砂漠の中を曳き來つたので、奴隸は苛虐なる答の下に、焼くが如き太陽に焦がされつゝ、大根と水とて辛うじて腹を満たしながら、國王が虚榮の犠牲となつたのである。然るにケオツプスが餘りの壓制に、人民も憤激して、彼れ死すとも、遂に此の大墳墓に葬ることをせずして、復讐したと云ふ事である。

予等が電車から降りると、案内者がソロソロ群がつて來る、驢馬屋、駱駝屋が攻め付ける、



大 金 字 塔

寫眞賣、繪葉書賣が集る、巴里の墮落美術學生らしい白面長髪の男が、二三枚の寫眞を持って

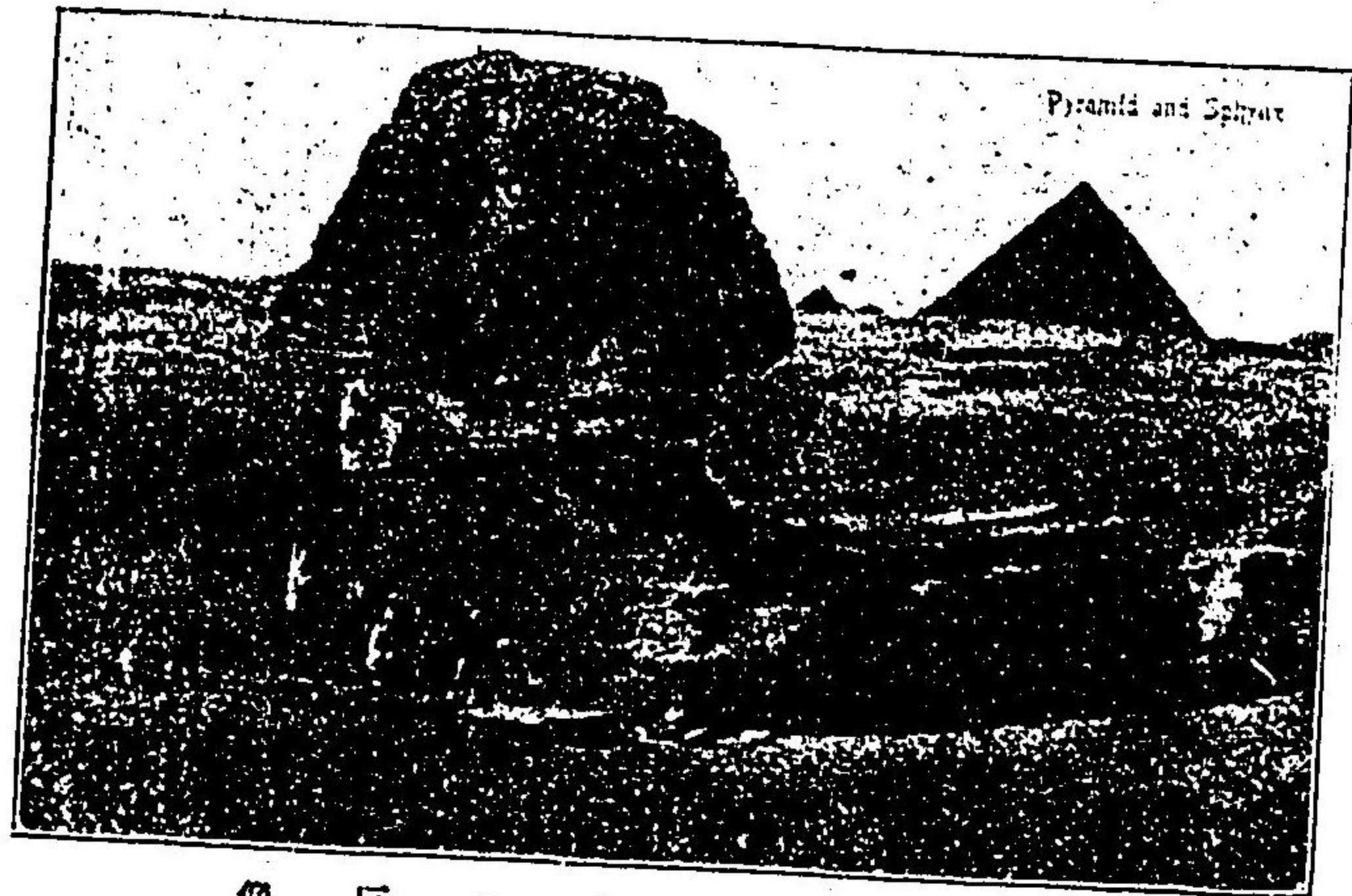
ガヤ／＼喋る。その煩きこと實に言語道斷なり。予等は幸に彼の三兒の親なる片目君を連れて來たので、この煩さを避けることは出來たが、金字塔を見るには官設の案内者が入用との事で、一人長い黒衣に白頭巾で、長い杖を持った男を雇つた。

ケオツプス王の金字塔は、電車から二三町より離れてゐない。金字塔は、只だ何の事は無い、四面三角形の石の山だ。黄色な砂石や、貝の化石で築き上げたもので、昔は其上を包むに一面の白き磁石を以てしたものだから、沙漠を照らす熱帯の日を反射して、この金字塔は何程眩き美觀を備へてゐたことであらう。然るに此の外皮の磁石は後に悉く奪ひ去られ、新たなるカイロ市の建築材となりて、今は只だ砂石ばかりにな

つてゐるのを、上は風雨に蝕される、下は砂に埋れて、石の破片は近傍に散在してゐる。而して此のケオツプス金字塔に近く、是れよりは小なる金字塔で、其頂邊に尙ほ礎石を存するものがあるは、ケオツプス王の後継者カフレン王の築造したものである。

ケオツプス金字塔の頂邊まで八分間て上下して見せるから、一シリング呉れぬかと云ひ寄る土人がある。サウカ、おれでもやつて見せるが一シリングくれるかと、精谷君は例の如く調弄ふ。砂に埋れた墓穴の中を照らして見せる、マグネシウム一本が一シリング宛だとして、二本燃やしたが、少しの金をくれてやるとブウ／＼怒つてゐた。赭色の花崗石で建てた宏大なる神殿が、これも外圍は砂に埋れてゐる、之を見るにも入口に番人がゐて、若干の金を強請つた。

二基の金字塔の間には、アラビア人が「恐怖の父」と稱する巨大なスフィンクスの人面獅身像が、これ亦たケオツプス王の昔より、森嚴不動の威貌を以て五千年の世の有爲轉變を觀じ、冷眼以つてラムセス二世、モーゼ。シーザー。はたナポレオン等の英雄豪傑を睥睨したのである。スフィンクスは埃及人の崇むる大智大能の神に像つたもので、幾十世紀の間、人民は其礎石の階段を登りて、兩脚の間に置かれたる祭壇に跪き、香を焼いて禮拜したものである。アラビアの昔話に、旅行家ラチーンが、國王から世界を歴遊して見たるものの中、最も驚くべき



スフィンクス像

ものは何ぞと問はれると、スフィンクス像の頭の巧妙なる恰好であると答へたとある。併し此

の偉大驚異すべきスフィンクスも、沙漠には勝てぬと見え、三千五百年の昔にも既に其頭ばかりを砂上に露出して埋没してゐたのを、時の王トトメスが、獅子狩に出た序、此の神像を禮拜に来て、其陰で轉寢をしてゐると、スフィンクスが夢に現はれて、砂を掻除けてくれよと託宣したので、王は倉惶として其の神勅を奉じたとの傳説がある。其の以來も幾度か埋もれ果て、は掘り出され、今日掘り出してあるのを見れば、周圍の地より數段窪んだ處に立つてゐる。

予は寫眞機を出して、スフィンクスと金字塔とをレンズの中へ入れやうとすると、彼の墮落美術生が、ヤア寫眞だ／＼と嘯し立てる、駱駝を寫さぬかと云つてはレンスの前に曳いて来る、白頭巾、白衣、長杖の策

内者や、駱駝引共が立ちたはたかるのであつた。米國婦人が一寸驢馬に乗つた爲に、十シリング揺られてゐたのを、手等の片目案内者は、十シリング出せば馬が買へるわいと呟く。又た一人の西洋婦人は彼の美術生を捉へて大聲に言ひ罵つてゐたが、多分寫眞でも買つて金をごまかされたのであらう。

「呬、煩い〜、人氣が甚だ悪い、コンナ處へは二度と來るものには無い。女ばかりの旅客などが、ツカ〜來たらヒドイ目に逢はされぬとも限らぬ。手等はカイロで片目君を拾つて來たのが却つて仕合で、此處等にある奴原と悶着も起さ無かつたが、今まで尤もらしい事を云つて案内してゐた官設案内者も、後になつて五シリングを呉れと強請つた、それが定額である云つた。併し片目君は四シリングで追拂つてくれた。それにしても驚くべき案内料かな!

金字塔は埃及亡國の大記念碑であるが、其の周圍を徘徊する土人亦た亡國の民なることを證してゐる。予は思へらく、以太利は墓守の國だが、埃及は墓の國である! 埃及と云へば必ず聯想する金字塔は、即ち墓である。

歸路を急いだので、埃及大王ラムセス二世の木伊乃を藏めた博物館を見ず、又た殷富なるカイロの美しき都は素通りしただけであつた。歸りの汽車で、同室のアラビヤ人が、我等と言語

が通ぜぬのに、しきりと手眞似て何か話したさうにする、やうやくの事に彼が棉花商人なることだけは分つた。其の舉動は何となく、我等日本人を見るのが嬉しいと云ふ様子であつた。日露戰役以來、亡國弱國の人民は殊に日本に信服し、又た頼もしきものに思つてゐるので、此の棉花商人も其情を洩さうとしてゐるらしかつた。予が此の車室で喫煙しても可いかと尋ねる積りで、煙草をくはへてマッチを摺る手眞似をしたら、棉花商人はツカ〜と室を出た。どうするかと思つたら、他の室からマッチを持つて來てくれた。

日は既にカイロで暮れたので、汽車は闇の沙漠を走る、運河は船舶の針路を示す、前後の探照燈と、また往さかふ船の火光とで、星月夜の如く、一しほの光景であつた。

煩きポートサイド

ポートサイドは煩き港である、騒々しき市である。亡國であるのに、船着きなので、人氣が野卑になつて、人の迷惑など顧み無くなつてゐるのである。ホテルの前に居ると、様々な物賣りが來る、靴磨の小僧が來る、三四人づゝ組合の歌ひ女が來る、追へども拂へども亦た來る夏

の蠅だ。埃及巡查は之を見て知らぬ顔をし、只だ客人が追拂つても退かぬ奴を折々遠ざけてゐるだけだ。町へ出ると、サア案内しやうと云ふ奴が何人も寄る、頼みもせぬに店屋を教へる。ウカ／＼頼めば何處まで案内されるか知れたものでない。予等が二三軒買物をするのに、長襦の白衣に土耳其帽の大男が何處までも着いて来て、追つ拂つても執拗に付き纏ふから、糟谷君が遂に「貴様は何だ？」と嗚鳴り付けたら、「イヤ私が付いてゐると、他の悪い奴が附いて來ぬから、貴方がたは安心だ」とほざいたので、「ナニを云ふ、ボートサイドには、埃及教王の巡查があるぞ、貴様などに保護を頼まぬ！」と聲を荒立てた。それで彼奴はニコ／＼、三軒も歩いて一文も貰はずに引き退つた。

此處でも彼處でも「寫眞！ 寫眞！」とて招く、淺草奥山式で、大道まで出て人を引張る。何てあらうかと其店へ連れ込まれると、奥の一室へ通して見せるものは、佛國製の怪しからぬ寫眞だ、猥褻なる書籍だ。これは透し輸入りのトランプだ、買つてくれとて、自分で三シリング位から段々値を下げながら、何處までも尾いて來る。之を買つて見れば怪しき透繪も何も無い、最下等な只だのトランプで、紛かし物なのださうな。

防波堤上には、運河の開鑿者レセップの巨像が、左手に巻を開き、右手東を指して、其の壯

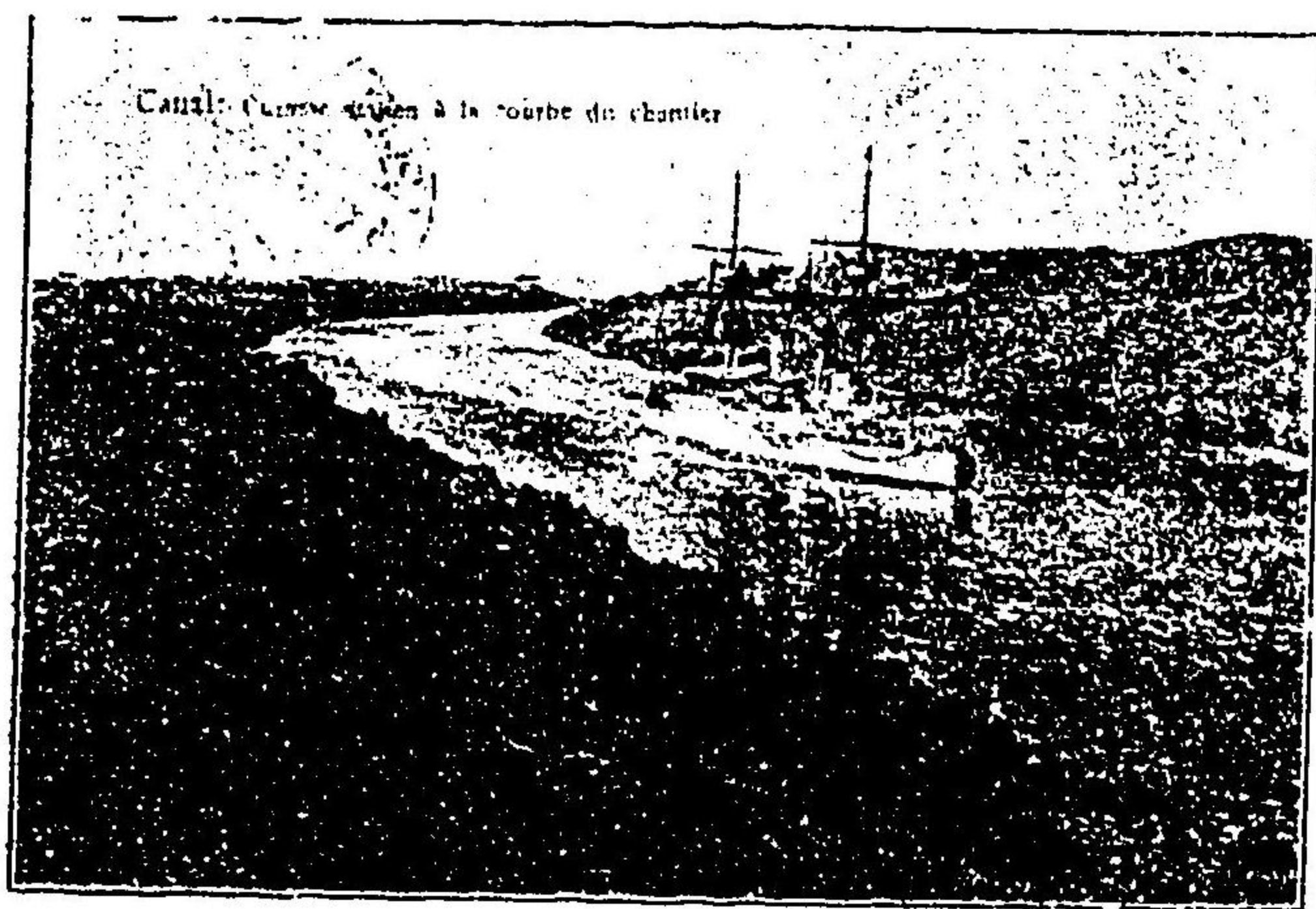
圖を語るものゝ如し。像下には絲を垂れて小魚を釣る者がゐる。海中の棄石には海苔が紫色に附いてゐる、此處等に粗象を植ゑたら好からう、そして歐洲人に海苔を食はせて、江戸趣味を注入したいものだなと餘計なことを考へた。しかし此の節英國人の中には、通な料理に、生海苔の酢の物を賞美するさうだから、ボートサイドの海苔採收も強ち空策でもあるまいぞ！

海上の三十五日

我等が乗るべき讃岐丸は、地中海の風浪の爲に、豫期より數時間遅れて入港した。予等は二十六日の夜十時になつて、これより三十五日の運命を托すべき郵船に乗り込んだ。日本の國旗を掲げた船に乗つたので、モウ半分本國へ歸つたやうな氣になつた。予と同室の客は田中醫學士で、一等室の日本人は、予等此港からの二人と合して三人となつた。船長は本間氏、郵船會社外國航路中の年少者であるが、肥つた體格で、斯人元來酒徒であるが、航海中は一滴も口にせずして職責を重んずる堂々たる船長だ。又た氏は家に實子無ければ、常に六人の孤兒を養ふと云ふ義俠家である。事務長は年少なる吉田君、これまた好人物。これだから船中は面白く、

船員も船客も相睦みて故舊の如く、單調なる海上の長さ日を愉快に明し暮した。思ふたより狭き蘇士運河も過ぎたり、地圖で想像したより廣き紅海も過ぎたり、印度洋の波は油を流したやうに静かだ。折から明月の夜に、予等日本人はブリッヂ、テツキに上り、正宗と福神漬とて、フン反りかへつて觀月の宴を開いた。

日の經つたのを指折り數へつゝ、二週間目にはコロンボへ着いた。此港は印度洋を真向に受けて、天然の港灣をなすもので無く、貿易風の季候には、岸に碎くる波が、高き椰子よりも高く飛ぶ荒海に、壯大なる防波堤を築いて、一大寄港場としたる英國人の事功には敬服せざるを得無い。此のコロンボと云ひ、又た新嘉坡と云ひ、香港と云ひ、予の船の寄港したるところは、皆英人の力に成つた良港で、巽に



河 運 士 蘇

英國に在りてアングロ、サクソン人の優越せる所以を學びたる予は、又た東洋の要港を経て、更に彼等の發展力の堅實偉大なる所以を學んだのである。英國の信用の大なることは今更云ふまでも無い。亞弗利加の蠻地ですら、英國人は詐ら無いもの、ブリチシュ、プロミス（英國人の約束）は確かなものだと思つてゐるさうだ。又た一國の貨幣は其國の信用を量るメートルであるが、歐洲は勿論、東洋の諸港を經るにも、英國金貨か、唯だ白紙に黒字を印刷した英國銀行紙幣かを持つてゐるさへすれば、信用狀を携へてゐると少しも變らず、宿屋でも店屋でも喜んで受取り、予等は其の換算で寧ろ儲けることがある。この信用の點になると、獨佛などの貨幣は遠く英國貨幣に及ばない。西班牙の紙幣などになると、國外では半額にも換算してくれないのである。予が羅馬の大石像屋で買物をした時、英國貨幣でも好いかと尋ねたら、英國貨幣は世界最良の貨幣だ、好いどころか、それで拂つて貰へれば難有い譯だと喜んだ。

コロンボには、日本から來た神奈川丸、孟買行の某船、それに予等の讀枝丸、都合三艘の日本船が、旭日旗を防波堤内に翻へしてゐたのは實に愉快であつた。國旗の立つ所には我國が在る、世界の海に日本船の横行するのは、即ち日本帝國が出張して往くことなのである。コロンボに上陸して馬車を驅り、雜沓して汚穢なる土人の市場や、織鹿なる彫刻の佛寺、博

博物館等を廻つた。腰巻一貫の裸女、荷車を曳く背一杯に梵字を烙印したる水牛、車を曳いて馬の如くに驅る小牛など、處が天竺だけに妙なものがあつた。葉の大なる巨竹と、天日を蔽ふパシヤン樹との繁る公園の芝生には、土人の樂隊のワルツに連れて、白人の子供と混血兒とが踊つて、傍觀してゐる土人の子供を仲間に入れず、未開國に於ける白人の威光を子供ながらにも示してゐた。

砂赤く、椰子、芭蕉の緑深さが中に滲洒たる別天地は、これ即ち此國を支配する白人の町である。眞黒な裸體の小兒が口を指さし、腹を叩いて『ジャバン！アツ〜！』と叫んで我等の馬車を追うて走るの



Singhalese Girl carrying water Chatty, Colombo.

女のポシヤン

は、飢いから錢をくれよとの事だ。

コロンボで忘れられぬのは、ホテルで食つたライスカレーで、其味の甘さは今に忘れぬ。しかし予は更に忘るべからざる悲しき記念の日を爰にて迎へたのである。佛者ならば是れも御佛の縁だと云ふてあらう。地上の極樂にも喩へられたる、此の錫蘭島に着いた十二月十日は、實に我が亡兒が一年の忌辰であつたのだ。

此處からは新嘉坡へ出稼する土人が、百人許も甲板客として乗り込んだ、船では船艙の上に轉がして置いて、水ばかりくれれば可い、極めて世話の焼けぬ生きた荷物だ。無論印度人は國俗として、他國人の料理したものを食はぬ、よし人種が一つでも、宗教と種族とを異にするなら、決して火を共にせぬのである。しかるに彼等は日本人を甚だ頼もしく思ひ、態々日本船を待ち合して乗るのだ。歐洲船に乗らうものなら、人種的感情の強い西洋人からして奴隷扱ひにされるのだが、日本船なら、船長はじめ人種の差別を立てず、親切に御客様扱ひをしてくれるので、満員だからと断つても、それでは次ぎの日本船の来るまで、又た田舎へ引返さなければならぬ、折角此處まで出て来たのであるから、ドウでもと強ひて割り込むのである。彼等は皆普通の労働者ばかりかと思つたら、中には服装は賤しく、例によつて土鍋で椰子の